あつたら、その時こそその心の痛手は何んなだらうと、思つたからです。それからあのリューデイエさんの私どもに對する疑惧の謂れもお分かりのことと思ひます。實を申すと、私は、あのロタリオさんとテレーゼ嬢との結婚が再び有望になつてからは、私はあの女に對するロタリオさんの愛情をもり立てるやうなことはしませんでした。それはここに白狀いたします。」

誰もこの物語に就いては意見を述べる人はなかつた。婦人連は二三日經つて、その書類を返したが、それに就いては別に何事も述べなかつた。

一緒に集まつた時など、一同の心を樂しませるやうな事柄は手近にいくらでもあつた。それにこの界隈には景色の好い所が澤山にあつたので、連中はよく、或ひは單獨に、或ひは一緒に、馬や、馬車や、又は徒歩で、その邊を逍遙したものであつた。或日さう云ふ機會に、ヤルノーはギルヘルムに對する自分の使命を果す積りで、例の書類を取り出して見せた。が、別に何等の決定をも促すやうにも見えなかつた。

「私も實に妙な事情になつて來ましたが、」やがてギルヘルムは云つた、「この際私としてはただ貴方に對して、最初すぐにナターリエさんの面前で、しかも純な心から申し上げたことを、もう一度繰り返せばそれで可いと思ひます。ロタリオさんやその友人の方方は、どんな斷念を私に要求

なさつても宜しう御座います。私はここにあのテレーゼさんに對するあらゆる權利を貴方がたのお手に返却します。どうかそれに對して形式上の責任解除を貰つて來て下さい。なあに、貴方、こんな事を決心するに、別に大した思案は要りませんよ。實は近頃氣づいてゐることなんですが、ここで始めて私に會つた時のあの熱心な態度の面影なりとも續けて行かうと、テレーゼさんは大變骨を折つておゐでなのですよ。あの人の愛情はもう私から去つてゐますよ。いや、寧ろ私は最初からそれを獲てゐなかつた。」

「かう云ふ事柄といふものは、」ヤルノーはそれに答へた、「いろいろ論議して紛糾、沸騰を招くよりは、寧ろ默つて氣長に自然の解決を待つてゐた方が可いでせうよ。」

「いや、私は寧ろかう云ふ事件こそ、」ギルヘルムは云つた、「本當に冷靜で明快な決斷が出來るものだと思ひますね。私はこれ迄隨分愚圖だとか曖昧だとかいふ非難を蒙つて來ました。が然し、今丁度私の方ですつかり決心をしてゐるこの際に、何だつて、これ迄私が非難せられて來たその缺點を、貴方の方で持つて廻らうといふのですか。一體世間の方方が私どもを訓練しようとあんなに骨を折つてゐらつしやるのは、ただその方方が御自分を訓練したがらないといふ事實を私どもに感じさせるためでせうかね。いや、どうぞ、こんな不均合な關係から脱却するといふ愉快な

感じを一刻も早く私に與へて下さい。私の方には少しも悪い心はなかつたのですから。」

これ程頼んで置いたにも拘らず、何の返事もなしに數日が過ぎてしまつた、又友達の間にもそれ以上何の變化も認められなかつた。日常の會話は寧ろ平凡な一般的なものばかりであつた。

七

或日ナターリエとヤルノーとギルヘルムなどが一緒に集まつてゐた時、ナターリエはこんな事を云ひ出した。「ヤルノーさん、貴方大變考へ込んでゐらつしやいますね。私もうずつと前から氣が附いてゐましてよ。」

「いや、まつたくです、」ヤルノーはそれに應へた、「實はもう永らく準備をしてゐたある仕事を考へてゐるんです、今度は是非ともそれに取り懸からなければならないんですよ。貴方はもうその大體は御存じでゐらつしやいますがね、改めてこの若い友人の前で話してもいいかと思ひます。それに加はつて頂けるかどうかは、一にこの方のお心持ちにあることなんですからね。處で、皆さんにももう永くお目に懸かれないでせう。實は私は亞米利加へ渡らうと思つてゐる所なんです

よ。」

「へえ、亞米利加へ、」ギルヘルムは微笑しながら答へた。「私も貴方がそんな冒險をなさらうとは、況してこの私が道連れに選ばれようなどとは、眞個思ひも懸けませんでしたよ。」

「いや、私どもの計畫をすつかり御了解になつたら、」ヤルノーは云つた、「貴方もそれを冒險などとはおつしやらないでせうし、恐らくそれに多大の興味を感じられることでせうよ。まあお聽きなさい。世界の大勢に關するほんの一寸した知識を得さへすれば、吾吾の前には非常な大變化が迫つてゐるといふことや、もはや如何なる私有財産も殆ど到る處で安全でないといふことが分かりますよ。」

「世界の大勢なるものに就いて、私には何等明瞭な概念もありませんし、」ギルヘルムは口を挾んだ、「私が自分の私有物を問題にするやうになつたのも、つい近頃のことなんです。いつそこんな物はいつまでも忘れてゐた方がよかつたやうですね。それを保管して行かうといふ屈託だけでも、もう神經衰弱になつてしまひさうですからね。」

「まあ仕舞ひまでお聽きなさい、」ヤルノーは云つた。「屈託は年寄りのすることですよ。お蔭で、若い者は一時屈託なしでゐられようといふものですよ。人間のする活動の平衡は、殘念ながら反對とか對照とかによつて齎されるに過ぎないものです。處で、現今の狀態では、ただ一個所だけ

に財産を有つてゐるとか、ただ一個所にだけ金を預けて置くとか云ふことは、餘り褒めた話ではないんですね。さうかと云つて又方方の場所でそれを監理すると云ふのは、なかなか困難なことなんですよ。そこで私どもは又別な方法を講じたのです。即ち私どもの古い塔から一つの團隊が出掛けて行く。そして、それが世界の各所にひろがりもするし、又それには諸方から仲間入りも出來ることになつてゐるのです。で、私どもは、ただ國家的革命がその中の誰かの財産を悉く沒收してしまふと云ふやうな、獨特の場合を豫想して、お互の生活を保證し合ふんですよ。私もこれから亞米利加へ渡つて、ロタリオさんが滯在中に開拓して置いて下さつた好い關係を利用しようと思つてゐます。又あの牧師は露西亞へ行くと云つて居ります。で、若し貴方が私どもの同志にならうと云ふ思召しでしたら、獨逸に留まつてロタリオさんのお手傳ひをされようと、私と一緒に行かれようと、それは貴方の御選擇に任せますよ。だが、多分貴方は後者をお望みだらうと思ふんです。だつて、大旅行をするといふことは、若い人に取つては何よりも有益なことですからね。」

ギルヘルムは氣をとり直して、答へた。「その御提議は篤と熟考してみませう。と云ふのは、私の守るべき箴言も、今に、『離るること遠ければ、愈よし』と云ふやうなことになるでせうから

ね。貴方の御計畫も今少し委しく聞かせて頂きたいものですね。所で、こんな事を考へるのも私の世界的知識の缺乏から來てゐるのでせうが、どうもさう云ふ結社には、征服しかねるやうな困難が起つて來さうに思はれますがねえ。」

「いや、これ迄の處では、」ヤルノーはそれに應へて云つた。「仲間もほんの少數であつて、而も正直で、聰明で、琻りした人達であつて、社會的精神の唯一の源泉とも云ふやうな、或種の一般的感情を具へてゐるんですねえ、そのお蔭で大抵の困難は自然除かれることでせうよ。」

それ迄ただ默つて聽いてゐたフリードリヒがその時口を出した。「で、若し御好意をもつてお誘ひ下さるなら、私もお伴いたしますよ。」

ヤルノーは首を振つた。

「ぢや、何か私に惡い所でもあるんですか、」フリードリヒは續けて云つた。「新しい殖民地には若い移住民も入用でせう、それは私が連れて行きますよ。而もまた快活な移住民をですね、それは私が請合ひますよ。それから又、こちらにはもう居られないと云ふ、若い好い女も知つてゐますぜ。そら、あの優しい別嬪のリューディエですよ。可哀さうにあの女も、あんなに煩悶や悲哀を持つては、好い時にそれを海の底へでも捨てるか、誰か琻りした男に引き取られでもしなければ、

まあ、どうなることでせう。で、失禮ながら貴方は、ギルヘルムさん、捨てられた女の慰問に熱中してゐられるのですから、序に一つ奮發するんですね、そして、銘銘女を連れて、この先輩に隨いて行かうぢやありませんか。」

この提議にはギルヘルムも憤然とした。が、わざと平氣を裝ひながら答へた。「あの方に意中の人がないのかどうかといふことさへ、知らない位だし、それに私は、一體に求婚にかけては成功しさうもありませんから、さう云ふ試みはまあまあ罷めにして置きませうよ。」

ナターリエはそれに續いて口を出した。「フリードリヒ、あなたは自分がさう云ふ浮氣者だから、誰でも自分と同じやうな氣持ちで居るものと思つてゐるのね。このお方に相應はしい女心といふのはね、全心を打ち込んでかかるやうな、又男に添うてゐれば、決して他の想ひ出に惱まされないやうな女心なんですよ。例へばあのテレーゼさんのやうな、非常に理性的で純潔な性格の方を相手にすればこそ、さう云ふ冒險もお勸めが出來たのでした。」

「どんな冒險です、」フリードリヒは大きな聲で叫んだ。「戀をするのは一から十まで冒險ですぜ。園亭の蔭か、それとも祭壇の前か、或は抱擁してみたり、金の指環を取り交はしたり、一方蟋蟀の音を聞くといふ風流なのもあるが、喇叭や鑼鼓入りの賑なものもあります、が、要するにみん

な冒險ぢやありませんか。そして、偶然が一切の裁量をするんですよ。」

「私は始終さう思つてゐるんですが、」ナターリエはそれに應へて云つた、「お互の所謂主義法則なんといふものは、ただ實生活の補足に過ぎないのですね。私達はとかく自分達の過失に妥當な法則の衣を被せたがりますわ。だから、本當に氣をお附けなさいよ、あの綺麗な方が貴方を何んな道へ引つ張り込むか分かりませんからね。これ迄だつて、あんなに力强くあなたを引き寄せて、しつかり押さへ附けて居るんですもの。」

「あの女はあれで隨分立派な道を通つてゐるんですよ、」フリードリヒは應へて云つた、「聖者に到る道ですからねえ。成る程少し廻り路かも知れませんが、それだけに一層愉快でもあれば、一層安全でもあるんです。マグダラのマリアは矢張りその道を通つたんですよ。その外にもまだ何れだけ多くの女が通つたか知れませんや。お姉さまの前ですがね、一體あなたは、戀とか愛とかいふものが問題になつたら、全然口を挾む權利はありませんぜ。私の想ふに、貴方は、何處かにお嫁さんの缺員が出來たといふまでは、どうしても結婚をなさらない方ですよ。そして、さう云ふ時でも、例のあなたの親切心から、誰かの生存の足し前に、自分の身を投げ出さうといふ方ですよ。では、今はこの人買ひの小父さんと取引きをして、私どもの旅行團隊に就いて話しを纏め

させて下さい。」
「いや、その申し込みは少し許り遲過ぎましたよ、」ヤルノーは云つた。「リューディエの片はもう付きました。」
「それは又何うしたと云ふんです、」フリードリヒは訊ねた。
「私が自分で結婚を申し込んだのです、」ヤルノーはそれに應へて云つた。
「おや、小父さん、その藝當には面喰ひますねえ。」フリードリヒは云つた、「それを名詞だと見れば、いろいろな形容詞がくつ着くでせうし、同時にそれを主格だと見れば、いろいろな賓辭がくつ着きさうなんですもの。」
「ですが、正直な所を申さうものなら、」ナターリエはそれに隨いて云つた、「他の男に對する戀に絶望してゐるやうな時に、女を手に入れようとするのは、隨分危險な試みですわねえ。」
「處が、私は思ひ切つてそれを遣つて見たのですよ、」ヤルノーはそれに應へて云つた。「で、或條件の下にあの女も私のものとなりました。それに、實際のところ、この世の中に何が尊いと云つて、戀や情熱に熱中することの出來るやうな心情ほど尊いものはありませんよ。その戀が過去のものか、それとも今もなほ戀をしてゐるか、そんな事は問題ぢやありませんね。他人が愛せられ

てゐる戀の方が、私自身に對する戀よりも、私には殆ど一層魅惑的に見えますよ。私は利己心のために少しも眼を曇らされないで、美しい心の力や強さをはつきりと見てゐますからねえ。」
「貴方は近頃あのリューディエさんにお會ひになつて、」ナターリエは訊いた。
ヤルノーはにやにや笑ひながら點頭いて見せた。ナターリエは首を振つてゐたが、やがて立ち上がりながら云つた。「本當に貴方がたは何う云ふ方だか私には分かりませんわ。ですが、何んな事があつても貴方たちに胡魔化されはしませんよ。」
恰度彼女が出て行かうとした時、牧師が一本の手紙を手にしながら這入つて來て、彼女を喚びかけた。「一寸お待ち下さい。御相談が一つあるのですが、あなたの御意見を伺ふことが出來れば結構で御座います。お沒くなりになつた大叔父様のお友達で、先達てからお待ち申してゐるあの伊太利の侯爵が、いよいよ一兩日の間にお着きになることになりました。處で、このお手紙に據りますと、どうも獨逸語が自身で思つてた程流暢に行かない。で、他の一二箇國語と共に、獨逸語の完全に出來る道連れが一人欲しいと云ふ譯で御座います。殊にあの方は政治的の關係よりは學問的方面に交際を結びたいといふ御希望なので、どうしてもさう云ふ通譯の人が必要なんださうです。そこで私は、それにはここにおゐでのギルヘルムさんが何人よりも適任だらうと、かう

思ふんですよ。言學は出來るし、その他いろんな知識を具へておゐでですからね。それに御自身のためから云つても、さう云ふ立派なお連れと一緒に、さう云ふ有利な事情の下に獨逸國を漫遊されるのは、何より大きな利益で御座いませう。祖國を知らない者は、外國を測る尺度を持たないやうなものだとも云ひますからね。で、皆さん、どうお考へですか。ナターリエさま、貴方のお考へは。」

この提議には誰も異議を唱へなかつた。ヤルノーから云へば亞米利加行きの提議は別に支障になるものとも思へなかつた。もともとさう急に出發するつもりでもなかつたのだから。ナターリエは默つてゐた。フリードリヒは旅行の必要に關して、いろいろな諺などを引用してゐた。

一人ギルヘルムはこの新しい提議に對して心中頗る憤慨に堪へなかつた。われ知らずそれが色に出る位であつた。彼の考へでは皆が一刻も早く彼を遠ざけようと申し合はせてゐるのであることは餘りに明かであつた。殊に好くないのは、皆がその腹を何の容赦もなく公然と見せ附けてゐることであつた。リューディエの言葉から心に起つた疑惑や、彼自身見聞したさまざまな事柄が、再び彼の心に活き活きと蘇つて來た。そして、ヤルノーがいろいろ自分に說明してくれた時の自然な態度さへ、今はただ一種の技巧的表現としか思へなくなつた。

で、彼は心を引き緊めながら答へた。「兎に角、その提議はなほ篤と考へて見た上のことにいたしませう。」

「多分御即答が必要だらうと思ひますよ、」牧師はそれに應へて云つた。

「いや、今はまだその決心が着きません、」ギルヘルムは答へた。「兎に角そのお方の御到着を待つて、その上でお互に氣が合ふかどうかを見てもよささうなものぢや御座いませんか。ただ前以つて御承知置きを願ひたい主要條件といふのは、あのフェーリックスを何處までも連れて廻はりたいと云ふ一事なんですがね。」

「どうもその條件は同意を得ることが覊かしいでせうね、」牧師は應へて云つた。

「ですが私は何故、」ギルヘルムは聲を擧げて叫んだ、「他人からそんなに條件を極めて宛てがはれなくちやならんでせう。又苟も自分の祖國を見て廻はらうと云ふのに、何故伊太利人などの道連れを必要とするんでせう。どうも合點が行きませんよ。」

「それは若い者といふものは、」牧師は著しく眞面目くさつて云つた、「常に人に伍して行くべき理由があるからですよ。」

ギルヘルムは、目の前にナターリエが居るので幾らか自分の心持ちも和いでゐるやうなものの、

この上さういつまでも我慢は出來さうにも思へなくなつて來た。で、それを聞くと、ややせき込んで云ひ出した。「どうか今少し熟考の餘裕を與へて頂きたいものです。自分はこれからもなほ人に伍して行くべきものか、それとも寧ろ感情と叡智の已むに已まれぬ命令に從つて、何うやら慘な永久の奴隷狀態になりさうな、さまざまな羈絆を振り切つて去るべきものか、今直き極められるだらうと思ひますから。」

彼はいたく昂奮した氣分でかう云つた。が、一目ナターリエの顏を見ると、かう云ふ激した瞬間に於ては彼女の姿と氣品とは益深く彼の心に迫つて來たので、又いくらか心が和いだ。

「さうだ、」ギルヘルムは自分一人になつた時、獨語のやうに云つた、「まあお前の本音を吐いたがいいだらう。お前はあのナターリエに戀してゐるのではないか。人間が全力を擧げて戀する時には、何んなものだかと云ふことを、再びまざまざと感じてゐるのではないか。こんな風に俺はあのマリアーネを戀した。そして、あの女であんな怖ろしい間違をした。フィリーネも可愛かつた。が、あの女はどうしても蔑まざるを得なかつた。あのアウレーリエに對しては敬意は湧いたが、愛することは出來なかつた。テレーゼも尊敬はした。けれど、それは親の愛とでもいふやうなものが彼女に對する愛情の形を取つたに過ぎなかつた。處が、今、人間を幸福にする筈のあらゆる

感じがお前の心に輻輳して來た今に及んで、お前はどうしても遁げなくちやならないのだ。ああ、何故又かう云ふ感じに、何故此認識には、抑へ難い所有の慾望が伴なはなければならないのだらう。又何故此感じや此確信は、一方で所有するところがないと、あらゆる他の幸福を破壞してしまふものだらう。一體自分はこれから後太陽とか、世界とか、社會とか、その他何等かの幸福の賚を享樂するやうになるだらうか。いつも、『ナターリエは居ない』と自ら呟かざるを得ないのではあるまいか。しかも、悲しいかな、ナターリエは始終お前の前にありありと見えるのではあるまいか。眼を閉ぢると、そこにありありと姿を現はし、眼を開くと、恰も眩い姿が眼に殘して行く殘像のやうに、他のあらゆる物像の前に漂ひ遊ぶのではあるまいか。既にこれ迄も、忽ち消えて見えなくなつた女性の武者の姿は、始終お前の想像界に顯現してゐたではないか。しかもお前はただあの女を一目見ただけで、丸であの女を識らなかつたのだ。處が、既にお前もあの女を識り、あの女と親しくなつて、又あの女の方でもあれ程多くの同情をお前に示してくれた今日では、嘗てあの女の姿がお前の感覺に深く刻まれたと同じやうに、あの女の性向がお前の胸に力强い痕を殘してゐると云ふものだ。始終求めて已まないのも苛立たしいものだが、既に求め得て而もそれをまた捨てなければならぬと云ふのは、一層恐ろしいことである。俺は更に此地上で何を求め

るべきだらう。更に何を捜し廻はればいいのか。これに比すべき程の寶が、何處の土地に、何處の町に匿されてゐるだらうか。さうだ、いつもただこれより劣つたものを發見するために、俺は旅行を續けなければならないのだらうかな。さすれば人生はただ、一旦終局の目標に到着したら、すぐに又引き返さなければならない競馬場のやうなものだらうか。そして、善いものとか、優れたものとかは、ただ固定した動かすことの出來ない的のやうなもので、それに着いたかと思ふと、すぐに又駿馬に鞭をくれて立ち去らなければならないのだらうか。これと事かはり、世俗の物資を求める者は、到る處に、市場にでも、年の市にでも、勝手にそれを調へ得るのだがなあ。」

恰度そこへフェーリックスが駈け込んで來たので、彼は子供に向つて聲をかけた、「坊や、ここへお出で、お前はいつまでも俺の一番大事なものだよ。お前はあの懐しいお母さんの代りとして俺のものになつてくれた。又俺がお前のために極めた二度目のお母さんの代りにもなつてくれなければならないのだ。處が、今はもつと大きな穴を埋めてくれなくちやならないのだよ。どうか、お前のその美しさ、その可愛らしさ、その知識慾、その能力がいつも俺の胸、俺の精神(こころ)を去らないやうにしておくれ。」

子供は一生懸命に新しい玩具をいぢくつてゐたので、父親はそれを一層よく、一層整理して、

一層目的に副ふやうに直してやらうとした。が、その瞬間に、子供はもうそれに對する興味を失つてしまつた。「成る程お前も本當の人間だな、」ギルヘルムは聲を擧げて叫んだ。「さあお出で、坊や、さあ、小さい弟、二人で當てもなく、出來るだけ面白くこの世を遊んで廻はらうよ。」

此處を離れよう、子供と一緒に、世間のいろいろな物を見て氣を紛らさうと云ふギルヘルムの決心は、今や確乎たる計畫となつた。そこで彼はゼルネル宛に手紙をかいて、金と信用手形とを賴んだ。そして、すぐに歸つて來いと云ふ嚴命の下に、例のフリードリヒの飛脚を使ひに遣つた。他の連中に對しては隨分氣持ちを惡くしてゐたけれども、ナターリエに對する關係は依然として濁りのないものであつた。彼は自分の目論見を彼女に打ち明けた。彼女も、彼が去つて可い、又去らなければなるまいと云ふことは、もはや既定のこととしてそれを認めた。此の一見冷淡らしい女の態度には、何となく物悲しい氣もしたけれど、しかもその美しい物腰や、その態度には、彼の心も十二分に慰められた。ナターリエはギルヘルムに、澤山の町町を見て歩いて、そこに居る自分のお友達の或者とも近づきになるやうにと勸めた。使ひの飛脚は戻つて來た。そして、ギルヘルムの望んでやつたものは悉く持つて來た。ゼルネルはこの新たな旅行に對しては餘り好感情を持つてゐない樣子ではあつたが。

「君が分別のある人間になるだらうといふ僕の希望も、」彼はその手紙の中に書いてよこした、「又ここ暫くお預かりになるのだねえ。一體君方は今何處を皆でほつつき廻はつてゐるんだね。それから又家政の手助けをしてくれると云ふので、大いに僕に希望を持たせたその婦人は何處に居るんだね。當方ではほかの友達もみんな他所へ出て居ない。一切の用務は裁判官と僕との肩に荷なはされてしまつたよ。幸ひに彼も、僕が財政家であると同じ程度に、一廉の法官でね。二人とも面白くもない俗務に慣れてゐるだけが仕合せだよ。では、御機嫌よう。君の脱線もまあ許さるべきかも知れんよ。君の脱線がなければ、この地方に於ける吾吾の關係も、かう都合よくならなかつただらうからね。」

今はもう外部の事情から云へば、彼はいつでも出立することが出來るやうになつた。が、彼の心持ちはなほ二つの障礙に縛められてゐた。即ちかのミニヨンの遺骸は、葬式の日まで絶對に見ることが出來ないのであつた。そして、その式は例の牧師が司宰しようとしてゐたが、その準備はまだすつかりとは出來上がらなかつた。それから又例の醫者も、あの地方牧師の不思議な手紙に呼びつけられて行つた。それは矢つ張りあの竪琴彈きの身に關したことで、その老人の運命に就いても、ギルヘルムはもつと詳しいことが聞きたかつたのである。

かう云ふ狀態で、彼は夜も晝も心身の休まる暇がなかつた。家中の人が眠つてしまふと、彼はよく家の中をあちこち歩いた。昔馴染みの美術品が此處にあるといふことに親しみを感じると共に反感を抱かないではゐられなかつた。彼は周圍の何物をも掴むことも離すことも出來なかつた。何を見ても萬感胸に溢れるのであつた。彼は自分の生涯の全環をずつと見渡した。が、悲しいことに、その環は切れ切れになつてゐた。そして、永久に繋がりさうにも見えなかつた。昔父が賣り拂つたそれ等の美術品も、彼には次のことを暗示するもののやうに思はれてならなかつた。即ち自分も亦、この世の中の好ましいものを靜かに完全に所有することを許されないとか、或ひは自他いづれかの罪に依つてそれを奪はれてしまふべき運命にあるやうに思はれたのである。彼はかう云つたやうな一種不可思議な、しかも悲しい瞑想に耽るとわれを忘れてしまつた、そして、好くわれながら亡靈にでもなつたやうな氣がして、自分の外界にある物に手を觸れて見ても、尙自分は果して生きて居るのか、どうかと云ふ疑ひを抱かずにはゐられない位であつた。

自分が發見したもの、又は二たび搜し當てたものを、いかにも沒義道に而も必至的に、悉く棄てなくてはならんのだといふ激しい悲しみは幾たびとなく彼の心に迫つて來た、が、その悲しみと、それに伴ふ涙とだけが、自分はまだ生きてゐるなと云ふ感じを彼に與へるのに過ぎなかつた。

嘗ては自分の環境であつた幸福な狀態を、記憶に喚び返さうとしても、全然その甲斐がなかつた。

「他のあらゆるものに値ひするやうな、」彼は叫んだ、「その一つのものがなかつたら、要するにあらゆるものは空なんだな。」

牧師が一同に侯爵の到着を披露した。「何うやら貴方は坊ちやんとお二人だけでお立ちになる御決心のやうですが、」牧師はギルヘルムに云つた、「併し切めてこの方とはお近づきにだけなりとなつてお置きなさい。途中どこで又お會ひになつても、屹度おためになる方ですからねえ。」そこへ侯爵があらはれた。まださう大した年齢と云ふでもなく、立派な、氣持ちの好いロムバルディ式の風貌を具へた人物であつた。彼はまだ若い時分に、既にずつと年長者であつたロタリオの大叔父と、始めは軍隊で、後には事業の上で知合になつたのであつた。その後二人は手を携へて伊太利の大部分を旅行して廻はつたこともあつた。そして、侯爵が再び此處で眼にした美術品も、大部分はその時彼の眼の前で、今でもなほ好く彼の覺えてゐるやうな、都合の好い事情の下に購ひ求められたものであつた。

一體に伊太利人は藝術の高い品位に對して他國人よりも一層深い感じを持つてゐるものである。何か一事に從事してゐる者は、すぐにもう藝術家とか、巨匠とか、教授とか名告りたがる。

そして、少なくともさう云ふ稱號慾を見ても分かるやうに、ただ傳統に依つて何物かを獲得したり、又は練習に依つて或一事に熟達したりするだけでは、まだ充分でないといふことを告白してゐるのである、自分のやつてゐる事柄に關して思索したり、原則を立てたり、何故かうしたことをなすかと云ふ理由を、自他に對して明瞭に說明することが出來るものであると公言してゐるのである。

遠來の客は、貴重な品品を見てその持主の亡いことを思ふと流石に心を動かされた。そして、この優れた遺物にも亡友の精神が明かに覗はれるのが嬉しかつた。一同はいろいろな作物を論議した。そして、お互を理解し合ふことが出來たので、大きな滿足を覺えた。侯爵と牧師とが主として口を開いた。ナターリエは、再び亡き大叔父の前へ出たやうな氣がして、容易に彼等の意見や心持ちに跋を合はすことが出來た。ギルヘルムは、一一演劇の術語に飜譯しなければ、どうも旨く呑み込むことが出來なかつた。また皆は已むを得ずフリードリヒの冗談に箴制を加へなければならなかつた。ヤルノーは滅多に顏を見せなかつた。

近世はどうも優れた美術上の作物が少なくなつたと云ふ話しの出た時、侯爵はこんな事を云つた。「いや、環境が藝術家の爲にしてやらなければならないことは一寸考へた位ぢや容易に覗ひ知

ることが出來ませんよ。從つて、大天才や特別の才能を有する人人に於ても、自分自身に對して課すべき要求は、常に際限のないもので、また自己を完成するに必要な努力は、筆にも言葉にも盡くされない位のものです。若しここに環境が殆んど藝術家を助長しないとか、又は、世間といふものは極めて安直に滿足するもので、ただ安つぽい、心持ちのいい、氣樂な見てくれだけを要求してゐるものだといふことに藝術家が氣づいたやうな場合には、藝術家が安逸や利己心からして凡庸な物に執着してゐるとしても、別に驚くには當たらないでせう。もしそれに反して、多かれ少なかれ苦しい殉教者的運命に遭遇しなければならぬ眞正の道を選んで、流行物を提供して金と稱讃とをかち獲るといふやうな眞似をしなかつたら、それこそ不思議といつていいのです。ですから現代の藝術家はいつもただ沽らんかなで、決して與へると云ふことはありません。いつもただ刺戟するだけで、決して滿足させると云ふことはありません。總てがただ暗示されてゐるだけで、何處にも根柢だとか完成だとかいふものは見られないのです。まあ少しの間默つて陳列室に立つてゐて、何ういふ作品が一番多く觀衆の眼を惹くか、何ういふものが褒められるか、何ういふものが見遁されるかと云ふことを觀察して御覽なさい、誰だつてもう現代が可厭になつて、將來に希望を持たなくなりますよ。」

「左樣、」牧師はそれに應へて云つた、「さう云ふ工合に愛好者と藝術家とはお互を教育し合つてゐるんですよ。愛好者はただ一般的な、漠然とした享樂を求めてゐるんです。愛好者の考へでは美術品も、殆ど自然の產物と同じやうに快適なものであるべきなんです。つまり藝術品を玩賞する機能も、恰度舌や口蓋と同じやうに、ひとりでに發達したものと思ひ込んでゐるので、藝術品の批判も食物の批判と同然だと信じてゐるんですよ。眞の藝術的享樂に到るためには、如何に全然別種の教化を必要とするかなどと云ふことは、彼等には全然分からないんですね。凡そ自己の修養に志ある者の是非とも自己のうちに具へなければならないのは此種の辨別なんですが、これがまた一番難かしいやうに思はれますよ。その故でせう、世の中には偏頗な教化が多いですね、そして偏頗な癖に全體に對して妄斷を下すやうな、僭越な眞似をしたがるんですね。」

「今貴方の仰しやつたことは、どうも私には好く分かりかねますね、」恰度そこへ這入つて來たヤルノーが云つた。

「簡短明瞭にこの點を說明するのは、」牧師はそれに應へた、「困難なことですね。だが、これだけ云つときますよ。誰でも若し複雜な活動や複雜な享樂に與らうといふ意志があるならば、本當にその人は自分の複雜な機能を云はば個個別別に發達させる能力を有つてゐなければなりません

よ。一切の享樂一切の活動を自己の全人性に於て體現しようと思ふ人、又は自己以外のあらゆるものを結束して、かう云つたやうな享樂に資しようと思ふ人は永久に充たされない努力のために一生を空費するものでせうよ。例へば、善良な性格だとか、優れた繪畫だとかをそれ自身に於て觀照するとか、唄を唄自身のために聽き、俳優を俳優自身として讃美し、建築物を建築それ自身の調和や持久力のために翫賞するとか云ふやうなことは、いかにも自然なことのやうに見えはするが、しかし又何れ程難かしいことでせう。處で、大抵の人間は定評ある藝術的作品を、宛然まだ軟かい粘土か何ぞのやうに取り扱つてゐますよ。彼等の好尙や、意見や、出來心に從つて、もう出來上がつた大理石像はすぐに型を造り直したり、ちやんと壁を塗つた建物も伸びたり縮まつたりしなくちやならない。その他繪畫は敎訓的なものである必要があり、俳優は勸善の任を果さなければならない、そんな風に一切のものに要求をもちかけるんですね。處が、大抵の人間はそれ自身型のないものであり、自分や自分の本質にすら何等一定の形をも與へることが出來ないので、凡ての物からその姿形を取り去つて、總ての物が彼等自身と同樣に海鼠のやうなものと成ることを望んでゐるんですね。かうして結局彼等は一切を所謂效果なるものに還元して、一切のものは相對的だとするんですよ。で、成る程何も彼も相對的なものになつてしまひます。但し無意

味と沒趣味とは例外で、この二つだけは矢張り絕對的に支配してゐるんですよ。」

「いや、よく解りました、」ヤルノーは應へて云つた、「と云はうか、それとも今貴方の仰しやつたことは、平素貴方の固く執つてゐられる持論とうまく吻合してゐることがよく窺はれたとでも云ひませうかね。ですが、私はどうも人間といふ憐れな動物をさう八釜しく云ふ氣にはなれませんよ。實際私の知つてゐるものの中にも、藝術や自然の大作の前に立つても、すぐに又平生の貧弱な要求を想ひ出すやうな人物が幾許もあります。歌劇へ行くにも、自分の良心や道德を一緒に持つて行くかと思ふと、柱廊を見ても愛憎の念を捨て兼ねるんですね。さうした人達は、外部から彼等に提供される最善にして且最大なるものを、彼等自身の憫れむべき本質といくらかでも關聯させるためには、彼等特有の表現法で、先づそれを出來るだけ縮小しなければならないんですね。」

八

その夜牧師はミニョンの葬式に一同を招待した。人人は既往館へ出掛けて行つた。建物は特にあかあかと照り輝いて、飾りも水際立つてゐた。壁は上から下まで空色の絨緞に蔽はれて、ただ腰板と長押とが見えてゐるばかりであつた。隅隅にある四つの燭臺には四本の大きな蠟燭が燃え

てゐるが、中央の石棺を圍む四つの小さな燭臺にはそれ相應なのが點火つてゐた。その側には、銀絲を織りまぜた空色の服裝をした四人の童子が立つてゐて、石棺の上に安臥してゐる姿に、駝鳥の羽毛で造つた廣い團扇で風を送つてゐるやうに見えた。一同は席に着いた。すると、眼に見えぬ合唱隊が穩やかな歌で訊き始めた。「誰をか運び來たれる、この靜なる團欒に。」すると、四人の童が愛らしい聲でそれに應へた。「勞れし遊びの友を運び來たりぬ。天の姉妹の歡喜の聲、いつか又彼の眼を覺ますまで、おん身等の間に休ましめよ。」

合唱隊

「わが團欒には初の若人ぞ、よくこそ來つれ、悲しみつつ迎へなん。汝が後には童男もな來そ、童女もな來そ。ただ老いたる者のみぞ、心安けく、この靜なる園に入れよ。さても、嚴しき團欒に休む可愛しき童女よ。」

童子ども

「ああ、われ等いかに躊ひながら、この若人を運びしことぞ。ああ、されど、彼女はここに住む

べき運命なり。いで、われ等をも、しばし留まりて、泣かしめよ、泣かしめよ、この柩の邊に。」

合唱隊

「さあれ見よ、この力ある翼を。見よ、この淨き輕羅。頭に輝く黃金の紐を。見よ、この美はしき、氣高き休憩を。」

童子ども

「されど、ああ、その翼最早彼女を支へず。快き遊びも絶えて、輕羅は舞はじ。薔薇をもて彼女の頭に冠りせし時、われ等を見詰めしその眼のいしく優しかりしことよ。」

合唱隊

「靈の眼もて見よかなたを。美はしきもの、貴きものをいや高く、生命を星の上に登す創造の力を、おん身の心に喚び起し見よ。」

童子ども

「ああされど、彼女もはやこの世にあらず。庭行く姿、花摘む影、再び相見ること叶はじ。われ等が涙を許せよ、彼女をここに留め置かむ。われ等の泣くを許せよ、彼女の許に殘らしめよ。」

合唱隊

「子ども等よ、歸れ生に。ゆるけき川邊のそよ風に、乾しませよそが涙を。夜をのがれよ。晝と歡樂と永續こそ、生ける者の賚なれ。」

童子ども

「いざさらば、われ等生に還らむ。晝よ、絶え間なく仕事と歡樂とを與へよ、夕べ憩ひを告げ、夜の睡眠わが疲れを癒すまで。」

合唱隊

「子ども等よ、急げ生に。戀は待てり、淨げなる美の姿して。見よ神神しき眼ざしを、見よ不死の花束を。」

子供等は既に退いてゐた。牧師はその床几から立ち上がつて、棺のうしろに歩み寄つた。

「新に來る人は、」彼は云ひ出した、「すべて嚴肅な式を以つて迎へられると云ふのが、この寂かな安住の家を建てた方のお指圖であつたのです。この家の建設者であり、この場所の創始者であつたその方の後では、今度始めて一人の若い旅人をここへ送りました。そこでこの狹い場所には、もう既にかの嚴しい、我が儘な、假借のない死の神の犧牲であります二人の全然類を異にした人が抱かれてゐる譯で御座います。定められた天則に依つて、私どもはこの世に出て來ます。そして、日光を見るまでに成熟する日數もちやんと極まつてゐるのですが、しかし壽命には何の法則もないので御座います。最も弱い生命の絲が案外に長く延びることもあれば、最も強い絲が、矛盾を好む運命の女神の鋏に酷たらしくも截られてしまふこともあるものです。今日ここに埋葬した子どもに就いては、何も申上げる程存じてはをりませぬ。何處の生れだと云ふことも知らなければ、どう云ふ親の子だと云ふことも知らない、年齡さへただ推量してゐるだけで御座います。

その固く閉ぢられた、底の知れない胸は、何一つ私的事情を私どもに漏らしませんでした。この兒の性情は、何一つ明かにもされなければ、何一つ知れてもゐませんでした。知れてゐたのは、ただ或亂暴な人の手から自分を救つてくれた方に對する愛だけで御座いました。その可憐なる愛情、その切なる感謝の念が、この兒の生命の油を燃え盡くさせた火焔であつたらしいのです。醫者の熟練もその無垢な命を繫ぎとめることは出來ませんでした。懇篤な友情もそれを延ばすことは出來ませんでした。ですが、たとひ醫術は別かれ行く魂を繫ぎとめることが出來なかつたとしても、その肉體を保存して、永久に朽腐を防ぐ上には、一切の手段を盡くしました。香劑は既にあらゆる血管へ浸み込んで、今や若くして褪せて行つた頰の色を血に代つて染めてゐます。どうぞ皆さん、近くへ寄つて、醫術と苦心との齎した奇蹟を御覽下さい。」

かう云ひながら、彼は面紗を擧げた。ミニョンは天女の衣を着けて、心地よげな姿勢で眠るがやうに横たはつてゐた。一同はそばへ進み寄つて、この生けるが如き姿に驚嘆した。一人ギルヘルムはその席に坐つたまま動かなかつた。彼は自分で自分の心を落ち着けることが出來なかつた。自分の感じてゐることを考へて見るだけの勇氣もなかつた。一寸でも考へたりしては、その感じが毀されさうに思はれた。

右の言葉は侯爵のために、佛蘭西語で述べられた。侯爵は他の人人と一緒にそばへ進み寄つて、注意深くその遺骸を眺めた。牧師はなほ言葉をつづけた。「人間に對してあれ程固く閉ぢられてゐた此兒の優しい胸も神樣に對しては聖い信頼の眞心を抱いてゐました。謙遜、卽ち、人前で自己を卑下する一種の傾向は、この兒に生れながら具はつてゐるもののやうで御座いました。どうも加特力教徒の家に生まれて育てられたものらしく、熱心にその教へを信奉してゐました。それから又屢聖別せられた土の上に眠りたいといふ祕やかな希望を漏らしてゐましたので、私どもは教會の習慣に從つて、この大理石の柩と、枕の中に入れてある僅かばかりの土とを聖別しました。いよいよ息を引きとる間際にも、この兒は、その優しい腕に幾百の點でもつて美しく描かれてゐる十字架上の聖像を、どれ程熱烈な眞心を籠めて接吻したことでせう。」かう云ひながら、彼はすぐに少女の右の腕を捲くり上げた。すると、さまざまな文字や符號に圍まれた十字架の聖像が、白い皮膚の上に淡蒼く描かれて、人人の眼前に現れた。

侯爵はこの新しい出現をそばへ擦り寄るやうにしてしげしげと見詰めてゐた。

「おや、」彼は突つ立つて、兩手を天に差し伸べながら絶叫した。「可哀さうに。不幸な姪よ。お前はまあここに居てくれたのか。もう疾うに斷念めてゐたお前に逢つて、疾うに海の中で魚の餌食

にでもなつてしまつたことと思つてゐたこの可愛い姿を此處で、――そりや死んでは居るけれども、形もその儘に、再び相見ようとは、何といふ悼ましい歡喜であらう。しかも私はお前の葬儀に列席したのぢや、その葬儀はこんなに外觀の立派なばかりか、御會葬下さつた優れた方方のお蔭げで一層立派なものになつたではないか。で、私はこの口が利ける程心が落ちついたら、」老侯は途切れ途切れの聲で語りつづけた、「皆様がたにも屹度お禮を申上げるよ。」

彼はなほその先を云はうとしたが、涙に妨げられて聲が出なかつた。牧師が一寸撥條を押すと、遺骸は大理石棺の底へ降りてしまつた。先の童子どもと同じ裝ひをした四人の青年が絨緞の蔭からあらはれて、美しく飾り立てた重い蓋を棺の上に載せた。そして、同時に次のやうな挽歌をうたひ始めた。

青年ども

「今や寶は、うるはしき過去の姿は、底深く歛められぬ。永常に朽つることなし、ここ石棺の中に休めば。又おん身等の胸にも生きて、永くその活動をつづけん。さらば歸れ、生に歸れ。この聖き眞面目をば持ちて歸れ。眞面目こそ、聖き眞面目こそ、ひとり生を永久になすものなれば。」

かくれた合唱隊がこの最後の歌詞に和した。が、會衆の中の何人もこの勵ましの言葉を耳にしなかつた。誰も彼もあの意外な發見に胸を打たれて、各自の感慨に浸り切つてゐた。牧師とナタリエとは侯爵を案内して立つた、テレーゼとロタリオとはギルヘルムを連れて出た。そして、歌の聲がすつかり彼等の耳に聞こえなくなつた時、始めて悲痛と、瞑想と、想念と好奇心とは又しても烈しく彼等の胸中に湧き起つた、そしてもう一度ああ云ふ雰圍氣の中へ戻つて見たいものだと思はないではゐられなかつた。

九

侯爵はこの事件に就いて語ることを避けた。併し牧師とはよくひそひそと長い話しをしてゐた。彼は又、一同が寄り合つた時、よく音樂を所望した。所で、會話の義務を免れるのが誰にも嬉しかつたので、手落ちなく音樂の準備をして置いた。かうして暫く暮らしてゐる間に、侯爵の方ではそろそろ出發の用意をしてゐることが一同に分かつて來た。或日彼はギルヘルムに向かつて云ひ出した。「私もあの可愛い子どもの遺骸を動かすやうなことはしたくない。生前あの兒が愛や惱

みを經驗した場所に永く留まるがいいでせう。だが、皆さんには、一度あの兒の鄕國へもお出でになつて、あの憐れな兒の生まれたり育てられたりした場所に私を訪問することをお約束して頂きたいものですね。お友達の方方には是非、生前あの兒がなほ幽ながら覺えてゐた、あの圓柱や立像なども御覽になつて頂きたいものですよ。あの兒が喜んで小石を拾ひ集めたその磯濱へも御案内いたしますよ。殊に貴方は、色色貴方の御恩を蒙つてゐる家族の者の感謝を是非とも受けて下さらなければ不可ませんよ。私は明日出發いたします。委細の事情はあの牧師さんに打ち明けて申上げて置きましたから、いづれあの方から貴方にお話しが御座いませう。餘りの悲しさに途切れがちな私の話しも、あの方はよく辛抱して下さいました。あの方の方が第三者だけに事件も一層秩序よくお話しが出來ませう。なほ若し貴方が、あの牧師さんのお勸めのやうに、獨逸國内を旅行する私の道連れになつて下さいましたら、誠に結構に存じますよ。いや、あのお坊ちやんも御一緒で宜しいのですよ。少しは足手纏ひになることも御座いませうが、その都度、あの可哀さうな姪が受けた貴方の御厄介を想ひ出すことにしませうよ。」

その同じ晩に、一同はかの伯爵夫人の思ひも寄らぬ到着に驚かされた。ギルヘルムは、夫人の姿が現れると、總身ががくがく震へた。夫人の方でも、覺悟はして來たものの、ぢつと姉に獅嚙

みついてしまつた。姉のナターリエは直ぐに椅子をすすめた。まあ、夫人の服裝の質素なこと、まあ、その容子の變つたこと。ギルヘルムは殆ど夫人を正視するに堪へなかつた。夫人の方では親しげに彼に挨拶をするにはしたが、通り一遍の言葉にも、その意地や感傷を隱すことが出來なかつた。侯爵は機を見て寢所へ退いたが、一同はなほ解散する氣になれなかつた。すると牧師が何か草稿をとり出した。「私はこの話を打ち明けられた通りに、」彼は云ひ出した、「直ぐさま紙に書き留めて置きました。筆墨を惜む勿れといふのは、正にかう云ふ珍らしい事件を巨細に記錄して置く時のことなんですからねえ。」

伯爵夫人にも事の次第を話した上、牧師は次の樣に讀み上げた。——

侯爵の思ひ出

「私も隨分世間を見て來ましたけれど、矢張り私の父は變はつた人間だと思ひますよ。その性格は上品で、率直で、その想念は汎かつた。いや、大きかつたと云つていいのです。自ら持すること極めて嚴格な人でしてね、總ての計畫には嚴正な秩序があり、總ての行動は常に終始一貫してゐました。ですから、一面に於ては極めて附き合ひ好く且商談など持ち込み易い質の人でしたが、

正に又此の持ち前のために、どうしても世間と折れ合つて行くことが出來なかつたのです。つまり國家からも、隣人からも、子ども達からも、下女下男からも、自分自身に課してゐるあらゆる法則の遵守を要求したからなんですね。極めて穩當な要求でも父の秋烈な性格のために誇大せられる傾きがありました。又何事も自分が考へて置いた通りに成らないといふ譯で、父は何事でも享樂するといふことがありませんでした。私は父が館を建てたり、庭を造つたり、又は絶好の位置にある大きな新しい屋敷を手に入れたりしたその瞬間に於て、禁慾の一生を送るやうに運命から呪はれてゐるんだと思ひ込んで、本氣になつて怒つてゐるのを見ましたよ。外見は飽くまで品位を保つてゐました、たまに冗談を云ふことがあつても、それはただ理性の勝れてゐる所を示すに止まりました。すべて他人から批難されるに忍びない性分でした、いつかも唯一度切りのことですが、自分の施設のどれかが嘲笑せられたのを聞いて、夢中になつて怒つたことがありました。で、自分の子どもや財産を處置する上にも、矢つ張りこの精神で遣つたものですよ。私の長兄は將來大きな所領を受け嗣ぐ望みのある人間として育てられました。私は僧職に就く筈になつてゐて、弟は軍人になることに極められてゐたのです。私は生れつき活潑で、熱烈で、活動的で、敏捷で、總て體操など上手でしたが、弟は寧ろ一種冥想的な靜寂に耽るやうな風があつて、科學だ

の、音樂だの、詩作だのに傾倒してゐるやうでした。そこで激烈な紛爭を經て、いよいよこれは不可能であるといふ納得が行つた後で、父は漸く私どもが職業を取り換へることを澁々ながらも許してくれました。で、二人とも滿足してゐるのを見ながらも、まだ何うしてもそれに甘んじてゐることが出來ないで、何うせ物にもなるまいなどと斷言してゐました。だんだん年を取るにつれて、父はいよいよあらゆる社會から隔絶されたやうに感じてゐましたが、仕舞には殆ど全く孤獨の生活を送るやうになりました。ただ、嘗て獨逸の軍隊に勤めてゐて、出征中妻に先立たれたと云ふので、十歳ばかりになる女の兒を連れてやつて來た、一人の古い友達だけは相不變往來をしてゐました。この人は私どもの近所に小じんまりした土地を買つて、毎週極まつた日の極まつた時間に父を訪ねて來ましたが、その娘さんと云ふのもよく一緒に連れて參りました。この友人は一度も父の意に逆らふと云ふことがありませんでした。で、父も仕舞にはすつかりその人に慣れてしまつて、唯一の相當な相手として附き合つてゐました。處が、父の沒した後で分かつたことですが、この男は私どもの老人から隨分手厚い仕送りを受けてゐたので、決して無駄に時間を潰してゐた譯ではなかつたのです。現にその土地も大分に擴めてゐて、その娘もなかなか立派な持參金を當てにすることが出來たのでした。その間娘はだんだん成長して、器量も並はづれて好

い兒になつて參りました。兄はよく私に揶揄つて、お前あの娘を貰つたらいいぢやないかなどと云つたものです。

「その間弟のアウグスチンは極めて妙な狀態の下に數年を僧院で送つてゐました。もうすつかり狂信の法悅に耽つて、あの半ば精神的で半ば肉體的な感じに夢中になつてゐました。つまり、一時九天の高きに引き揚げられたかと思ふと、すぐに又無力の奈落や慘な虛空の世界に突き落とされると云つたやうな感じなんですね。併し父の存命中は、その狀態を變へようにも、そんな事は思ひも及ばなかつたので御座います。今更何の願望や申出を口にすることが出來ませう。が、父の沒後は弟もせつせと私どもを訪ねて參りました。すると、最初私どもが苦にしてゐた弟の狀態も、だんだん目に見えて忍び易くなつて參りました。と云ふのも、つまり彼の理性が勝つてくれたんですね。さて、その理性の聲にきいてみると、自然の坦坦たる道を辿れば完全な滿足と回春とが獲られるといふことが、いよいよ確實になるにつれて、彼は、僧としての誓約を解いてくれと、いよいよ熱心に私どもに强請(せが)み出しました。そして、自分が隣家の娘のスペラータに想ひを懸けてゐると云ふことまで白狀しました。

「兄も父の頑固には隨分惱まされて來ましたので、弟の事情を聞いてはどうも動かされずに居られませんでした。恰度私どもの家の懺悔僧に德望のある老人がありましたので、私どもはその人に相談をして、弟の二重の目的を打ち明けた上、どうかこの事件に口をきいて、解決して貰ひたいと賴みました。處が、その老人はいつになくためらつてゐました。そして、仕舞には弟がしつこく迫き立てて來ますので、私どももその老僧に向かつていよいよ懸命に事件を賴みますと、老僧も已むを得ず容易ならぬ祕密を打ち明ける決心をいたしました。

「つまりそのスペラータは私どもの實妹であつたのです、しかも父母兩方を同じうしてゐたのです。もう夫婦の特權も消失してしまつたやうな晩年になつて、父は再び一陽來復の春情を覺えたのですね。處が、その少し前に近隣でそれと同じやうな事件が物笑ひになつたことがありましたので、父は自分も同じやうな笑ひの的になるのが可厭さに、この晩年に於ける正當な愛の結晶を、よく世間で若氣の到りから出來た因果の子を始末するやうに、用心深く祕めて置かうと決心したのです。そこで母は內密でお產を濟まして、その兒は田舍へ連れて行かれました。處で、懺悔僧の外にこの祕密を知つてゐた、昔からお出入りの例の友達が氣輕に承知してくれて、件の赤ん坊はその人の子だといふことになつたのです。尤も、その懺悔僧の方は、眞逆の場合に限つてその祕密を漏らしてもいいと云ふことになつてゐたのでした。そのうちに假りの父親も沒くなつたの

で、その可憐な娘は或お婆さんの監督の下で暮らしてゐました。弟は唄や音樂の取持ちで早くもその娘の許へ出入りするやうになつてゐたことは、私どもも知つてゐました。處で、今や彼が古い緤を斷つて新しい緣を結ばうと再三促き立てて來るので、彼の身邊に打ちよせてゐる危險を出來るだけ早く知らせてやる必要があつたので御座います。

「すると、彼は荒荒しい、相手を蔑むやうな眼つきで私どもを見詰めてゐました。『まあそんな子供や馬鹿者でも騙すやうな、見え透いた佯り話はやめて下さい。』彼は叫んだものです。『この胸からあのスペラータを離さうたつて、そりや無理です、彼娘は私のものですよ。お願ひですから、そんな威嚇しの幽靈は引つ込めて下さい、一寸も怖かありませんよ。スペラータは私の妹ではない、あれは私の妻ですよ。』それからなほ彼は私どもに向かつて、如何にかの美しい乙女が人間社會からの隔絶といふ不自然な狀態から彼を引離して、眞の生活に導いてくれたか、如何に二人の心は二つの咽喉のやうに共鳴してゐるか、又如何に彼はこれ迄の苦難や迷誤をも祝福してゐるかといふのは、それがために今迄すべての女から遠ざかつてゐて、今に及んであの可愛らしい娘に全心を打ち込んでかかることが出來るのだから、といふやうなことを、さもさも嬉しさうに並べ立てました。

「右のやうな事情を知るにつけて、私どもも今更のやうに驚いてしまひました。彼の境遇も氣の毒であるが、偖て何うしたらいいものか私どもには分かりませんでした。何しろスペラータは彼の子を宿してゐると云ふことを懸命に斷言してゐるんですからね。懺悔僧は彼の義務の命ずるあらゆる手段を盡くしましたが、それとてもこの不幸を一層惡くするに過ぎませんでした。自然と宗教との關係とか、道德律と民法との關係とかいふものを、弟は盛んに主張しました。彼にとつては、スペラータとの關係以外に神聖なものはなかつたのです。父と云ひ妻と云ふ此名稱以外に尊いものはなかつたのです。彼は絶叫して云ひました。『父と妻、これだけが自然に稱ふものなのです、他のものは一切出鱈目と思惑とに過ぎません。昔は同胞の結婚を認めてゐた氣高い民族が幾許もあつたぢやありませんか。どうぞ貴方がたの神樣なぞ引き合ひに出して下さいますな。』彼は聲を勵まして云ひました。『貴方がたはただ私どもを愚にしたり、自然の道を離れさせたり、羞づべき壓迫を加へて、最高の本能を罪惡に貶したりしようと思ふ時にこそ、そんな神樣の名が入るんでせうからね。貴方がたは憐れむべき犧牲を强迫して、精神の大混亂と肉體の羞づべき濫用とを餘儀なくさせた上、生きながら埋葬してしまふんですよ。

『私は何だつて云へますよ。誰も經驗したことのない程苦しんで來てゐるんですからね。最も高

い、恍惚たる狂熱の充實界から、無力と空虛と、寂滅と、絶望との怖ろしい荒野に到るまで、又超人的生存に對する熾烈な憧憬から、徹底的な不信、自分自身に對する不信に到るまで、すつかり體驗して來たんですからね。甘さうに波波と湛へられた盃の怖ろしい澱滓を呑み乾したので、私のこの身體は心の奥まですつかり毒が廻つてゐたのです。處が、今や慈悲深い自然がその最大の賜物に依つて、戀に依つて、再び私を回復させてくれました。私は無垢な少女の胸に凭れながら、再び自分が生きてゐることを、彼女が生きてゐることを、二人が一身同體であることを、この生命の結合から第三の生命が生まれて、今に私どもに向かつて嫣然笑ひかけるやうになるのだといふことを感じてゐる今になつて、貴方がたはそんな地獄や煉獄の焔を開いて、この純潔な戀の強い、眞實な、決して亂すことの出來ない歡樂に突き附けようとなさるんですか。そんなもので燒かれるのは、ただ病的な空想の力位なものですよ。よろしい、私どもに會ひたかつたなら、どうかあの森嚴な梢を大空に向けて立つてゐる絲杉の樹の下へ來て下さい。さもなければ、あの檸檬や黄橙の花があたりに咲いて、綺麗な長春樹が優しい花を見せてゐる、あの東屋のそばへ來て下さい。そして、そこでお手のものの氣味の惡い、灰色をした、人間の紡いだ網で私どもを脅せるものなら、やつて御覽なさい。』

「かう云ふ風で、彼は長い間頑として私どもの云ふことを信じませんでした。そして、その事の眞實をどう力説しても、又懺悔僧までそれを確證しても、どうも一向平然として、却てこんな事を絶叫するのでした。『そんな僧院の聲や、黴の生えた經典や、くだくだしい妄想や規則などに耳を傾けてはいけませんよ。自然と貴方自身の胸とに訊いて御覽なさい。何を怖れなければならぬかと云ふことを、ちやんと教へてくれますよ。何に向つて自然が斷呼たる永久の呪詛を懸けてゐるかを、嚴かに指さして見せてくれますよ。野の百合を御覽なさい、雄も雌も同じ一つの莖から出てゐるではありませんか。兩者を生んだ花が兩者を結び着けてゐるではありませんか。しかも百合は無垢の象徴ではありませんか。そして、同胞の結合はいくらでも實を結んでゐるぢや御座いませんか。若し自然がそれを憎むとすれば、それを高らかに唱へる筈です。あるべからざる生物なれば、生まれ榮えることは出來ませんよ。縱しや生まれても、それが間違つて生きてゐる物なれば、早く凋落してしまひますよ。無結實とか、貧弱な生存とか、夭折とかいふものは、それが即ち自然の呪詛ですよ。その秋烈な性質の標號ですよ。自然の罰はいつも覿面に來ます。まあ手近を見て御覽なさい。何が禁ぜられてゐるか、何が呪はれてゐるかと云ふことは、すぐにお眼に着くでせう。靜寂な僧院の奥や、俗世間の雜沓の中で神聖視され、尊ばれてゐる行ひで、自然

の呪詛の懸かつてゐるものは幾千となくありますよ。過度の勞働と同じやうに氣樂な安逸をも、貧窮や缺乏と同じやうに氣儘や贅澤をも、自然は悲しさうに眺めてゐます。自然は節度を命じてゐるんです。その諸關係は悉く眞實で、その作用は凡て穩やかなものですよ。兎に角私のやうに苦しんで來たものは、自由になる權利を持つてゐます。スペラータは私のものです、彼女を奪ひ得るものは死だけです。何うすれば彼女を惹きつけて置かれるか、何うすれば私が幸福になれるか、それこそ貴方がたの配慮すべきことですよ。さあ、私はこれから直ぐにあの女の許へ行きます。そして、もう二度とはあの女から離れませんよ。』

「かう云つて、彼はその女の許へ渡るために渡船場の方へ行かうといたしました。私どもは彼を引き留めて、決してそんな眞似をしてくれるな、何んな怖ろしい結果を生ずるかも知れないからと賴んでみました。更に、お前はお前自身の思想や觀念の自由な世界に生きてゐるのではない、宛然自然法のやうに枉げ難い規則や關係によつて出來た社會組織の中に生存してゐるんだ、そこを好く考へて見ろとも言ひました。私どもは又弟を少しも眼から離さず、況して屋敷からは斷じて出さないことを、懺悔僧にも約束しなければなりませんでした。それを聞くと、懺悔僧は又二三日の間に來ると云つて出て行きました。處が、豫想してゐたことが案の定起りました。弟は理

性のために強くなつては居ましたが、彼の感情はまだ弱かつたのです。從前受けた宗教上の印象がむくむくと蘇つて來て、怖ろしい疑惑が彼を捕虜にしてしまひました。彼は物凄い二日二夜を過ごしました。懺悔僧も再び應援に來てくれましたが、その甲斐はありませんでした。彼の解放された自由な理性は彼に無罪を云ひ渡しました。が、彼の感情は、彼の宗教は、その他あらゆる從來の觀念は彼を罪人と宣告しました。

「或朝彼の部屋を見ると空虛になつてゐるのです。一片の紙ぎれが卓子の上に載せてあつて、その中に彼は、かう無理無態に閉ぢ籠めて置かれては、自分の方でも自由を求める權利があるやうに思はれる。自分はこれから遁げて、スペラータの許へ行く。いづれ二人は一緒に姿を隱すつもりだが、どうしても二人の仲を裂かうと云ふのなら、自分も總ての覺悟は極めてゐると宣言して居るのでした。

「私どもは少なからず駭きました。が、坊さんは安心してゐるやうに私どもを宥めてくれました。可哀さうに弟は更に拔け目なく監視されてゐたのです。船頭どもは彼を向う河岸へ渡す代りに、修道院へ連れ込んでしまひました。四十時間も眠らないのですつかり疲れ切つてゐた弟は、小舟が月光の下に搖ぎ出すと、直ぐにぐつすり睡込んでしまつて、修道院の友達の手に引き渡される

までは、少しも眼を覺ましませんでした。そして、われに還つた時は、もう自分の後に修道院の門の閉められる音が聞こえたのです。

「弟の運命の餘りの痛ましさに動かされて、私どもはその懺悔僧に手嚴しい非難を加へました。が、相手は落つき拂つて、私どものやうな同情こそ却て憐れな患者を死にいたすものだと、外科醫の論據を以て私どもを說き伏せてしまひました。それに此處置は決して彼一人の氣ままからしたことではない、僧正や長老會の命令に基づいてゐるとのことでした。そして、その趣意は、一切世間の誹謗を避けるやうにして、この悲しむべき出來事を、外間の覗ふべからざる敎會紀律の下に押し包んでしまはうと云ふのでした。それからスペラータは飽く迄も勞はつて、その戀人が同時に眞の兄であるなどと云ふことは、一切聞かせないやうにしようと云ふのでした。で、彼女は或牧師に預けられましたが、その牧師はもうこれ迄に彼女の口からその事情を聞かされてゐたのです。で、彼女の姙娠も出產もうまく掩ひ匿して置くことが出來ました。彼女は母となつて小さな嬰兒を相手にすつかり滿足して居りました。私どもの故國の大抵の女子と同じやうに、彼女も亦自分で讀み書きは出來ませんでした。で、彼女は戀人に云つてやりたいことはその牧師に賴むことにしてゐました。處が、その牧師の方では、乳呑み兒を抱へてゐるやうな產婦を實意から

欺くのも一つの義務だと心得たので、一度も會つたことのない私達の弟の音信を彼女に取り次いだり、彼の名に於て、安心して居れだの、自分や子どもの身體を勞はれだの、後の世のために神に便れだのと勸めたりいたしました。

「スペラータは生れつき宗敎的に傾いて居りました。彼女の境遇や寂寥はいよいよその傾向を强めました。しかもその牧師はそれを助長して以て、段段彼女に永久の別離を覺悟させようとしたのです。嬰兒も漸く乳離れになつた上、產婦の肉體も十分に回復して、もう恐ろしい精神上の痛苦にも堪へられさうだと見ると、彼はすぐにその女に向つてその非行、卽ち聖職に就いてる者に身を任せたといふ過ちを怖ろしい色で描いて見せました。そして、その過ちは云はば自然に悖る罪惡であり、破倫であると云つて責めたのです。つまり彼は、それに依つて、彼女がその過失の眞相を知つた場合に感じたであらう後悔と、同じやうな後悔をさせてやらうと云ふやうな、妙な考へを持つてゐたのです。で、さう云ふ風で、彼は女の心に極度の悲痛と苦悶とを與へました、敎會やその首腦の考へを出來るだけ高調して聞かせました、そして、若しこんな場合に讓步した上、なほその不義者どもを正式に結婚させるといふやうな甘い所を見せたら、それこそ靈魂の救濟に對してどんな惡影響を及ぼすかといふことを說いて聞かせ、更に、寧ろかう云ふ過失は早く

憤つて置いて、その代り來世の榮冠を戴く方が、どの位幸福だか知れないと云ふやうなことも說いて聞かせました。すると、彼女はたうとう憐れな罪人のやうに、自ら進んで首を斧の下に差し伸べながら、どうか永久に男と別かれさせて下さいと、切に歎願するやうになりました。で、これだけ女の方から折れて出たのだからと云ふので、なほ幾許かの監視の下に、彼女にも自由を許して、自分の家に居ようと、僧庵に居ようと、彼女の思ひに任せて置きました。

「彼女の兒は次第に成長しました。そして、間もなく妙な性癖をあらはして來ました。もう夙くから走ることが出來て、動作が極めて巧妙でした。それから歌も忽ち上手になつて、六絃琴も殆ど獨習で覺えたんですね。ただ思つてゐることをよく言葉にすることが出來ませんでした。しかもその故障は發聲機關よりも寧ろその思考法にあつたらしいんです。一方その氣の毒な母親は此親子關係を如何にも因果なものに思つて來たのでした。その牧師の取扱ひがひどくこの母親の頭を攪亂してしまつたので、彼女は、狂氣にはならぬまでも、極めて異常な心理狀態になつてしまつたんですね。彼女にはわが身の過失が日增しに怖ろしく罪深いものに思はれて來るのでした。牧師の繰り返し說いた破倫の譬へが、彼女の胸に深い印象を與へた結果、殆ど實際の關係に感附いたかと思はれる程、彼女は怖ろしい嫌惡の情を感じて來ました。懺悔僧は又、不幸な人間の腸

を斷つやうな手際は、お手のものだと自惚れてゐたんですね。實際、わが兒の無事な顏を見て心から嬉しいと思ふ母の愛が、この兒は生まれるべきでなかつたのだといふ怖ろしい考へと爭ふ所は、側の見る目も痛ましいものでした。或時は二つの感じが相爭ひ、或時は嫌惡の情が恩愛に打ち克つてしまひました。

「その兒はもう夙うから母親の側を引き離して、下の湖畔の善良な人の家に預けられてゐました。そこで氣隨氣儘にして遊んでゐる間に、妙に物へ攀ぢ登ることを好む風が見えて來ました。高い峯へ登るとか、船の緣を傳つて走るとか、又はよくその邊へ遣つて來た綱渡りなどの驚くべき藝當を眞似るとかいふやうなことがその兒の自然の本能でした。

「で、そんな事を一層容易にやつてのけるために、よくその娘は男の兒達と着物の取り易へつこをしたがりました。その養ひ親達はそれを極端に不躾な、許して置かれないことだと喧しく云つてゐましたけれども、私どもは出來るだけそれを大目に見てやつてゐました。かうふ奇妙な遊び方や跳ね廻はりをしながら、隨分遠方まで行くことが度度ありました。そして、道に迷つたり、長い間歸つて來なかつたりしましたが、いつも必ず歸つて來ました。さて、歸り途には大抵近隣の別莊の玄關前の圓柱の蔭に腰を下すんですね。で、仕舞にはもう誰も捜さないで、默つて待つ

てゐました。彼女はそこの階段の上に一休みするらしいんです。それから廣間の中へ這入つて行つたり、立像を見て廻はつたりして、もう誰も引き留めるものがなくなると、自宅へ駈け戻つて來るので御座いました。

「處が、たうとう私どもの賴みが裏切られて、放縱にして置いた報いがやつて來ました。その兒がいつまでも歸つて來ないのです。すると、急流が湖水に落ち込む邊りから程遠くない水の上にその兒の帽子が泛いてゐたと云ふことでした。で、これは屹度岩の間を攀じ登つてゐる間に墜ちて死んだものに違ひないと推測しました。色色搜索しましたが、死骸は一向見附かりませんでした。

「附添達の輕卒なお饒舌のために、間もなく子どもの死んだことがスペラータの耳にも這入りました。が、彼女は見た處平靜で、陽氣な風でしたばかりか、寧ろ自分は、神樣があの憐れな兒をお手許へ引き取つて、この上なほ大きな災難に遭つたり、又はそれを惹き起したりすることのないやうに護つて下さつたのを喜んでゐるなどと、露骨に云つてゐた位でした。

「處で又、この際に、その湖水に就いて傳はつてゐるさまざまな傳說が人の口の端に上るやうになりました。それに據ると、この湖水は毎年必ず罪のない子どもを人身御供に取るが、死骸はと

つて置かないで、早晩屹度それを岸へ打ち上げてしまふ。たとひ一旦は水底へ沈んでも、屹度小さな骨まで一つ殘らず再び出て來ると云ふのです。かういふ話があります。嘗て一人の母親がありましたが、その兒が矢張りこの湖水で溺死したので、神樣や聖者たちに向つて、せめて骨なりとも返して埋葬させて下さいと嘆泣しました。すると、次の暴風雨の時に頭蓋骨が海岸へ打ち上げられ、その次の時に胴體が打ち上げられて來ました。かうして身體中の骨が一緒に揃つた時、母親はそれを風呂敷に包んで敎會へ持つて行きました。處が、まあ不思議ではないか。彼女が御堂の中へ這入つて行くと、だんだんその包みが重くなつて來ました。そして、終にそれを祭壇の階上に載せた時、子どもは烈しく泣き出しながら、その風呂敷の中から飛び出して、皆をあつと驚かせたと云ふことです。ただ右の手の小指の骨が一つだけ缺けてゐましたが、それもその後母親が懸命に搜して、たうとう搜し當てました。その骨は記念として今なほ敎會に他の遺物と一緒に保存されてゐると云ふことです。

「こんな物語は憐れな母親の上に强い印象を與へました。彼女の想像力は新な飛躍を覺えました、胸裡の感慨は更に深まりました。彼女は、今こそあの兒が自分自身と兩親の罪を贖つてくれた、これ迄三人の上にかかつてゐた呪ひも罪もすつかり取り除かれたと云ふやうに思ひ込んでしまひ

ました。そこで、するべきことは子どもの遺骨を拾ひ集めて、羅馬へ持つて行くことだ、さうすれば、あの兒は聖ペテロ教會の大きな祭壇の階上で、再び健かな身體になつて、衆人の前に立ち上がりながら、あの兒のあの眼で再び父や母を見てもくれよう、すれば又法王も、神様と聖者たちとの同一意志を信じて、衆人の歡呼の裡に兩親の罪を赦し、無罪の宣告をして、二人を晴れて夫婦にして下さるだらうと、かう思ひ込んでしまつたのです。で、それからはもう彼女の眼も、彼女の注意もすつかり湖水とその岸の方へばかり向けられるやうになりました。夜半月光の下に濤の打ち返すのを見ては、その閃めく泡の中にわが兒が泛かび上つてゐるやうに思ひました。で、見せかけだけでも、誰かがそれを渚で捕まへるために駈け下りて行かなければなりませんでした。晝間は又、小石交りの渚が緩く湖の中へ入り込んでゐる邊りを、根氣に彷ひ歩いて、どんな骨でも見當たり次第に小籃の中へ拾ひ取るのでした。誰も彼女に向かつて、それは動物の骨だと教へてやる勇氣はなかつたのです。大きいのは埋めて、小さいのだけ持つて歸るやうにしてゐました。かういふ仕事を倦まず撓まずつづけてゐました。牧師も、自分の義務を容赦なく果した結果彼女をこんな狀態に陷れたのだから、今や全力を擧げて彼女の世話をしました。彼の言動で、近隣の人人も彼女を狂人とは思はないで、一種の法悅に入つた人と信じるやうになりました。そして、

彼女がそばを通る時には、合掌して立ち停まりました。子供たちは彼女の手に接吻しました。

「彼女の附添ひでもあれば忠實な友達でもあつた婆さんは、あの二人が不幸な契りを結んだ際に、それに連坐して、一種の罪を負うてゐたものと思はれますが、それを、例の懺悔僧は、その婆さんが生命のある間は絶えずこの不幸な女性に附き添つて、忠實に世話をするといふ條件の下に、やうやく釋してやりました。そして、その婆さんは實際驚くべき忍耐と誠意とを以てこの義務を果たしました。

「その間私どもは決して弟から眼を離しませんでした。尤も、私どもが彼の前へ出ることは、醫者も僧院の人達も許してはくれませんでした。が、彼が兎に角無事で居ることを知るために、こちらの望み次第何度でも、庭や、十字廊下や、彼の部屋の天井窓などからそつと窺ふことは許されてゐました。

「いろいろ怖ろしい、又不思議な時期を經過した後で、——それはここには略して置きますが、——弟は精神は安靜で身體は不安といふ妙な狀態に陷りました。彼は竪琴を執つて彈く時の外は、——勿論大抵それに合はせて歌を唄ひましたが、——さう云ふ時の外は、決してぢつと腰を卸ろしてはゐませんでした。その外は始終忙しさうに動いて居ました。そして、何事にも極端に御し

易く從順でした。と云ふのは、彼のあらゆる情念は融けて死の恐怖の一念になつたらしいのですね。ですから、危險な病氣とか死とかいふもので脅しさへすれば、彼を動かして何んな事でもさせることが出來たのです。

「彼が僧院の中を疲れも知らないやうに彼方此方歩き廻はりながら、かうして山や谷を駈け廻はる方が餘程ましだなどと、口に出して言つてゐたのも變でしたが、その外にもなほ始終物の化に惱まされてゐることも口にしてゐました。即ち夜半目を覺まして見ると、いつも美しい少年が寢臺の側に立つてゐて、手に拔き身の小刀(ス)を持つて威嚇すると云ひ張るのです。他の部屋へ移して見ました。が、其處でも、仕舞には僧院の他の場所へ行つても、矢つ張りその少年が覗つてゐると云ひ張りました。彼の彼方此方彷ひ歩くのがいよいよ不安さうになつて來ました。そればかりか、その時分彼が平常よりもたびたび窓際に立つて、ぢつと湖水の上に見入つてゐたことを、後になつて人人は心に思ひ浮べました。

「その間私どもの妹は、可哀さうに、例の一念や、變化のない仕事のために、だんだん衰弱して行くやうに見えました。で、醫者はたうとう發議をして、彼女の拾つた骨の中へ子どもの骸骨を少しづつ混ぜて、さうして彼女の望みに力を添へてやらうといふことになりました。さう云ふ試

みは隨分いい加減なものに思はれました。が、さうすれば少なくとも、總ての骨が集まつた場合には、かうして際限もなく搜すことを罷めさせて、羅馬へ旅立つ望みを持たせることが出來るとと云ふだけの利益はありさうに思はれました。

「で、いよいよ實行せられました。附添ひの婆さんは、任された骨を妹の拾つたものとこつそり取り換へて置きました。そして、各部分の骨がだんだん集まつて、なほ足りないのはこれこれだと云ふことまで分かつて來ると、憐れな病人の顏には、何とも云はれない喜悅の色が漲つて來ました。彼女は各の部分を、それ相應の場所に、一一丁寧に絲や紐で縛りつけて、なほその間の缺けた部分は恰度聖者の遺骸を祀りでもするやうに、絹地や刺繡の切れで補つて置きました。

「かうして五體の骨をよせ集めて置きました。ただ足りないのは僅かの末端だけになりました。或朝妹がまだ眠つてゐる時、醫者がその容態を訊ねに來ましたので、婆さんは患者が日頃どんな仕事をしてゐるかを見て貰はうと思つて、寢室の中に置いてあつた小匣から例の尊い遺骨を取り出したものです。間もなく妹が寢臺から跳ね起る物音がしました。恐らく覆ひを揚げて見て、その小匣が空になつてゐるのに氣づいたのでせう。彼女はいきなりそこに跪きました。みんなが行つて見ると、彼女は如何にも嬉しさうに熱心に祈つてゐたのです。『ええ、矢つ張り本當でし

た、』彼女は叫んでゐました、『夢ではない、實際です。さあ皆さん、一緒に喜んで下さい。私はあの可愛い綺麗な兒が再び生き返つたのを見たんですよ。むつくり起き上がつて、覆(メール)をかなぐり捨てると、後光がぱつと部屋中に輝きました、その兒の美しいことと云つたら神神しい位でしたよ。あの兒は床を踏まうと思つても踏むことが出來ないのでした。ふはふはと空中へ引き上げられて、私に手を差出すことさへ出來なかつたんですよ。そこで私を喚び招きながら、私の行くべき道を教へてくれました。ええ、私もあの兒に隨いて行きますよ。ぢきにあの兒の後を追うて行きますよ。どうもそんな氣がするんですもの。そして、それを思ふと、胸が輕くなるんです。いろんな惱みはもうすつかり熄えてしまひました。あの復活した子どもを見ただけでもう今から天國の悅びを味はつたやうな氣がします。』

「その時からと云ふもの、彼女の胸裡は極めて洋洋たる希望に充たされて來ました。彼女はもう現世の事などには目も呉れませんでした。食事もほんの僅かしか攝りませんでした。そして、その精神は次第に肉の羈絆から離れて來ました。で、或日のことたうとう彼女が突然血の氣も褪せて人事不省になつてゐるのを發見しました。それ切り彼女は二度と眼を開きません、私達の所謂死に就いてしまつたのです。

「彼女の幻覺の噂は間もなく世間へ弘まりました。そして、生前彼女が享けてゐた世間の敬意は彼女の死後急に一轉して、彼女を目して祝福せられたもの、聖なるものと見なす思想に變りました。

「いよいよその遺骸を埋葬しようとすると、諸方から多くの群集が押しかけて來ましたが、その凄ましい勢ひたら丸で嘘のやうでした、そして、その手に觸れよう、せめてその着物になりと觸れようといふのです。この高められた感激のうちに、さまざまな病人が、それ迄惱んでゐた病苦を忘れたやうになりました。彼等はそれを癒つたものと信じて、その信仰を告白しました。そして、神を讃め稱へながら、この新しい聖者を讃美しました。僧院の方では已むなくその遺骸を禮拜堂へ安置することにいたしました。庶民はみな禮讃の機を得ようとしましたので、その雜沓は迚も信じられない位でした。さなきだに熱烈な宗教的感情に傾きがちな山の住民どもは、山間から押し寄せて來ました。信心や、奇蹟や、禮拜が日日に高まつて行きました。かう云ふ新奇な信奉を制限し、行く行くは撲滅しようと云ふやうな監督會の布令などは、迚も實行が出來ませんでした。寧ろそんな反對の出るたびに、群集は一層昂奮して、不信者には何人を構はず暴行をも加へかねない劍幕でした。『あの聖者ボロメオ(二〇)も』、彼等は叫んで云ひました、『我我の祖先と肩を並べ

てゐられたではないか、その聖列加入式には母君も御列席になつたではないか。あのアロナの巖上にある大きな立像はその偉大な精神を目に見せようために造られたものではないか。その子孫は今でもなほ我々の間に住んでゐられるではないか。そして、神様は信仰の篤い人達にはいつも奇蹟を見せてやらうとお約束になつたではないか。』

「數日を經ても彼女の遺骸は何等腐敗の兆候を見せないで、却てだんだん白く、殆ど透明になつて行くらしいので、人人の信仰はいやが上に高まつて來ました。そして、群集の間にいろんな平癒の實例があらはれましたが、いかに嚴密な觀察者でもそれを說明することが出來ず、無造作に欺瞞とも云ひ切れなかつたのです。で、其邊界隈は大變な騷ぎで、自分で參詣しないものも、少なくともその當座はその噂より外には何物をも耳にすることが出來ませんでした。

「私どもの弟が住んでゐた修道院も、他の地方と同じやうに、矢つ張りこの奇蹟の噂で持ち切つてゐました。所が、彼は始終何事にも注意しなかつたのと、この事件と彼との關係を誰一人知つてゐる者がなかつたのとで、彼の面前でこの話をしないやうにしようなどとは誰も考へませんでした。處が、彼はこの度だけは非常に綿密にそれを聽いてゐたらしいのですね、何うしてその僧院を脫け出したものか、誰にも合點が行かない程巧妙に逃亡を實行してしまひました。後で聞け

ば、何でも多くの巡禮に紛れて渡船場を越したと行ふことで、船頭も別段怪しいものとは思はなかつたが、ただどうぞ船を覆さないやうにしてくれと、呉呉も賴んでゐたと云ふことでした。夜更けて漸く彼は戀人が娑婆の苦を遁れて永眠してゐる禮拜堂へ辿り着きました。ただ僅の信者が隅の方に跪いてをりました。そして、彼女の古い附添ひの女もその枕頭に座つてゐました。彼はその側へ近づいて、お婆さんに挨拶をしながら、御主人の樣子は何うかと訊ねました。『御覽の通りで御座います』お婆さんはやや狼狽しながら答へました。彼はその亡骸をただ側の方から見遣りました。そして、少時躊躇した後で、その手をそつと握つて見ましたが、その冷たさに吃驚して、すぐに又それを離してしまひました。それからきよときよと四邊を見廻はしながら、その婆さんに云ひました。『私は今は此女の側に附いてゐられない、まだまだ長い旅をしなくちやならないからね。しかし時節が來れば又屹度ここへ歸つて來るよ。どうか、眼を覺ましたら、さう言つておくれよ。』

「彼はその場を去つてしまひました。この出來事が私どもの耳へ這入つた時は、もう晩かつたのです。それから隨分その行方を尋ねましたが、皆目分かりませんでした。何うしてまああの山山や谿谿を越して行つたものか、想像も出來ませんよ。ずつと後になつて、グラウビユンテンで一

寸その影を見かけたと云ふ者もありましたが、それももう後の祭で、すぐに又見失つてしまひました。獨逸へ這入つたと云ふことだけは、ほぼ想像が着きました、が、あの戰爭騷ぎで、そんな幽かな足跡などはすつかり搔き消されてしまつたのです。」

十

牧師は讀むのを罷めた。一人として涙を流さずに聽いてゐた者はなかつた。伯爵夫人は一度も半帛を眼から離さなかつたが、たうとう立ち上がつて、ナターリエと一緒にその部屋を去つた。自餘の人人は默つてゐた。すると、牧師が口を開いた。「で、かうなりますと、あの侯爵に私どもの祕密を打ち明けないで、この儘お立たせ申したものか何うかといふ問題が起るんですよ。だつて、そのアウグスチンが例の竪琴彈きの老人と同一人だと云ふことは、誰が少しでも疑ふでせう。で、あの不幸な人のためにも、又その一族の方方のためにも、一體どうしたものか、そこは大に熟考を要する次第なのです。私の意見としましては、この際決して急がないで、今にもあの醫者が歸つて參りませうから、その報告を待つことにしたらと思ひますよ。」

誰もそれと同意見であつた。すると、牧師はなほ續けて云つた。「處で、同時に今一つ問題が起

つて來るんですが、この方は多分もつと早く片付きさうに思はれますよ。あの侯爵は、御自分の憐れな姪御が私達の間で、殊にこのギルヘルムさんから受けた親切には、殆ど想像も及ばない位感激してゐられるんですね。私はその話を事細かに、しかも繰り返し繰り返しお話ししなければなりませんでした、さうしますと侯爵は深甚な感謝の意を表してゐられました。あの方の仰しやるには、『あの青年の方は、まだお互の間に存在する關係が分からない以前に、私と旅行を共にすることをお斷りになつたのです。然し、かうなればもう私も、その日常生活や氣立てなどを信用して頂けないやうな他人ではない、あの方の御恩を受けた者、いや場合によつては親戚といつてもいい位です。それに最初あの方に私との同行を思ひ止まらせた故障と云ふのも、子どもを殘して行きたくないと云ふ所にあつたのですが、それならば今度はどうかそのお子さんを、二人の間をいよいよ固く結び着ける美しい鎖にしたいもので御座いますね。あの方にはこれ迄既に深いお世話になつてゐるんですが、なほ今後も旅行中はいろいろ私の爲に便宜を計つて頂きたいものですよ。そして、一緒にお連れ申して故國へ歸りたいと思つてゐるんですがね、兄もどんなにか喜んでお迎へ申すことだらうと思ひますよ。あの方もどうか御自分の養ひ兒の遺産を拒まないで頂きたいものです。實は私どもの父と例の友人との間に内約があつたため、あのスペラータに讓る

ことになつてゐた財産が、再び私どもの手へ戻つて來てゐるんですよ。私どもも自分達の姪の恩人に對して、贈るべきものを上げないで置きたくはないんですから』と、まあかうなんですよ。」

テレーゼはギルヘルムの手を把つて云ひました。「本當にお蔭さまで、情は人の爲ならずとか申す、あの諺の何より美しい例證を再び見せて頂きました。貴方もどうかこの不思議なお招きをお受けなさいましな。そして、侯爵に重ね重ねお世話申上げたら、一刻も早くあの美しい國へ入らつしやいまし。あの國へは貴方の想像も、貴方の情緒も一再ならず惹かれてゐたではありませんか。」

「ええ、私は一切皆さんに、皆さんのお指圖にお委せしますよ、」ギルヘルムは云つた。「この世の中ではいくら自分の意志通りにしようたつて、それは駄目ですよ。私が一生懸命に捕まへてゐようと思つたものも、仕舞には離さなければならなくなるし、さうかと思ふと身に餘る恩惠がどしどし向うから押し懸けて來るんですからね。」

ギルヘルムはテレーゼの手をしつかり握り締めた後で、そつと自分の手を離した。

「一切貴方にお委せしますから、」彼は更に牧師に向かつて云つた。「どうか私の身の振り方をお極め下さい。あのフェーリックスを手離さないで濟みさへすれば、私はもうそれで滿足して、何處

へでも出掛けもしませう、又何なりと皆さんが善いとお思ひになることをやつてもみませう。」

その表示を聞いて、牧師はすぐにその計畫を述べにかかつた。卽ち侯爵はすぐにお立たせ申すこと。ギルヘルムは例の醫者の報告を待つて、それから何うすべきかをよく相談した上で、フェーリックスを連れて後から出發することと云ふのであつた。そこで彼は又侯爵に向かつて、ギルヘルムの旅立ちの準備のために貴方をお引きとめ申しては濟まないからと云ふ口實の下に、その間市中の名所でも御覽になつてはと說き勸めた。侯爵は、宜敷お禮を言つてくれと繰り返し謝意を表しながら出發したが、後に殘して行つた珠玉や、寶石や、刺繡をした切れ地などの贈り物を見ても、十分にその意のある所を悟ることが出來た。

今やギルヘルムもすつかり旅の準備が出來てしまつた。それだけに、例の醫者からは何の報告も來ないのがいよいよ當惑の種になつた。憐れな竪琴彈きの身の上に何事か不幸が、恰度彼の境遇を根本的に改善することも出來さうに思はれて來た今になつて、起つたのではあるまいかと、いづれも氣を揉んだ。で、いよいよ飛脚を出してみた、それがまだ出發するかしないかに、夕方醫者は一人の見知らぬ男を伴れて這入つて來た。その容子といひ物腰といひ、何か意味ありげで、眞面目臭く、人目を惹くものがあつたが、唯一人知つてゐる者はなかつた。二人ともやや

暫くの間默つて立つてゐた。たうとうその見知らぬ男はつかつかとギルヘルムに近寄つて、握手を求めながら言つた、「貴方はもう古いお馴染をお忘れ下さいましたか、」それは正しく竪琴彈きの聲であつた。が、その姿には昔の面影は少しも殘つてゐなかつた。普通の旅人の服裝をして、小さつぱりと體裁よく着込んで、例の鬚もなければ、髮の卷き方にも相應の手入れが行き屆いてゐた。殊にすつかり彼を見違へさせるやうにしたのは、あの立派な顏に老の特徵が少しも見えなくなつてゐることであつた。ギルヘルムは雀躍しながら相手を抱擁した。なほその他の人人にも紹介されたが、物腰極めて眞面目であつた。そして、ほんの僅か前に自分の身の上が一座の人人に委しく知られてゐようなどとは、夢にも知らなかつた。「見た所は慥に大人で御座いますが、」彼は極めて落着いた態度で言葉をつづけた。「長煩ひの後で、宛然何も知らない子供のやうに世の中へ出て來たもので御座いますから、何卒幾重にも御容赦の程お願ひ致します。かうして私が又人樣の中へ顏を出すことが出來るやうになつたのも、一重にこの大先生のお蔭で御座います。」

一同は歡んで彼を迎へた。が、醫者はさう云ふ會話を罷めさせて、たわいもないことに氣を散じさせるために、すぐ散步を促した。

で、病人のゐなくなつた時、醫者は次のやうな事實を說明した。「あの老人があれ程迄に恢復したのは、全く奇妙な偶然の出來事のお蔭なんですよ。私どもは長い間自分達の確信に從つて精神的にも肉體的にも治療を加へて來ました。それが又或程度までは奏效したので御座います。けれども、まだ死の恐怖は相不變あの老人にあつては普通以上でした。それからあの願鬚や長い衣は、どう言つても脫ぎ捨てようとはしませんでした。が、その他の點では、世の中の事柄にも前よりは一層興味を有つやうになりましたし、歌ふ唄も、あの人の考へと同じやうに、再び人生に近づいて來るやうに見えました。御存じの通り、私はあの牧師から不思議な手紙を貰つて出かけて參つたのですが、行つて見ると、あの老人の樣子がすつかり變はつてゐるんですね。自ら進んで鬚を剃らせてしまつたり、髮も世間並に刈ることを承知したり、通常の着物を要求したり、眞個突然別人となつたやうに見えました。何うしてこんな變化が起つたかと、私どもはその原因を究めたくつて耐りませんでしたが、それに關してあの人を直接相手にするだけの勇氣もありませんでした。すると、仕舞に偶然ながら途方もない事情を發見したので御座いますよ。牧師の藥室に置いてあつた液狀阿片の瓶が急に見えなくなつたんです。そこで嚴しい詮索をする必要があると云ふことになりましたが、誰も彼もそんな嫌疑のかからないやうにしました、殊に下女下男の間に

は烈しい評論まで起りました、が、仕舞にあの老人が來まして、自分がそれを持つてゐると白狀したので御座います。で、若しやそれを飲みはしないかと訊いて見ました。すると、『いや、飲みません』と言つて、更に言葉を續けて云ひました。『私が再び正氣に還つたのは、これを持つてゐるお蔭で御座いますよ。私からこの小罎をお取上げになるのは、貴方がたの御隨意で御座いますが、さうなれば私はまた元のやうになつてしまつて再起の望みもなくなるでせう。實は、死んでこの世の苦艱を遁れた方が願はしいと、思ひ出したのが、恢復の第一歩で御座いました。それから間もなく自殺に依つて此世を去らうと云ふ考へが起きて、その目的であの瓶を持つて行つたので御座います。いつでもこの大きな苦痛を永久に取り去ることが出來るといふ望みが出來てからは、却てその苦痛を怺へる力が湧いて來ました。さう云ふ譯で私は、この護符を手にしてからと云ふものは、死の接近に依つて再び生へ押し戻されたので御座いますよ。どうぞこれを飲みはしまいかなどと云ふことを心配して下さいますな。それよりも、人間の心をよく御存じの皆樣であるから、どうぞ私にこの世からの離脫を許して置いて、始めてこの世に執着させてるやうにして下さいませ。』いろいろ相談した後で、私どももその上餘り追求しないことに致しました。そんな譯で、今やあの老人は固い截り硝子の罎の中に、その毒藥を不思議な解毒劑として始終持ち廻はつ

てゐるんですよ。」

それから皆は、その間に發見された一切の事柄を醫者に話して聞かせた。そして、アウグスチンに對しては、絶對に緘默を守ることを申し合はせた。牧師は老人を決して自分の側から離さないで、折角彼が踏み出した良好な經過を續けさせることを引き請けた。

その間にギルヘルムは侯爵と獨逸國内の遍歷を終はることになるだらう。で、若しアウグスチンに再び望郷の念を起させることが出來さうに見えたら、その一族へ事情を通じてやつた上、ギルヘルムにその家族の許へ連れて行つて貰はうと云ふことになつた。

今やギルヘルムはすつかり旅行の準備が整つてゐた。處で、自分の知己でもあり恩人でもあつた彼が直ぐに又遠方へ行つてしまふと云ふ話を聞いて、アウグスチンが却て喜んでゐる風が見えたのは最初大變不思議に思はれたが、間もなく牧師はこの奇態な心持ちの原因を見拔いてしまつた。老人は前からフェーリックスに對して持つてゐた恐怖の念をまだ征服することが出來ないで、一刻も早くこの少年が何處かへ行つてくれればいいと願つてゐたのであつた。

で、かう云ふ風に多くの人人が次次に遣つて來たので、館の中にも、翼館の方にも殆ど收容し切れない位であつた。殊に最初からこんなに多くの客を迎へる積りで建てたものでないから、そ

の困難が一層甚だしかつた。人人は朝餐も一緒に取れば、晝餐も一緒に喫した。そして、各自内心では或程度まで別かれたいと思つてゐながら、圓滿な仲のよい生活を送つてゐるものと空想し勝ちであつた。テレーゼはよくロタリオと一緒に馬に乘つて出たが、一人で出ることは一層多かつた。彼女は近所の百姓や百姓の女ともすつかり近づきになつてしまつた。かういふやり方が家政上の彼女の主義であつた。男女を問はず近所の人とは出來るだけ懇意にして、末永くお互に親切を盡し合つて行かうと云ふのはさのみ間違つたものでもなかつたらしい。彼女とロタリオとの結婚に就いては、誰一人それを口にするものがないといふ風であつた。ナターリエと伯爵夫人との姉妹は互に積もる話しに興が盡きなかつた。牧師は成るたけ竪琴彈きの老人の相手をしてゐるやうに見えた。ヤルノーは例の醫者とたびたび會談をした。フリードリヒはギルヘルムを捕まへて遁がさぬやうにしてゐた。そしてフェーリックスは、何處でも自分の好きな所へ行つてゐた。團樂が解けて、散歩にでも出るやうな時には、大抵こんな工合に組が出來上つた。そして、又一緒になる必要のある場合には、各自自らに沒頭しながら、一同が結合する良策として、すぐに音樂に遁げ込んでしまつたものだ。

かう云ふ仲間へ又思ひがけなくもかの伯爵が加はつた。伯爵は夫人を迎ひ取るためと、今一つ

は俗界の身内に改めて暇乞ひをするために來たものらしかつた。ヤルノーは急いで馬車のそばまで出迎へた。そして、どう云ふお客樣方がゐるのかと、到來の人が尋ねた時、彼は、伯爵の顏を見ると、屹度出る癖のはしやいだ氣分に襲はれて云つた。「いやもう伊太利の侯爵やら、英國の侯爵伯爵それに男爵やら、世界中の貴族がすつかりお集まりで御座いますよ。ただ缺けてゐるのは獨逸の伯爵だけでしてね。」二人は階段を上つて行つた。そして、第一番に玄關室に彼を迎へたものは、ギルヘルムであつた。「閣下(ミロード)」伯爵は一瞬間彼を見詰めてゐた後で、佛蘭西語で云ひ出した、「ここで又圖らずも閣下との御懇親を新にすることが出來るのは、私の深く喜びとする所で御座います。私の思ひ違ひでなければ、いつぞや公爵の御一行に加はつて手前どもの邸へお見えになられたやうに信じて居りますが、いかがで御座いませう。」――「はい、あの時御前に伺候する光榮を得たもので御座います、」ギルヘルムは答へた。「但しこの私を英國人、しかも上流の英國人と御覽下さいますのは、光榮身に餘つて、却て恐縮千萬に存じます。實は獨逸人で御座います、而も」――「而も極めて粹な若者で御座います、」ヤルノーは透かさず口を挾んだ。伯爵は微笑を含みながらギルヘルムを見詰めてゐた。そして、何か言はうとして時、どやどやと他の連中が這入り込んで來て、鄭重に伯爵を迎へた。それから、直ぐに相應な室へ案内することが出來ないこ

とを陳謝しながら、必要な部屋數だけは時を移さず提供する旨を約束した。

「おや、おや、」伯爵は微笑しながら云つた。「して見ると、宿の振り當てもその場任せにおやりでしたね。少し氣を附けて整頓すりや、大抵の事はうまく行くものですがねえ。で、差し當りお願ひしますが、私のためにはどうか上靴(スリッパ)一つも動かさないで置いて下さい。さもないと、思ふに、大混雜が出來しますからねえ。そして、何誰もさぞ窮屈な目にお遭ひでせうよ。だが、私のためには、出來ることならただの一時間たりとも、さう云ふ目に遭つて頂きたくないですからねえ。君も見て知つてゐますね、」伯爵はヤルノーに向かつて云つた、「いや、貴方も御存じの筈だ、ねえマイステルさん、」ギルヘルムの方へ振り向きながら附け加へた、「あの當時私はどれだけ多くの方方を邸の中に、しかもお樂にお泊め申したことでせう。まあ私にお客さん達やお供の衆の名簿を見せて下さい。そして、御銘銘の部屋割りが何うなつてゐるか見せて頂きませう。さうすれば、私は、皆さんがほんの少しのことで廣々とした部屋の取れるやうに、なほ又何んな事があつて新しいお客さんが後からやつて來られても差支へのないやうに部屋の餘裕を作つて置くため、一つ部屋割りの變更をしてお目に懸けませう。」

ヤルノーは直ぐに伯爵の副官に早變りして、あらゆる必要な報告を供給した。そして、いつも

の彼の癖で、時時その古い主人を間誤つかせては、譯もなく喜んでゐた。けれども、伯爵は間もなく立派に勝利を得た。整理はすつかり出來上がつた。彼は自分の目の前で室室の戸口へ悉く名前を書かせてしまつた。そして、僅かの手心と變更とで、その目的が完全に達せられたといふことは、何人も拒むことが出來なかつた。殊にヤルノーの取り計ひで、現在相互の間に深い關係を持つてゐる人達は成るたけ同室に這入るやうになつた。

總ての整理がついた後で、伯爵はヤルノーに向かつて云つた。「君がたがマイステルと喚んで居るあの獨逸人だとか云つてる若い人だがね、あれは一體どう云ふ方だか、一寸記憶の緒をつないでくれませんか。」ヤルノーは直ぐに返辭をしないで、ぢつと默つてゐた。と云ふのは、他人(ひと)に物を訊ねるのも、實は自分の方で教へようといふ考からに過ぎないやうな人があるものだが、伯爵は正にその一人であることを彼は能く知つてゐたからである。果して伯爵は、先方の答へを待たないで、自分の言葉をつづけた。「あの時あの人を私に紹介してくれたのは君でした。君は公爵の名に於て極力あの人を推奬してゐたよ。あの人のお母さんは獨逸人かも知れないが、あの人のお父さんはどうしても英吉利人だね。しかも身分のある英吉利人だね。それだけは私が保證するよ。だが、もう三十年も獨逸人の血管の中を流れてゐる英吉利人の血を、誰が一一問題にするだ

らう。私ももうこれ以上追求はしないよ。君がたはよくさう云つたやうな家庭の祕密を知つてゐるね。だが、さう云ふことで私は決して胡魔化されはしない積りだよ。」それからなほ伯爵は、その當時邸の中でギルヘルムに關聯して起つたと云ふ、さまざまな事件に就いて話しをした。そして、すつかり間違へて、ギルヘルムと公爵の隨行員の中に加はつてゐた若い英吉利人とを幾度となく混同したけれども、ヤルノーは前と同じやうに默つてゐた。實際この善良な伯爵は、以前は素晴らしい記憶力を有つてもゐられたし、始終自分が幼少時代の微細な事柄まで覺えてゐることを常に自慢にしてゐた。が、今では日增しに記憶力が弱つて、ただ想像でひよいと想ひ泛かべたやうな、奇妙な推量や假想までも、昔と同樣に斷然事實だと極め込む癖があつた。その外の點では、彼は非常におとなしく愛想よくなられた。彼がここへ來たといふことは一同の者にも極めて好い影響を與へた。彼は又何か利益になるやうなものを一緒に讀んではどうかと發議をしたり、時には又一寸した遊戯などを主唱したりした。勿論自分ではそれに加はらなかつたけれども、非常に熱心に指圖したものだ。で、側の者がその平民振りに驚いて見せると、いや、世間の大事件から手を引いた者といふものは、どうでもいいやうな事柄でいよいよ世間に適合して行くのが、こりや人間の義務ですよ、と言つてゐた。

さう云つたやうな遊戯の最中に、ギルヘルムは一度ならず不安な、腹立たしい目に出遭つた。それは例の剽輕なフリードリヒが、何かと機會を摑んでは、幾度となくナターリエに對するギルヘルムの愛着を仄めかしたのであつた。何うしてそれを氣取つたのであらう。何を證據にそんな事を云ふのか。皆の人達も、二人が平常からよく一緒になつてゐるので、ギルヘルム自身が彼にそんな輕はずみで、そして緣起でもない打明け話しをしたものと思ひはしないだらうか。

或日皆がそんなやうな冗談を云ひ合つて、平常よりは陽氣にはしやいでゐた時、突然アウグスチンがぱつと扉を開いて、恐ろしい劍幕で飛び込んで來た。見ると、顏色は蒼醒め、眼の色は變はつてゐた。何か云ひたいやうではあるが、思ふやうに口が利けなかつた。一座の者は吃驚した。ロタリオとヤルノーとは、又氣違の發作が起つたものと推定して、飛びかかつて、しつかり老人を抑へ附けた。老人は吃つたり、もぐもぐしたりしながら、たうとう烈しく荒荒しく叫び出した。「私を捕まへてゐちや不可ない。急いで行つて、助けて下さい。あの兒を助けて下さい。フェーリックスが毒を呑んだんです。」

云はれて、こちらが手を離すと、彼はその儘部屋を駈け出して行つた。一同は驚きかへりながら、その後を追つた。醫者もすぐに喚びにやつた。アウグスチンは牧師の部屋の方へ歩みを向け

た。見ると、そこにフェーリックスが立つてゐた。「お前はまあ何を仕出かしたんだ、」と、遠くから喚びかけられて、子供は吃驚して、どぎまぎしてゐるやうに見えた。

「お父さん、」フェーリックスは叫んだ。「あたいはね、罎からなんか飲みやしないよ、洋盃から飲んだんだよ。だつて、咽喉が渇いてたまらなかつたんだもの。」

アウグスチンは兩手を拍ちながら叫んだ、「ああ、もうこの兒は助からない。」そして、周圍に立つてゐる人人を押し除けながら、何處ともなく駈けて行つてしまつた。

見ると、卓子の上に巴旦杏乳劑の入つた洋盃があつて、その側には半分以上空になつた罎が立つてゐた。そこへ醫者も駈けつけた。そして、仔細を聽き取つたが、かねて見覺えのある、液體阿片の入つた、例の小罎が空になつて卓子の上に轉がつてゐるのを見ては、今更のやうに色を失つた。それから醋を取り寄せるやら何やらして、あらゆる治療の手段を盡くして見た。

ナターリエは子どもを他の部屋へ連れて行かせて、心配しながら介抱してゐた。牧師はアウグスチンを捜し出して、無理にも何か要領を聞き出さうと、急いで駈け出して行つた。不幸な父のギルヘルムも同じく骨を折つて見たが、すべて徒勞に終はつた。で、引き返して見ると、いづれの顏にも不安と心配との色が漾つてゐた。醫者はその間に洋盃の中の巴旦杏乳劑を試驗して見た

が、ひどく阿片の混じてゐることが分かつた。子どもは寢臺の上に寢かされてゐたが、どうも樣子が重態らしかつた。そして、もうこの上藥を飲ませたり、自分を苦しめたりしないでくれと、父に哀願してゐた。ロタリオは大勢の下男どもをして探させたが、自分もアウグスチンの跡を追つて馬で出かけた。ナターリエはぢつと子どもの側に坐つてゐた。子どもは遁げるやうに彼女の膝へ這ひ上がつて、庇つてくれと懸命に賴んだり、醋があんまり酸つぱかつたから、砂糖を少しくれと强請つたりした。醫者はそれを許した。そして、子どもは恐ろしく昂奮してゐるから、少時安靜にして置かなければ不可ない。既にあらゆる手段は盡くしたのであるが、なほ出來るだけの事はする積りだと云ふのであつた。伯爵は見た所不快げな面持ちで傍へ進み寄つた。いかにも眞面目な、寧ろ儼しい表情で、兩手を子どもの頭に載せながら、ぢつと天の一方を見上げた。そして、少時の間この姿勢をつづけてゐた。悵然として椅子に身を投げ出してゐたギルヘルムは、急に立ち上がつて、絶望に充ちた一瞥をナターリエの上に投げたまま、部屋を出て行つてしまつた。

間もなく伯爵もその部屋を去つた。

「どうも不思議ですねえ、」少時默つてゐた後で、醫者は云ひ出した、「危險狀態の徵候がこの兒に

はちつとも見えないんですよ。たつた一口呑んだだけだとしても、阿片は隨分多量に飲んでゐる筈ですがねえ。處が、今脈を見ますと、ただ服藥とか、騷ぎのための恐怖とかの結果以外には、何の昂奮も認められないんですよ。」

その後間もなくヤルノーが飛び込んで來て、アウグスチンは屋根裏の部屋で血塗れになつて倒れてゐた、剃刀がその傍に落ちてゐたから、多分それで咽喉を搔き切つたのだらうと云ふ報告を齎した。醫者はすぐに駈け出して行つた。そして、下男どもが老人を擔いで階段を降りて來るのに出會つた。早速寢臺の上に臥かせて、綿密な診察をして見た。斬り傷は深く氣管に達してゐた、甚しい出血に續いて人事不省に陷つたのであつた。が、間もなく生命には別條なく、まだ望みがあると云ふことが明白になつた。醫者は身體の位置をちやんと直して、傷の部分を合はせて、上から繃帶をかけた。その夜は一同心配し乍らまんじりともせずに明かした。子どもは些ともナターリエから離れようとしなかつた。ギルヘルムは彼女の正面で足置き臺に座を占めた。そして、子どもの足を膝の上に載せてゐてやると、頭と胸とは彼女の膝に凭つかかつてゐた。かうして二人はこの快い重荷と痛ましい心遣ひとを分かち合つたまま、さう云ふ氣づまりな遣瀨ない位置で、たうとう夜が明けるまでぢつと座つてゐた。ナターリエの手はいつしかギルヘルムに與へられて

ゐた。二人は默つたまま、子どもの顏に見入つたり、互に眼を見交はしたりするばかりであつた。ロタリオとヤルノーとはその部屋の一方の隅に腰かけて、極めて重大な話しに耽つてゐた。それも讀者諸君に傳へたいのは山山であるが、事態が餘りに切迫してゐるから割愛して置く。子どもはすやすやと睡りつづけたが、朝早く好い機嫌で目を覺まして、跳ね起きるなり、いきなり麵麭とバタとを請求した。

アウグスチンが幾らか恢復すると、人人は直ぐに事の次第を彼から聽き取らうとした。いろいろと骨を折つて、やつとぽつりぽつり聞き糺した所に據ると、彼は伯爵の主唱した飛んでもない室替へに依つて牧師と同じ部屋へ入れられることになつたが、その際何氣なく例の草稿を手に取つて、圖らずもその中に自分の身の上が認めてあるのを發見した。その時の彼の驚愕は譬へやうもない位で、もうこの上は生きて居られない身だと、思ひつめてしまつた。そして、直ぐさま例の阿片に避難所を求めようとして、それを巴旦杏乳劑の洋盃に注いだ。が、いよいよそれを口へ當てがつてみると、我知らず後れが出た。そこで、その洋盃を措いたまま、もう一度この世の見納めに庭園の散歩に出て行つた。歸つて見ると、フェーリックスが、飲み乾した洋盃に再び藥品を注がうとしてゐるのを見懸けたと云ふのである。

人人は不幸な老人に向つて安靜にしてゐるやうに勸めた。彼は痙攣的にギルヘルムの手を握り緊めた。「ああ、私は何うしてもう少し早く貴方のお側を離れなかつたんでせう、」老人は言つた。「私は、自分が手にかけてあの兒を殺すか、自分があの兒に殺されるか、どつちかだとは、ちやんと分かつて居りましたのに。」「いや、子どもは生きてゐますよ、」ギルヘルムは云つた。醫者は默つてぢつと聽いてゐたが、一體あの飲料は兩方共毒を混ぜたのかと、アウグスチンに訊いて見た。「いいえ、ただ洋盃の方だけで御座います、」彼はそれに答へた。「それぢやあの子どもは、」醫者は叫んだ。「仕合せにも偶然罎の方から飲んだんですよ。直ぐそばに膳立の出來てゐた死の方へ手を附けなかつたと云ふのは、全く有難い守護神のお指圖でしたね。」——「いえいえ、さうぢやありません。」ギルヘルムは兩手で顏を蔽ひながら絶叫した。「老人の言つた言葉で恐ろしくなりました。あの兒は罎から飲んだんぢやない、洋盃から飲みましたと、あんなに判然云つてゐるんです。何ともないやうなのはただ見かけだけです。どんなに手を盡しても、あの兒は死んでしまひますよ。」彼は駈け出して行つた。醫者も階下に降りて行つて、優しく子どもをあやしながら訊いた、「ねえ坊や、坊やは罎から飲んだのだらう、洋盃からぢやないねえ。」子どもはめそめそ泣き出した。醫者は私かに事の次第をナターリエに話して聞かせた。ナターリエも何うかして子どもに實

を吐かせようとしたけれども甲斐がなかつた。子供は益烈しく泣くばかりで、たうとう泣き寢入りに寢入つてしまつた。

ギルヘルムはねずに子どもの看護をしてゐた。夜は靜に更けて行つた。明くる朝アウグスチンはもうその寢床の中に綽切れてゐた。彼は安らかに眠つてゐるやうな振りをして附添人を油斷させた上、そつと繃帶を解いて、出血に任せて斃れたのであつた。ナターリエはフェーリックスを連れて散歩に出た。子どもは一生の中の一番愉快な日か何ぞのやうにはしやいでゐた。「小母ちやんは好い人だね、」フェーリックスは彼女に向かつて云ひ出した、「僕のことを叱つたり、打つたりしないね。ぢや、僕小母ちやんにだけ云ふよ。僕本當はね、罎から飲んだの。アウレーリエの母ちやんは、僕が罎に手を懸けると、いつでもこの指をぴしやんと打つたのよ。父ちやんも怖い顏をしてゐたんだもの、僕、又打たれるのかと思つたんだよ。」

ナターリエは飛ぶやうに館へ戻つて來た。ギルヘルムはまだ心配顏に向うから遣つて來た。「仕合せなお父様、」彼女は、子どもを抱き上げて、相手の兩腕の中へ投げ遣りながら、大きな聲で叫んだ。「この兒はもう大丈夫。罎から飲んだんですつて。不行儀のために却て命拾ひをしたんですね。」

人人はこの目出たい成行を伯爵に語つて聞かせた。伯爵は微笑を湛へた、控へ目がちな、沈默の自信を以てぢつと聽いてゐた、恰度諸人の過ちを恕してやると云ふ風であつた。萬事に氣の附くヤルノーも、この度ばかりは此の並並ならぬ得意の由緣を解しかねてゐたが、いろいろ迷つた揚句、たうとう伯爵は、子どもは實際毒を呑んだのであるが、自分が祈禱をしてやつたために、手を額に加へてやつたために不思議にも命を取り留めたのだと確信してゐられると云ふことを發見した。處で、伯爵は直ぐさま旅立つことに決定した。この人の癖として、總てが瞬く間に準備されてしまつた。愈袂れる間際になつて、かの美しい伯爵夫人は、まだ姉の手を離さないうちに、ギルヘルムの手を掴んで、四つの手を一緒にしつかり握りしめさせた。それから素早く身をかはして、馬車に乘つてしまつた。

次次に起つて來る怖ろしい不思議な出來事のために、餘儀なく變はつた生活法をしたり、萬事が混亂や不序秩に陷つたりしたので、家中全體が熱病的な動亂に卷き込まれてしまつた。寢る時間も、起きる時間も、飲食の時間も、團欒の時間も、すつかり狂つたり顚倒したりしてしまつた。テレーゼの外には、誰一人平素の軌道を守つてゐる者はなかつた。男どもは酒など飲んで陽氣にやらうとしたが、さう云ふ附け元氣をするために、却て眞の快活や活動の唯一の源泉である自然

の元氣を失つてしまつた。

殊にギルヘルムは劇しい情熱に動搖され振盪されてゐた。思ひがけない怖ろしい事の襲來のために、內心からすつかり度を失つてしまつて、深く胸の底に喰ひ入つた情熱は、これを制するにも制し切れなかつた。フェーリックスは再びわが手に還された。然も何物をも握つてゐないやうな氣がした。小切手を封入したゼルネルの手紙は既に手許にあつた。この上はただ袂れて行く勇氣さへあれば、旅行に何の閊へもなかつた。萬事が彼の旅立ちを迫つてゐた。ロタリオとテレーゼとは、自分達が結婚をするために、專らこちらの出發を待つてゐるんだとは、彼にも推察することが出來た。ヤルノーは、いつもの癖とは反對に、妙に靜まり返つてゐた。何うやら平常の元氣を失くしたやうにも見受けられた。さて、幸ひにも例の醫者が吾吾の主人公を病氣だと診察して藥を盛つてくれたので、いくらか跋の惡い思ひを免れることが出來た。

一同は宵宵毎に屹度一緒に集まつた。遠慮知らずのフリードリヒは、いつも酒を無暗に呷つて來て、一人で喋つた。そして、いろいろな引證やをどけた諷刺でもつて、彼一流に一座を笑はせたり、又は心で思ふままを口に出して、一同を面喰はせたことも一度や二度ではなかつた。

ギルヘルムの病氣などは、彼は頭から信用してゐないやうに見えた。或時、一同が一緒に寄り

合つてゐた時、彼はいきなり叫び出した。「ねえドクトル、貴方はマイステル君の病氣を何とお見立てなんです。貴方がたの無知を誤魔化すための三千餘種の病名も、一としてあれには當て篏まらないでせう。だが、少なくともあれに似たやうな例なら昔から幾許でもありますぜ。ああ云ふ例は、」彼は一段聲を高めてつづけた。「埃及の歴史にも、又バビロンの歴史にも出て來るぢやありませんか。」一座の者は互に顏を見合はせて、にやにや笑つてゐた。

「そら、あの王様は何とか云ひましたつけねえ。」かう云つて、彼は少時口を噤んでゐた。「いや、貴方がたが教へて下さらなけりや、」彼は言葉を續けた、「私は一人で分かるやうにいたしませう。」彼は扉をぱつと押し開いて、次の間に懸かつてゐる大きな油畫を指さした。「あの寢臺のそばに立つて、病氣の王子を心配して瘠せ衰へてゐる、王冠を被つた山羊髯の王様は何とか云ひましたね。そこへしづしづと這入つて來て、その貞淑さうな、又狡猾さうな眼の中に、毒も解毒劑も兩方ながら持ち合はせてゐる、あの美しい女は何とか云ひましたつけね。又この時始めて心眼が開けて、生まれて始めて處方らしい處方を書いて、病氣を根柢から癒して、效驗があると同時に美味しい藥を盛る機會を得た、あの藪醫者は何とか云ひましたつけねえ。」

かう云ふ調子で彼は喋りつづけた。一座の者は出來るだけ心を引きしめて、無理な伴り笑ひに

心の當惑を紛らしてゐた。ナターリエの雙頰にはほんのりと紅が潮して、胸の中の動搖を物語つてゐた。幸ひにもヤルノーと一緒にあちこち歩いてゐた時であつたので、扉口のそばへ來ると、巧みに身をかはして室の外へ脱け出した。そして、次の間を二三度あちこちした揚句、やがて自分の部屋へ引き取つてしまつた。

一座は妙に默つてゐた。フリードリヒは唄ひながら踊り始めた。

おお皆さん、今に奇蹟がありますよ。
約束事は守るもの、
一旦言うたが百年目。
まだ夜が明けぬその前に、
屹度奇蹟がありますぜ。

テレーゼはナターリエの後を追うて出て行つた。フリードリヒは醫者を大きな油畫の前へ連れて行つて、醫術に對して滑稽な讃辭を呈した後、するりと出て行つてしまつた。

ロタリオはその間出張り窓に立つて、身動きもせずにぢつと庭園を見下ろしてゐた。ギルヘルムは最も怖ろしい地位にあつた。かうしてその友達と差し向ひになつても、彼はなほ暫くの間ぢつと默つてゐた。自分の經て來た道程をさつと一瞥した、そして最後に現在の境涯に眼を据ゑながら、思はずぶるぶる身震ひをした。たうとう彼は立つて、絶叫した。「かうなつた事に對して、又は貴方と私との事情に對して、若し私に責任がありましたら、何うか私を罰して下さい。なほこの上の苦しい試錬として、何うか貴方の友情を引つ込めて下さい。そして、私を廣い世の中へ何の慰安もなく悄然として旅立たせて下さい。本來なら私は疾うの昔に世の中へさ迷ひ出てゐなくちやならなかつたのです。だが、若しこの私を一つの怖ろしい偶發的な紛亂の犠牲であり、その中から脱け出し得ないものであると御覽下さいますなら、何うか貴方の愛と友情との保證を餞別にして下さいませんか。この旅はさうさう延ばしてもゐられません。この頃の私の胸中に就いては、いづれ又貴方にお話しすることの出來る時期が來ることでせう。今私がかう云ふ罰を受けて苦しむのも、恐らく私が早く一切を貴方に打ち明けなかつたからで、私と云ふものをありの儘にお目に懸けることを躊躇してゐたからなんです。さもなければ、貴方の御助力を仰ぐことも出來たでせうし、又然るべき時機に遁がして頂くことが出來たでせう。自分自らを見る眼は幾度

となく開けましたが、それがいつも後の祭りで、無駄になつてしまつたのです。實際私はヤルノーの非難に値ひしてゐます。私は、それがよく理解出來たやうに思ひました、そして新生活に入る上にそれを利用しようと、一生懸命に望んでゐたんです。が、果してそれが私に出來たでせうか、第一それを爲すべきであつたでせうか。一體私ども人間は自分自身に對して、又運命に對して無闇に不平を云ひます。私どもはもともと悲慘なもので、悲慘に運命づけられてゐるのです。して見れば、破滅に陷るのが自分の罪過のためだらうが、より高い影響のためだらうが、美德のためだらうが惡德のためだらうが、但しは聰明のためだらうが狂愚のためだらうが、そんな事は全然同じことぢやありませんか。では左樣なら、御機嫌よう。不本意とは云ひ乍ら、お手厚い御歎待をこれ程ひどく裏切りましたお屋敷に、もう一刻も滯在しては濟みません。弟御さんの無遠慮に到つては容赦しがたいものが御座います。あれが私の不幸を極度に追ひ詰めて、私を絶望の淵へ陷れたのです。」

「處で、若し、」ロタリオは相手の手を執りながら應へた、「あのテレーゼが私と一緒になる決心をしたのも、貴方と私の妹との結婚を窃かに條件としてゐたとしたら、何うでせう。義理を心得たあの女は貴方のためにさう云ふ代償まで考へて置いたのですよ。この二組の夫婦は同じ日に神壇

の前に立たなければならないと、あの女は固く誓つたのでした。『あの方の理性は私を選んだのですが、感情はナターリエさんを要求してゐるのです。ですから、私の理性があの方の感情を助けて上げるんです』と、常にも云つてゐましたよ。そこで二人は心を合はせてナターリエと貴方との様子を見てゐることにしました。それからあの牧師にも打ち明けて相談したのですが、私どもは、この結婚に對して少しも干渉をしないで、何事もその成り行きに任せて置くといふ約束をしなければならなかつたのです。そして、私どもはそれを實行しました。處が、自然がうまくやつてくれました、あの馬鹿な弟はただ熟した木の實を搖り落としたに過ぎないのですよ。さあもう、かうして不思議な御緣に繫がるやうになつたからには、お互に平凡な生活は送らないことにしませう。共共に手を取つて價値ある活動をしようぢやありませんか。眞に教養のある人といふものは、牛耳を取らうなどと思はないで、ただ多數者の後見となる氣があつて、彼等がどうかして爲たいと思つてゐることを、適當の時に實行するやうに導いてやつたり、又彼等の多數が聢と目にしてゐながら、ただ行くべき道を知らないでゐる目的地へ連れて行つてやつたりすれば、自他のためにどれ程大きな貢獻をするかは、到底想像にも及ばないものがありますよ。ここで一つお互に同盟を結ばうぢやありませんか。これは決して妄想ではない、ちやんと實行の出來る理想です

よ。又立派な人達の手では、たとひ明らかな自覺はなくとも、屢實行されてゐる理想ですよ。この點では妹のナターリエが生きた何よりの證據です。あの美しい魂に自然が指定して置いた言動は、常人の眞似ることの出來ないものです。實際あれは他の何人よりもこの名譽ある稱號に値ひしてゐますよ。私どもの伯母は、あの醫師が例の手記に美しき魂といふ表題を附けたその當時は、私どもの知れる範圍では、最も美しい性質の女で御座いましたが、强ひて云へば、その立派な伯母よりも妹の方が一層その名に應はしい位ですよ。それに、ナターリエもだんだん進歩して來ました。人類もかうした人物の出現を喜び望むでせうよ。」

彼はなほ言葉をつづけようとした。が、そこへフリードリヒが大きな聲を擧げながら飛び込んで來た。

「いや、我ながら何といふ大手柄だらう。」彼は叫んだ。「さあ貴方がたは何うして私に酬いてくれる氣です。長春樹(ミルテ)や、月桂樹や、常春藤(きづた)や、樫の葉の、貴方がたの目に觸れる最も新しいもので一つ編んで頂くんですな。それ位にして頂くだけの功勞があるんですよ。ナターリエは貴方のものです。この寶を堀り出したのは、私といふこの魔法使ひですよ。」

「これや丸で氣違ひです、」ギルヘルムは云つた、「私はもう參りますよ。」

「お前は傳言を云ひつかつて來たのか、」男爵ロタリオはギルヘルムをしつかり引き留めながら、弟に向つて言つた。

「いいえ、私一個の獨斷です。」フリードリヒはそれに答へた。「それともお望みなら、神様の御惠みに依つてと云つても可う御座んすよ。私は戀人の手を求めた時もさうでした。今戀の使者となつてもさうなんですよ。實は扉口で立ち聽きをしたんですが、姉さんはすつかり心の中を牧師に打ち明けてゐましたよ。」

「まあ、破廉恥な奴ぢや、」ロタリオは云つた。「誰がお前に立ち聽きをしろといつた。」

「誰が姉さんに扉を閉め切つて置けと吩咐けたのです。」フリードリヒはそれに應へて云つた。「私は委細をすつかり聽いてしまひましたよ。ナターリエ姉さんは非常に興奮してゐました。いつぞやの晩、あの子どもが重態に陷つたやうに見えて、半分姉さんの膝に凭れてゐた時、貴方は途方に暮れながら姉の前に座つて、あの可愛らしい重荷を二人で分擔してゐられた時、姉さんは、萬一この兒が死んだら、貴方に自分の戀を打ち明けて、誓ひの手を捧げようとまで、內心に誓つたと云ふんですよ、處で、今その兒が助かつたからと云つて、どうしてその心持ちが變へられませう。一旦さうと誓つた上は、どんな場合にもそれを守る外ありません。今にあの坊主が遣つて

來るでせうがね。非常に珍しい事件でも報告する積りで得意になるでせうよ。」

牧師がその室へ這入つて來た。「もう此方ではみんな知つてますよ、」フリードリヒは彼に向かつて叫んだ。「どうぞ簡單に願ひます。貴方はただ形式上お出で下すつたに過ぎないんですからね。牧師の務めといふのは精精その邊の所ですなあ。」

「此奴は立ち聽きをしたと云ふのです、」男爵はそばから云つた。

「何といふ無作法なことでせう、」牧師は叫んだ。

「さあ早くして下さい、」フリードリヒは言葉を返した。「儀式はどう云ふことにするんですか。そんなことは數へてみれば分かることです。次にお二人は旅へ出なければならない。侯爵の招待は好い工合に貴方がたのお役に立ちますよ。一旦アルプスを越して御覽なさい。萬事はその場所に落ちついてゐますよ。ですから、何か變つた事をおやりになれば、それこそ世間は大騷ぎですよ。つまり貴方がたは、金のかからない娯樂を皆に提供する譯なんですね。恰度野外假面劇を催して下さるやうなもので、どんな階級の者でもお相伴に與かることが出來るんですよ。」

「いや、貴方こそさう云ふお祭騷ぎでは、これ迄も隨分皆さんのために骨を折つて下さいましたよ、」牧師はそれに應へて云つた。「處で今日は私ももう口が出せさうもありませんね。」

「私の云つたことが間違つてゐましたら、」フリードリヒは答へた、「どうか御遠慮なく正して下さい。さあ、此方へ入らつしやい、入らつしやい。お二人が揃つた所を拜見して娛しまうぢやありませんか。」

ロタリオは彼の友を抱擁して、妹の許へ連れて行つた。恰度ナターリエはテレーゼと一緒に向うからやつて來た。一同は沈默してしまつた。

「さあ、愚圖愚圖しないで下さい、」フリードリヒは叫んだ。「二日間もあれば、お二人の旅の用意は出來ますよ。ねえ、ギルヘルムさん、何う思ひます。」彼はギルヘルムの方へ振り向きながら言葉をつづけた。「二人が始めて知り合ひになつて、私が貴方にあの綺麗な花束をお强請りした時には、まさか今頃貴方が私の手からこんな花を受取るやうにならうとは、夢にも思ひませんでしたねえ。」

「いや、私の生涯の最も幸福なこの場合に、あんな時分の記憶を呼び起さないで下さい。」

「そんな事を何で恥ぢる必要がありませう。自分の家柄を恥ぢる必要がないと同じことですよ。あの時分は眞個好う御座んしたね。ただ私は貴方の顏を見てゐると、どうしても笑はずにはゐられませんよ。昔猶太のキシの子サウルは父の驢馬を搜しに行つて、王國を見附けたと云ふことで

すが、どうも私には貴方がそのサウルのやうに思はれてならないのです。」

「私は王國の値打ちは分かりませんが、」ギルヘルムはそれに應へて云つた、「併し自分が身に餘る幸福を贏ち得たことだけは、分かつてゐます。そして、その幸福はこの世の何物にも換へ難いものに思つてゐます。」

ライネケ・フックス

三浦吉兵衛譯

第一歌

愛すべき祭の五旬祭[一]が來た。野や森は草萠え花咲き、山や丘の上、藪と垣根に新たに目覺めた種種の鳥がたのしき歌をうたひ、香はしい谷の牧場に花はほころび、空はおごそかに晴れやかに輝き、地は樣樣の色にはえた。

此時國王ノーベルは百官臣僚の御前會議を催されたので、國內の大小名は召に應じて裝ひはでやかにいそぎ參り、數知れぬ立派な人人、鶴のリュートケ、かけすのマルカルト其他有らゆるすぐれた面面は四方の國國から馳せ參じた。それは國王がすべての貴族を召し集めて、嚴肅華麗な會議を開かれたからで、彼は大小すべての臣屬をばみな悉く召喚せしめた。不參は出來ることでないが、それでも一人の不參者があつた。それはあの惡者のライネケ狐で、犯した多くの罪に依つて、彼は御所から離れてゐた。やましい心は明るみを憚り、狐は集りの人人を怖れた。彼はすべてを凌辱したので、有らゆる人人に訴へがあつた。ただ狸のグリムバルト、これはライネケの甥にあたるのだが、此者一人が狐の害を受けなかつた。

其時狼のイーゼグリムが先づ訴訟を提出した。彼はすべての親族、保護者、友人などに伴はれて國王の御前に進みながら、訴訟の言葉を申述べた、「いとも仁慈なる國王陛下、私の訴へを聞こしめし給へ。陛下は高貴偉大で名譽に充ち、諸人に正義と恩寵とを御示しになります。願はくば私が大なる屈辱を以てライネケから受けた其損害を御心にかけさせ給へ。とりわけ陛下の御憐憫を願ひますることは、彼が厚かましくも數度私の妻を弄び、私の子女を傷けたことでございます。彼は汚物、あの猛烈なる汚穢を以て彼等を汚し、家に居ります三人の兒等は今尚はげしい盲目のために苦んで居ります。勿論彼の罪惡はとうから法廷に提起せられ、此等の事件を審判すべき日取も既に決定せられて居りまするが、彼は一旦宣誓の申出をしながら、間もなく思案を變更して、早くも居城に逃げ込んで居ります。此事につきましてはここに御列席の方方にも充分に御存じのことでございます。陛下、この惡者が私にしむけた壓迫については、たとひ數週にわたり、いそぎの言葉で申し述べましても、到底述べつくすことではございませぬ。織られるかぎりのゲント(一二)の麻布がよしや羊皮の紙に變りませうとも、彼の有らゆる犯行を書きつくすわけには參りませぬ。それで私はここで言葉を終りまする。ただ私の無念に存じますることは、妻に對する彼の非行でございます、私はたとひ如何樣の犧牲を拂ひませうとも、かならず復讐をいたします。」

さてイーゼグリムが悲しい氣持でかく述べ終ると、ヴッケルロースと呼ばれた一匹の小犬が國王の御前に走りいでて、佛蘭西語を使ひながら、彼の貧しい生活のことや、冬の藪蔭にあるたつたひとつの喰物である一片の腸詰をすらも、ライネケのために奪取られた一條を述べると、其時猫のヒンツェが腹立たしげに躍り出してかく話した、「高貴なる陛下、此處に集つて居られる諸人の中、陛下にまさつて此惡者の害毒に苦むものはございませぬ。申すも憚り多いことではございますが、此處に列席の方方はみな、若きも老いたるも、陛下に對し奉るよりはかへつて此惡人を怖れて居ります。しかしヴッケルロースの訴訟は大事なこととは思はれませぬ、それは此事件以來既に數年が經過し、加ふるに其腸詰というても元來私に屬するものでございますれば、其當時私の方から訴訟を提出すべき筈でございました。私は或夜獵の途中に、とある粉屋に忍び、主婦の眠つてゐるすきを窺ひ、敢えて自白を致しますが、こつそり腸詰を盜み取りました。若しヴッケルロースがそれに對して何かの權利を持つとすれば、私の骨折のおかげでございました。」

すると其次ぎに豹が始めた、「愁訴や言葉が何になりませう、それは殆んど何の役にも立たない

のです、畢竟彼の惡行は誰知らぬものもない有名なことで、彼はまさしく泥棒であり人殺しであります。私は此場に於いて大膽に言明することも出來るのですが、御列席の方方も御承知の如く彼は有らゆる人人に對して罪惡を働いて居ります。實際御列席の有らゆる貴き御方方、いな我が高貴なる陛下に置かせられても、いつかは財產と名譽とを喪失せられる時が參りませう、しかも其際脂ぎつた鷄肉の一片でも手に入るなら、彼は嘲笑を洩らすでござりませう。彼が昨日兎のランペに對して行つた惡行をば御耳に入れたいと存じます。その兎といふのは只今此處に居りまするが、これまで何人をも傷けたことのない男でございます。するとライネケは信心を裝つて彼に近づき、種種の讃美歌を簡短に敎へ、其他法敎師に必要な事項をも授けると申しました。そこで二人は互に向ひあつてクレド[三]を唱へはじめました。しかしライネケはいつもの計略をやめることが出來なかつたのでございます。彼は陛下の國內平和、安全保證[四]の御布令をも顧みずに、其爪をもつてランペを掴み、狡猾にも此正直な男を引張りました。其時私が其路を通りかかりますと、ふと耳にした歌の聲がすぐさま止んでしまひました。聞耳を立てながら私は不思議に思ひながら其場所に近づきますと、そこに居るのは狐でございました。彼はランペの襟頸を取つて居たので、私が偶然の仕合せから其道を通らなかつたとすれば、彼はたしかに一命を失つたでございませう。

今ランペが其處に來て居ります。どうぞ彼の傷をば御覽を願ひます、彼は如何なる人もそれを辱めやうとしないやうな全く溫和な男でございます。今や國內平和、安全保證の御布令までが盜賊の手で反古にせられて居りますのに、陛下をはじめ御列席の方方がそれをば默視せられますならば、陛下及び其御子樣達は此後正義を愛する人人から非難の言葉を聞かれるでございませう。」

するとイーゼグリムが言つた、「今後も矢つ張り今のままで、殘念ながらライネケはいい事はただの一つもしないであらうと存じます。ああ若し彼が長い以前に死んで居たなら、我我平和な者共に取つては最大の仕合せでございましたらう。しかし今度も彼が放免になれば、今我我の言葉を信ぜられない人人をば近近猛烈に襲ふでございませう。」

ライネケの甥に當る狸は其時口を開いて、僞者として誰知らぬもののないライネケを大膽に辯護した。彼は言つた、「イーゼグリム君昔の諺にも敵の言葉は役立つことが少いとあるが全く其通りです。勿論私の伯父はあなたの言葉をあてにはして居ない。しかしそれは何でもないことなのだ。若し彼があなたと一緒に御所にあつて、陛下の恩寵を身に受けて居たら、あなたはその意地

惡い言葉や、古い話のむしかへしを後悔するに違ひない。あなたは自身がライネケに加へた惡行をば看過してゐます、しかし此處に御列席の方方の中にはあなた方二人が同盟を結び、御互仲好く暮らさうと約束したことを知つてゐられる。そのことを私は物語ることにいたしませう。或冬のこと伯父はあなたのためにひどい危險に出會ひました。といふのは或一人の車屋が魚類を積んで國道筋を通つたことがあります。それを嗅ぎだして來たあなたは、何が何でも其商品を味つて見たいと思ひながらも、氣の毒なことには金を持たない。そこであなたは辯舌の力で伯父をだましたので、彼は一策を案じて恰度死人のやうに道にねてゐました。全くそれは大膽至極な冒險でありました。しかし伯父はどういふ魚を貰つたでせう。車屋は伯父が路上にねてゐるのを見ると、彼に一擊を喰はすつもりで、急いで腰のものを拔きました。賢い伯父は恰度死人のやうに身動きもせず其處にねて居ります。車屋は彼を車に載せて毛皮が取れると喜んでゐました。伯父はイーゼグリムのためにこんなことまでやつたのです。車屋は何も知らずに道を急ぐと、ライネケは車の上から魚を投げます。イーゼグリムは遠方からこつそりと蹤いて來て、其魚をば喰ひつくしました。ライネケは其上車の上に乘つてゐようとは思ひませんでした。そこで身を起して車から飛び下り、自分も獲物を喰はうといたしましたが、イーゼグリムは魚を殘らず平げてしまひ、しか

も必要以上に詰め込んだので、腹も裂けんず有様でございました。彼は殘つてゐる魚の脊骨を友人にすすめるのでした。話は此外にもひとつあります。これも僞りのない眞實のことです。或百姓の家に其日屠つたばかりの肥つた豚がかかつて居りました。それを感づいたライネケは親切にも其事を狼に話して、二人は獲物と危險を共にする覺悟で連れ立つて出かけましたが、骨折と危險とを負擔したのは單に伯父一人でありました。彼は窓から忍びこんで、共同の獲物を狼に投げたかと思ふと、不幸なことには其家の飼犬が狐を嗅ぎつけて來て、伯父の毛皮をしたたかに搔きむしりました。手を負ひながら其處を遁れ、急ぎイーゼグリムを搜しあてて、自分の分前を要求すると、彼の言草は斯うでありました。わしは汝のために上等な所を取つて置いた。一つ其處へ行つて喰つて見ろ、脂肪の多い其一片がどんなにうまい味がするだらう。しかも彼のもつて來たのは肉屋の豚肉を懸ける曲木でありました、上等な炙肉はあの貪慾で不都合な狼のために喰ひ盡されたのでございます。ライネケは怒のために物もいへなかつたのですが、彼が何事を心に思つたかは御考へに任せて置きます。陛下、狼が私の伯父に仕向けた斯樣な事件は百やそこらはございませう、しかし私はそのことに就いては沈默を守ることに致します。若しライネケが召喚に應じて出頭しましたなら、よりよき辯護を致すでございませう。ただ一つ仁慈なる陛下、高貴なる

君王、私はあなたに申上ぐべきことがございます。陛下及び此處に列座の御方方は、イーゼグリムの言葉が愚かにも彼が死力を盡して辯護すべき筈の自分の妻と彼女の名譽を傷けたに過ぎないことを御聞きになりました。數へると彼是七年か或は其以上にもなりませうか、伯父は愛と誠の大部分をあの美しいギーレムントに棒げたことがありました。これは夜の舞踏會での話で、私はありのままを申しますが、其時イーゼグリムは不在でございました。彼女はやさしく慇懃に伯父の言葉に從ふこともありましたが、事實はただそれだけで、彼女は其事のために一度も訴へたことなどはなく、いつも幸福に暮らしてゐたのでございます。然るに狼はあのやうな大騒ぎを致します。若し彼が悧巧な男でありましたら、それをば默視したでございませう、それは恥の上塗にすぎないのですから。」狸は尙も言葉をつづけた、「それから兎の作事です、これは根も葉もない詰らない話にすぎません。弟子が教へたことをよく覺えず其成績も惡い時には先生がそれを懲らすのは當然にすぎます。子供を罰してはいけないでせうか。若し輕率が其儘につづき、若し不行儀がなほらずにゐたなら、どうして兒童が伸びませうか。次ぎにヴッケルロースは此冬垣根のかげで腸詰をなくなしたことを訴へて居りますが、それは自分ひとりの胸に隱して置くべきことではないでせうか。聞けばその品といふのも盜品だといふ話ですが、下世話にも惡錢身につかずと申

します、たとひ私の伯父が泥棒のものを奪取つても誰が惡口を申しませう。高い家柄の御方方はかへつて泥棒を憎み、彼等を威嚇なさるでございませう。たとひ伯父が犬を絞殺しても罪に行はれることはないのですが、それでも彼を許したのは生殺與奪は陛下御一人の大權に屬するからでございます。伯父はこのやうに正道を踏み惡行をつつしみながら、決して少しの感謝をも期待するやうのことはございません。平和の御布令が出て此方伯父のやうに神妙な態度をしてゐるものは一人もございますまい。彼は自分の生活を改め、一日ただ一回の食事を取り、修道僧のやうな生活を營み、苦行に身を委ね、素肌に荒い毛衣を纏ひ、もう長いこと野獸や家畜の肉をば全然口に致しません。これは親しく彼を尋ねた人から昨日聞いたばかりの直話でございます。彼は今迄の居城マレバルトゥスを出て、住居のために一宇の僧院を建てて居りますが、悔悟の一念から行つて居る猛烈な苦行や、飢渴のために、彼がどんなに痩せ、どんなに青ざめて居るかは皆樣にも實見せられる機會がございませう。此處で有らゆる人人が彼を誹謗することは、彼に取つては少しも關係のないことです。一度此處に出て來るなら、彼は自己の權利を主張し敵をば破るでございませう。」

グリムバルトの言葉が終ると、そこに人人を驚かす一大事件が出來した。それは雄鷄のヘンニングが一族を引連れて現はれたことで、悲哀に包まれた輿の上には胴體ばかりの牝鷄が横たはつてゐた。それはクラッツェフースで、卵を生む牝鷄中の最良な者であつた。ああ、そこには彼女の血が流れてゐた、してそれを流したのは誰あらうライネケであつた。人人は今國王にそのことを申上げるために來たのである。すぐれたヘンニングは此上もなく悲しい樣子をしながら國王の御前に現はれた。彼と一緒に來て同じく悲嘆に沈む二羽の雄鷄、一方はクライアントといひ、和蘭、佛蘭西かけてこれよりすぐれた鷄はゐない。他の一羽はカンタルトと呼ばれて、前者に劣らぬ雄雄しい勇敢な若者であつた。二人は燃える燈火を捧げてゐた、彼等は殺された牝鷄の兄弟で、殺害者に對して切なる嘆聲をもらしてゐる。輿を擔つてゐたのは更に年若い鷄で、遠くの方まで嘆聲が聞える。ヘンニングは言つた、「私共は補ひ難い一大損害を御耳に入れます、仁慈無比なる國王陛下よ。どうぞ私及び兒等の災難を憫ませ給へ。ここにライネケの仕業を御覽に入れます。冬がすぎて、綠の草木、種種の草花が人人の目を喜ばせますと、私は打群れて一同元氣よくたのしい日を送つて居る一族を眺めてよろこんで居りました。十人の若い息子、それに十四人の娘、彼等は歡喜に充ちた生活を營んで居りました。すぐれた牝鷄の私の妻が彼等すべてを一夏の間に養育

したので、彼等はいづれも强健に且つ滿足し、日毎の糧は安全な場所で取つて居りました。其屋敷は裕福な坊樣のもので、あたりの塀は我我を保護し、此家に屬する六匹のすぐれた大犬は私共の子供達を愛し且つ其生命を監視してくれました。しかし私共がかやうに幸福な日を送り、狐の計略を避けて居たのは、あの泥棒のライネケに取つて忌忌しいことでございましたらう。彼はいつも夜中塀の外に忍び、門の側で窺つて居りました。しかし犬達はそれに氣がつきました、して或時勇敢にも逃げ走る狐を捕へ彼の毛皮をむしりましたが、それでも狐は其場を遁れて其當座暫くは私共を安心させました。しかし私の言葉を御聞き下さいませ。それから間も無く彼は一人の修道僧として姿を現はし、陛下の御布令と御璽とを私に見せました。其御布令には陛下の御璽が押捺してあり、且つ獸類及び鳥類に對して固き平和の御言葉が記されてございました。彼は其時自分の修道僧になつたことや、自ら犯した罪障消滅のために嚴格な宣誓を行つたこと、今は何人も彼を怖れる必要はない、自分は神聖な誓ひに依つて肉類を絶つたことなどを語り、身に着けてゐる僧服や袈裟などを見せてくれました。それから彼は長老から授かつた證書を示し、尙も私を信じさすために、僧服の下に着てゐた毛衣を見せ別れて歸らうと立ち上りながら、主なる神に我等の魂はあれ、今日は未だ澤山の御勤めが殘つてゐる、これから九つ、八つ半、それに暮六つ〔五〕の御

祈を上げなければならない、彼は斯う言つて歩行の際にも御祈の文句を唱へて居りましたが、實は心の中で種種の惡事を工夫し、私共の破滅を考へてゐるのでございました。私は晴れやかな氣持で直樣陛下の御布令の愉快な知らせを子供達に物語りますと、彼等一同もそれを喜んで聞いて居りました。今ライネケが修道僧になつたのなら、私共にはもはや何等の心配も恐怖もございません。私は子供達を引具して塀の外に立ち出で一同自由な世界を樂んで居りました。しかし悲い哉それが私共に惡い結果を生じました。狡猾にも藪蔭に身をひそめて居た狐が、其時矢庭に躍りだして私共の歸路に立塞がり、息子の中の一番すぐれた奴を捕へるなり、其儘引きずつて歸りました。一度味を覺えられては、もうどうせうにも仕方がありませんでした、彼は度度襲擊を試みます、して夜となく晝となく、犬や獵師の手を借りても、私共の保護は出來なかつたのでございます。斯くして狐は殆んどすべての子供等を奪ひ、殘るは二十羽の中たつた五羽で、外のは全部彼の掠奪に逢ひました。どうぞ私の烈しい苦痛を御察し下さいませ。昨日彼は私の娘を殺しました、死骸は犬達が取つてくれて今此場所に横たはつて居ります。どうぞ御心にかけさせ給へ、これが狐の仕業でございます。」

すると國王は言つた、「グリンバルト、近うすすめ、してこれを見よ、修道僧の斷食とはこれか、彼は此樣な贖罪をするのか。わしがもう一年でも存らへて居れば、彼はまさしく後悔をしよう。しかし言葉はなにになるのだ。聞け氣の毒なヘンニングよ、世間の死者になされる一切のことは汝の娘にもさしてやらう。わしは彼女のためにギギリエ[六]を讀ませ、埋葬の儀式も丁重にしてやる、それから列座の人人と一緒に殺害者の罪をば考へて見よう。」

そこで王は諸人に命じてギギリエを唱へしめた。ドミノ・ブラッエボ[七]と會衆は始めて、滯りなく歌ひ終つた。私は尙も御經の文句やレスポンソーレウム[八]を歌つた人人のことを話しても好いが、長くなるからやめにしたい。死骸は墓に埋められて、上には硝子のやうに磨かれ、四角に削られた大きく厚い大理石が立つて、表面には文字も鮮やかに斯く記された。

クラッツェフース、牡鷄ヘンニングの娘で、牝鷄の中の最もすぐれた者であり、一日四個の卵を生み、巧みに足搔くことも出來た。ああ、彼女はライネケの殺害に依り、其一族から奪ひ去られて、此奥津城に眠つてゐる。世の人人は狐の奸惡と虛僞とを知り、故人のために泣いて欲しい。

それから國王は最も賢明な人人を集めて、今彼及び列座の人人の前に現はれた一點の疑もなき罪惡懲罰の方法を議せられた。人人は種種相談の結果、先づ狡猾な罪人に使を送り、次回の會議の日には必らず御所に出頭の命令を傳へさせるといふ進言をした。して其使者には熊のブラウンが選ばれることになつた。國王は熊のブラウンに向ひ、「私は汝が骨を折つて使命を全うすることを望む。しかし用心が肝心であるぞ。奸智に長けたるライネケは有らゆる計略を用ひ、力の限り汝に媚び、汝を欺き、汝を裏切るであらう。」と言はれると熊は自信ありげに斯く答へた、「いやいや、御心安く思召されよ、彼若し暴慢の振舞を敢てし、聊かなりとも私を侮るやうのことがあれば、神も照覽あれ、彼をばしたたかな目に逢はしめ必らず引連れて歸りまする。若しそのことの叶はぬ曉には如何なる神罰も厭ふことではございませぬ。」

第二歌

かくしてブラウンは誇らしい氣持で、砂一面の長い廣い大沙漠を横ぎり、山への路に志した。彼は沙漠を通りすぎて、いつもライネケの獵する山の近所に來た、狐は其前日を同じく此場所で遊んだのである。熊は尙も歩を進めてマレパルトゥスに向つた、其處にライネケは美しい建物を

持つて居た。彼に屬する數多い城の中で、殊にすぐれてゐるのが此マレパルトゥスである。彼は何か惡いことのありさうな時には、いつも此城に隱れてゐる。ブラウンが城に到着した時、いつもの門は固く鎖されてゐた。彼は其前に進んで、暫く考へた後、聲高に音のひながら斯く叫んだ。

「伯父さんおうちか、熊のブラウンが陛下の裁判上の御使者として參向致しました。あなたが御所に參つて、法廷の前に立てといふ陛下の仰せで、あなたが自他の權利を明かにするやうに、私は御迎へに參りました。若しもあなたが君命を奉じない其時には、刑罰の道具で威嚇されます。すれば自然一命にも拘る一大事ですから、一緒に御出でなさるのが上分別かと考へられます、さもないと禍があなたの一身に及ぶでせう。」

ライネケは熊の言葉を終りまで聞きながら、身を横たへて靜かに樣子を伺つて居た。あの馬鹿者の生意氣な言葉に何か仕返へしがしたいものだ。一つ此事を考へて見よう。彼は斯く思案しながら、巧妙に造られた城の片隅にある、住居の奥にはいつて行つた。此居城には種種の細長い廊下のついた澤山の穴があつて、多くの戸口は時と必要とに應じて、開閉の出來る仕掛になつて居た。若し彼が其いたづらな行ひに依つて、何人かの追究を受けると氣がついた時には、彼は此場

所を最良の隱家とするのだ。時としては憐れな動物がそれと知らずに、自ら此迷宮にはいることもあるが、勿論それは此泥棒の願つても無い獲物になる。ライネケは熊の聲を聞いた時、いつもの用心深い心から、使者の外に尙他の人人が隱れてゐるのではないかと懸念した。しかし熊がただひとりで來てゐることが明かになると、彼は狡猾に戸口を出て斯くいつた、「伯父さん、ようこそ御出で下さいました。御免下さい。私は今暮六つの御祈を上げて居たのでございます、そのため御待たせ申しました。あなたが御出で下さるといふのは、私のために有り難いことで、それが御所に參つた際にも何かと好都合だと考へられます。伯父さん、あなたに御目にかかるのは、いつに限らず喜ばしいことではありますが、しかしここまであなたを煩はした其人が憎らしくなります、それは遠い難儀な路ですから。おやおや、伯父さん、あなたの熱くなつておゐでになりますこと、毛は汗で濡れ、息つきさへも苦しさうに御見えになります。王様の御所に他には人の居ないやうに、御寵愛の深い、最も高貴なあなたを選んで使者にするとは何事でせう。「しかし私のためにはそれが疑もなく好都合です、王様の御所ではみんなが私を讒誣して居ります、どうぞ私を御援助下さい。私は今少し加減がわるいのですが、明日なら直ぐに御所に行けます。それに違背はないのですが、今日の處は旅行はとても出來ないのです。實は食物を少し取りすぎ、それが

落付かないで、御腹がひどく痛むのです。」「しかしあなたは何をたべたのです、伯父さん、」と熊が言ふと、狐はそれに答へて、「それは御話しをしてもあなたなんぞにまるで關係のないことです。私はやつと露命を繋いで居るのですが、それでもしかし辛抱は出來ます、貧乏人は決して伯爵ではありませんからね。それで私や家族のために何も好いものが手に入らなければ、つまりはいつでも見つかる蜂蜜を喰べなければなりません。だけどもそれは仕方がないから喰べるだけで、私の御腹はそのためぶくぶくになつて居ります。いやいやながら喰べたものが、うまくこなれるといふわけはないでせう。尤もそれが喰べずにすむ位なら、勿論顎から離すのですが。」

「なにをいふのです、伯父さん。あなたは誰でも欲しがる蜂蜜をば、そんなに輕蔑なさるのですか、それはたしかにすべての食料を凌駕します、少くとも私に取つてはね。どうか私のためにそれを取寄せて下さい。あなたは決して其事を後悔はなさらないでせう。私はその代りあなたに返禮を致します。」といふ熊の言葉に、「あなたは皮肉をいふのでね、」と狐がいふと、熊は誓つて、「いやいや、それは全くです、まじめな話です。」すると狐は答へた、「さういふわけなら差上げることに致しませう。此山の麓にリュステフィールといふ人がゐて、蜜は其邸内にあるのですが、あなた

もあなたの一族も是迄そんなに澤山の蜂蜜を見たことがないでせう。」それを聞くと熊は此好物のためにひどく食慾をそそられた。「伯父さん、早く私を其處に連れて行つて下さい、私はきつと其事を忘れないでせう。蜜を取寄せて下さい、たとひそれが私を滿腹させるだけでなくとも構ひません。」すると狐は、「そんなら參りませう。蜜に事缺くやうなことは決してありますまい。今日は足がわるいのですが、長い間あなたに對して抱いて居る私の愛情は苦しい歩行を愉快なものにしてくれます。私は有らゆる親戚の中でとりわけあなたを尊敬して居ります、さあお出でなさい、しかし御所ではあなたの御援助に依つて、敵の暴力や愁訴に恥をかかしてやることが出來るでせう。今日は一つあなたに我慢の出來るだけ、いやといふ程蜂蜜を御馳走することに致しませう。」——しかし此惡者の御馳走といふのは怒つた百姓共の打擊であつたのだ。

ライネケは熊の前を進み、熊は盲目的に後からついて行つた。「若し私の考へが成功するなら、今日は汝を市場へ送つてあげよう。そこではにがい蜂蜜の御馳走があるんだ、」こんなことを狐は考へてゐた。そのうち二人はリュステフィールの邸に着くと、熊は大きに喜んだが、それは世間の馬鹿者共が時時希望を以て自己を欺く糠喜びにすぎなかつた。

かれこれするうち夕方になつた。此時刻にはいつもリュステフィールが自分の室で寢床に横たはつてゐるのをライネケは知つてゐた。リュステフィールはすぐれた大工の棟梁である。其家の前には一本の樫の材木があつた。大工は此木を割る積りで、二本の大きなくさびを中に差込み、木の上部は殆ど一尺ばかりも開いてゐた。ライネケはそれを見つけて、「伯父さん、此材木の中にはあなたの想像に餘る程澤山の蜜があります。一つあなたの口を出來るだけ深く其中に差込んで御覽なさい。しかし餘り澤山喰べてはいけませんよ、中毒すると大變ですから。」すると熊は、「あなたは私を大食ひだと思ひますか、決してさうではありません、中庸はいつでもよいことです、すべてのことに就いてですね。」斯くいひながら欺かれるとは露知らずに、熊は割目の中まで耳を差込み、同時に前脚を中に入れると、ライネケは材木に近くすすみながら、力をきわめてくさびを拔取つてしまつた。今や熊は頸と脚とを挿まれながら、身動きも出來ず、非難も甘言も役に立たず、流石に強く大膽な彼も、一寸遁れる方法がなかつた。斯くして甥は計略に依つて伯父を捕へた。熊は大聲で吼えたけり、後脚を以て怖しく足掻いた。此騷ぎにリュステフィールは何事ならんと思ひながら、誰かが自分に害を加へやうとでもする時のやうに斧を携へて外に出かけた。

ブラウンは其間に非常な心配に襲はれてゐた。割目は強く彼をはさむ、彼は苦痛の餘りに引いたり引張つたり、有らゆる苦みを以てしても、何のたしにもならなかつた。彼はもはや此場を遁れることが出來ないと觀念した、意地のわるいライネケもさう思つた。彼は遠方からリュステフィールの來るのを見て斯く叫んだ、「ブラウンどうだ、もういい加減にして蜜を殘して置いておくれ。味はどんなだ。今にリュステフィールが來て、汝をもてなしてくれるだらう。食事がすむと飲物も持つて來るが、それも汝の口に合ふよ。」さういひながら狐は居城のマレバルトゥスに歸つた。リュステフィールは其處に近づくと熊が居るので、まだ居酒屋で一緒に飲食してゐる百姓共を呼んで來るために駈出して行つた。「來い來い、うちの前庭に熊が一匹捕つてゐる、決して嘘ではないんだ、」と彼が叫ぶと、みんなは飛出して後からついて來る。彼等は手當次第に急いで武器を取つた。一人は熊手を手に取り、次ぎのは土掻き、第三と第四は槍と唐棹、第五は杙をもつて來る。其他牧師や寺番までそれぞれ獲物を携へて來る。僧侶の料理女（彼女は其名をユッテと呼び、麥粥が出來、料理にかけては肩を並べるものが居ない）も後れを取らじと、晝間使つた紡針を手にして、不幸な熊の毛皮を打つためにやつて來た。ブラウンは絶體絶命の中にあつて、だんだん增加する物音を聞きながら、割目の中から力を極めて頭をもぎ離すと、顏面の毛と皮とが耳

の所まで木に附着し、血は耳の上からしたたり、斯ういふ憐れな動物は是迄何人も見たことがあるまいと思はれるやうな有樣であつた。しかも頭を拔き出しただけでは結極何にもならなかつた、といふのは其前脚がまだ木の間に挿まつて居たからである。そこで彼は急いで前脚を拔き出し、夢中になつて荒れ狂ふと、後には足の爪や毛皮が割目の中に殘つて居た。氣の毒ながら此苦みはライネケが彼に約束したあまい蜂蜜の味ではなかつた。熊の旅行は失敗に終つて、今や難儀な行程が彼の前に横たはつてゐた。鬚も足も血にまみれて彼は立つことも、歩むことさへ出來なかつた。リュステフィールは急いで彼を打ちに行つた、すると棟梁と一緒に來た者共も皆諸共に攻擊する、彼等の望みは此動物を殺すといふことにあつた。長老は手に長い棒をもつて遠方から彼を叩く、熊は苦み悶えながらあちらこちらに逃げ惑ふと、後追ひかけて群集がついて來る、或者は槍、或者は斧を手にし、鍛冶屋は槌や火鋏をもち、或者はしやべる、また或者は鍬と、思ひ思ひの獲物を手にし、大聲あげて打ちかかるので、熊は苦しい心配の餘りに自分の穢物で滑りころぶ。すべては彼に詰めよせて來る、一人も後れを取らうとはしない。中にも脚の曲つたシュロッペと、大きな鼻のルードルフとは最も猛烈な人人であつた。またゲロルトは木の唐棹をば曲つた指の間に動かしてゐる、して其側には彼の義兄で、でぶさんのキッケライが立つて居り、

二人は最もひどく熊を打つた。しかしクワックやユッテも傍觀せずに加勢に來る。ロルデ・クワックの妻タルケもまた憐れな動物に桶を投げつける。して上にいはれた人人に限らず、男も女も皆悉く其處に現はれ、熊の命を取らうとした。キックライは誰よりもひどく呼び叫んでゐた。彼は自分を高貴な生れと信じてゐる、それは人も知る通り、後の門側に住むギリゲトルート夫人といふのが彼の母だからで、其父親は明瞭でないが百姓達の信ずる所に依ると、二番苅手の色の黑いザンデルといふのが多分それであるらしい、此男はひとりでゐた頃は立派な若者であつた。それから石が猛烈に飛んで來て各方面から絶望的なブラウンを壓迫する。其處へリュステフィールの弟が長い太い棍棒をもつて、目がくらみ耳もしひるばかりに熊の頭に一擊を喰はす。熊は此したたかな一擊を受けると、躍りあがつて女達の中に猛然と飛びこんだので、彼等は互によろめき、倒れ、悲鳴を擧げ、其數人が水中に落込む、して其水は深いのであつた。そこで長老は、「ほら御覽、料理番のユッテさんが毛皮を着たなり水にはまつた、紡針は此處に置いてある。皆の衆あれを助けてやれ、私は褒美としてビールを二樽とそれに赦罪と祝福とを與へてやる。」人人は長老の叫聲を聞き、死んだと思つた熊をば其處に置いて、女達を救ひに水際に近づき、五人を陸の上に上げる。人人が水邊で騒いで居る間に、熊は大きな不幸の餘り水に飛込み、怖しい苦痛のためにう

めいてゐた、彼は此打擊の屈辱を忍ぶよりは、むしろ溺れて死なうと思つたのだ。彼は是迄泳ぎをやつたことがなかつた、それで今直ぐ溺れて死ぬるものと考へて居たが、しかし彼は豫期に反して泳ぐことの出來るのを感じ、仕合せにも水の力で下流の方に流されて行つた。すると百姓達は此有樣を見て、「是は吾吾に取つて後世までの物笑ひだ、」と叫びながら、腹立たしげに女達を非難し、「あなた方は家に殘つてゐた方がいいのに。御覽なさい、熊は泳いで逃げて行きます、」などといつた。それから彼等は材木を見ると、そこには頭や足の毛や皮がまだ附着してゐたので、彼等は笑ひながら、「汝はきつとまた來るにちがひない、吾吾は耳をかたに取つてあるから、」などと叫んだ。彼等は熊の損害を嘲笑したが、それでも熊は災難の中から遁れ得たのを嬉しいと思つた。彼は自分をなぐつた百姓を呪ひ、耳や脚の苦痛に泣き、彼を欺いたライネケを呪つた。彼は此樣な祈を繰返しながら泳ぎ下ると、流れの早い大河は暫くの間に一哩も彼を流した。熊は其岸から陸に匍ひ上つて、苦しい息をほつと吐いた。これよりもつとむごたらしい動物をば太陽といへども見なかつたであらう、彼は明日の日が見られるものとは思はなかつた。今にも死にさうな氣持で、彼は「僞者のライネケ、いたづら者め、」と叫びながら、自分を打据ゑた百姓共や材木や、呪はしいライネケの策略などを考へた。

狐のライネケは深謀遠慮で、蜜を與へるために彼の伯父をば市場にみちびいた後、在所を知つた鷄小舍に忍んで、其中の一羽をせしめながら、獲物を擔つて敏捷に河岸を走り下つた。それから直樣鷄を平げ、他の仕事を求めて尙も河岸に急ぎ下り、河水を飲みながら斯く考へた。「あの馬鹿者の熊めをしてやつたのは實に愉快だ。リュステフィールが彼に斧を嘗めさしてやつたことは疑があるまい。あいつはいつも此私に敵對した、それで今こそ復讐が出來たわけだ。私はあの熊をばいつも伯父、伯父というては居たが、今頃は材木の側に死んで居ることであらう、それが私の生涯の喜びだ。もうあいつは私を訴へたり、害つたりは出來ないだらう。」——彼は尙も歩みを續けて河岸を見やると、其處には熊がうごめいて居た。ブラウンがまだ生きて居るのを忌忌しいと彼は思つた。彼は叫んだ、「汝リュステフィールよ、怠惰な惡漢、野卑な男、汝はこんなおいしい御馳走を何とも思はないのか、これは脂肪に富み、味ひがよく、世間の正直な人人は皆誰でも欲しいと思ふものだ、しかもそれは極めてらくに汝の手に落ちたではないか。しかし汝の御馳走に對して正直なブラウンは何か片身を殘したであらう。」彼は悲しさうな、疲勞しきつたブラウンが血にまみれて横たはるのを見て斯く考へた。それから彼は熊に對し、「伯父さん、また御目にか

かりますね。あなたが若しリュステフィールの所に何か忘物でもなさつたなら、あなたのねらつしやる所をいうてやります。しかしあなたはあの男の所で澤山の蜜を盜んでお出でになつたでせう、それとも正直に代をお拂ひになりましたか。しかしあなたはまあどうしたのです。御顏になにか塗りましたね、ほんとに見つともないぢやありませんか。蜜はおいしくはありませんでしたか。その値段ならどうで他でも手に入るでせう。しかし伯父さん、あなたはまあ知らないうちに何處の宗團に加入したのです、あなたは赤い帽子を頭にかぶつて居るぢやありませんか。あなたは住職になつたのですか、あなたの頭を剃つたり、耳をねぶつたりしたのは多分床屋のわざなのでせう。あなたは見た所頭の毛をなくしましたね、それに頰の毛皮も手袋も見えない、あなたはそれを何處にかけて來たのです。」熊はかうしたあてこすりを次ぎ次ぎに聞かされても、苦痛のためにただ一言も口がきけず、どうすることも出來なかつた。しかし其上何事も聞かないやうに、彼は再び水中に潜ひ込み、急流に押流されながら、暫く後に平坦な河岸に上陸した。其處で病みわづらひ、不幸に沈んで横たはりながら、聲高に泣いて獨言をいつた、「誰か私を打殺してくれ、私は歩行が出來ない、しかし王樣の御所に歸らなければならない。しかもライネケの奸計にたばかられて、今このやうなむごい目に逢ひ、歸ることさへ出來ずにゐる。私は此上生きて居たら、

必らず悔を殘すであらう。」しかし彼は身を起して、四日の間怖しい苦痛を以て足を引摺りながら、兎も角も御所に到着した。

國王は熊の慘狀を見ると斯く叫んだ、「神樣、汝は何といふ姿になつた、どうしてさういふ目に逢つたのだ。」熊は答へた、「今目のあたり御覽になる此不愉快な狀態はまことに憐憫を値します。しかし私をかやうなひどい目に逢はせたのはあの惡者のライネケの所業でございます。」すると國王は忿怒に堪へかねかく叫んだ、「私は此犯罪に報復するがために、何等の容赦をも敢えてしない。ブラウンの如きかやうな貴い身分の者に對し、彼ライネケは屈辱を與へたのか。私は私の名譽と王冠にかけて誓言する。ライネケはブラウンが要求するすべての條件に應じなければならない。若し此一言に違背あらば、私は誓つて劍を棄てる。」

國王は會議を召集し、熟議を重ねて罪の決定をするやうに命じた。議員は王の旨に依つて審議した結果、ライネケを再び法廷に召喚し、要求や訴訟に對して自己の權利を主張せしめることとし、其使者としては悧巧で且つ敏捷な牡猫のヒンツェを推薦した。

國王は諸人の決議を嘉納せられて、ヒンツェに向つて斯くいはれた。「ヒンツェよ、國王の旨をばよく承れ。彼若し此度も召喚に應ぜざる曉には、彼及び其一族は永遠の損害に陷るであらう。彼若し賢明ならば、時を移さず出頭せよ。汝よく我が言葉をば彼に告げよ、余人をたとひ輕蔑なすとも、汝の言葉に從ふであらう。」

しかしヒンツェは答へた、「事の成否は別としても、私が彼地に到着の際に、如何やうの取計を致しませう。それは兎も角、私は斯の如き倭小のものでございますれば他の御方を御派遣になります方が適當かと存ぜられます。熊のブラウンはあのやうに力も強くありますのに、彼を捕へずに歸つて居ります、それに私がどうしてそれを成就致しませう。どうぞ御容赦下さいませ。」

國王はこれに答へて、「汝の辯舌は無用である。世の倭小な人人には往往にして巨大なもののえ知らぬ深謀遠慮に富むものがある。汝は巨人に生れてはゐない、しかし悧巧で博學な男である。」そこで牡猫は國王の言葉に從ひ、斯く答へた。「御心の儘に致しませう。若し道すがら右の方に一

個の吉兆を見ることが出來れば、旅行は成功するでござりませう。」

第三歌

扨牡猫のヒンツェが暫く道を進んだ時、行手に雁の飛ぶのを見た。彼は叫んだ、「貴い鳥よ、どうぞ翼の方向をかえて、私の右を飛んでおくれ。」しかし鳥は牡猫の左方を飛んで、樹の上に下りて鳴いた。ヒンツェは非常にがつかりして、自分の不幸を聞くやうに思つた。しかし彼は世間の人人のなすのを常とするやうに、自ら勇氣を振ひ起した。彼は尙もマレバルトウスの方に進むと、家の前にライネケが坐つて居た。猫は狐に挨拶して斯くいつた、「富み且つ善良な神はあなたに幸福な夕を與へて下さることを祈ります。若しあなたが御所への同行を拒むならば、王樣はあなたの生命を奪ふかも知れない。それから王樣の御言葉に、訴へる者に辯明を與へよ、さもなくばあなたの一族は罪に陷るべしとあります。」するとライネケは、「よくこそ御出でになりました、最愛の甥よ。あなたは私の希望に依り、神の祝福をたのしむでありませう、」といひながらも、其僞りの胸の中ではそのやうな考へは持たなかつた。彼は新しい計畫を工夫し、今度もまた王の使者に屈辱を與へて追ひ返へさうと思つた。彼は尙も牡猫を甥と呼んだ、「甥よ、あなたはどんな

食物がお好きですか。人は腹が一杯だとよく眠れるものです。今晩はひとつ私が主人役で御馳走をしませう、して明日晝の中に御所に出發することにしたい。どうもさうした方がよくはないかと私は考へる。私は賴りにすべき親族がないのだ。あの大食ひの熊は大きな顏をして私の所に來た、私はたとひ何物を貰つても、ああいふ强暴な男と旅行することは出來ない、しかしあなたとなら、いふまでもなく喜んで行きます。吾吾は明朝早く出かけることにしよう、それが最良の策であるやうに思はれます。」

ヒンツェはそれに答へた、「それよりか此儘直ぐに御所へ旅立つ方が好かありませんか、野原には月があり、路も乾いてゐるのですから。」

すると狐は、「しかし私の考へでは、夜路はけんのんに思はれるのだ。人は晝の間こそ丁寧に挨拶もするが、暗い夜には吾吾に妨害を試みるかも知れず、それは餘りいいこととは思はれない。」

しかしヒンツェはそれに答へた、「では甥よ、私は此處に泊るとして、どういふ食物が頂けるで

せう。」するとライネケは、「吾吾は貧しい生活をしてはゐるが、若しあなたが泊ることになれば、一つ新鮮な蜂蜜を取つて來ませう、此上もなく透きとふるやつをね。」

「そんなものは食べたことがありません、」と呟きながら牡猫は答へた、「もし家の中に何物も無いなら、鼠を一匹取つて下さい、是が最上の御馳走です。蜜は他の人のために取つて置いて下さい。」

「あなたは鼠がそんなに好きなのですか、」ライネケは言つた、「正直の所を言うて下さい、その鼠なら私はあなたに御馳走が出來ます。御隣の坊様の庭に一つの物置がありますがね、その中には馬車でも運びきれない程の鼠が居て、それが晝となく夜となく、いたづらをするというて、坊様が嘆いてゐられるのです。」

何の考へもなく牡猫はいつた、「どうぞ私を鼠の所に連れて行つて下さい。私は野獸の肉や其他有らゆるものに優つて鼠が好きです、それは何よりも美味なものですからね。」すると、ライネケは、「そんならあなたはすばらしい御馳走にありつけるでせう。私はあなたを御馳走する方法を知つてゐますから、さあ時を移さず行くことにしませう。」

ヒンツェは狐の言葉を信じて後からついて來た。二人は僧侶の物置に着いた。其物置は粘土の壁で出來てゐたが、ライネケは昨晩其壁にうまく穴をあけ、其穴を潜つて眠つてゐる僧侶から一番いい鷄を奪取つた。すると其家の愛兒のマルティンが、其復讐の積りで、穴の中に縄を以て上手にわなをしかけた。彼はそれで再び泥棒が來た時、鷄のために仇を報ずることが出來ると考へて居た。ライネケは其事を感づいてゐてこんなことを言つた、「愛する甥よ、眞直に其穴の中にはいりなさい。あなたが鼠を摑える間、私は此處で番をします、あなたは暗がりの中でいくらでも手に入れることが出來るでせう。やあずゐぶん元氣に鳴いてゐるね。もし御腹が一杯になつたら、直ぐに歸つて御出でなさい、私はきつと此處にゐます。吾吾は明日朝早く立つて、元氣に話をしながら、愉快に旅行がしたいと思ふから、今夜は互に離れないやうにする方がいい。」

「しかし此處にはいつても大丈夫ですか、坊主は時時よからぬことをたくらむものですからね、」と猫はいつた。

すると悪者の狐は答へた、「それはわからないね。しかしあなたはそんなに臆病かね。では一つ歸へることにしようか。さすれば家内はあなたを歡迎して、おいしい御馳走を作つてくれませう。たとひ其中に鼠はないとしても、吾吾は愉快にそれが喰べられます。」

しかし牡猫のヒンツェは狐の嘲弄的な言葉に耻ぢしめられて、直様穴に飛込んで行くと、用意のわなに懸つてしまつた。斯くしてライネケの御客様は悪い饗應に預ることになつた。

ヒンツェは自分の首に繩を感じたので、心配のために身をちぢめ、恐怖のために突進し、猛烈に躍上つたので、繩は身體に卷きついてしまつた。猫は悲鳴をあげて、穴の外に窺つて居るライネケを呼ぶと、狐はほくそゑみつつ穴の口から斯く叫んだ、「ヒンツェ鼠の味はどうだ。鼠は多分よく肥つてゐるだらう。汝が肉を食つてゐるといふことがマルティンにわかると、彼はきつと汝にからしをもつて來てくれるよ、あれは氣のきいた少年だからな。御所では食事の時にそんな歌を歌ふのかい、何だかいやな音ぢやないか。私が汝をわなにかけたやうに、あのイーゼグリムも

此穴に入れてやるといいんだがな。彼奴は私に仕向けた有らゆる悪事の報を受けなければならない。」さういひながら狐はそこを立ち去つた。

しかし狐は單に窃盗だけをやるのではなかつた、姦通、強盗、殺人、背信、斯様な種種の罪悪も彼に取つては罪悪でなかつた。今も今とて彼は心に何ものかをたくらんでゐた。彼は美しいギーレムントを二つの目的から訪問しようと思つた、一つにはイーゼグリムの訴訟の内容を知り、また一つには此悪者は昔の罪悪を繰返さうとするのであつた。イーゼグリムは今御所にゐる、彼は其不在を利用しようと思つた、それは奸悪な狐に對する女狼の愛が狼の怒を惹き起したことを誰も疑はなかつたからである。彼は夫人の室にはいつたが、彼女は恰度留守であつた。「御機嫌よう、繼兒達よ、」とただそれだけのせりふを残して、やさしく子供達にうなづきながら、彼は自分の仕事にいそいだ。

ギーレムント夫人は翌朝夜が明けると家に歸つて、「誰か尋ねて來はしなかつたか、」と言ふと、「たつた今ライネケ伯父さんが尋ねて來られて、私達が此處に居るのを見ると、繼兒達といはれま

した、」と子供達は答へた。

これを聞いたギーレムントは、「此仕返しはきつとするぞ、」と叫んで、此暴惡を復讐するために、直ぐ其足で急ぎ出かけた。彼女は狐のありかを知つてゐた。彼に追ひつくと彼女は、「一體何といふ言草です、何といふ侮辱的な言葉をあなたは臆面もなく子供達の前で話したのです。其返報はきつとしますよ、」と、腹立たしげに言ひながら、憤怒の形相を彼に見せた。彼女は狐の鬚を捕へ、狐は強く狼の齒を感じた。彼は駈出して彼女の手を遁れようとした。彼女は敏捷に其後を追うた。それには次ぎの話がある。——

其近所に一個の崩れた城があつた、兩人は急いで其中にはいつた。すると一方の塔の壁が年代のために割目を見せてゐた。ライネケは其中に滑り込んだが、割目がせまかつたので、身體を縮めてやつと拔けた。大きく強い牝狼もまた急いで其割目に頭をさし込んだ。彼女は突進し、身をすべらし、引いたり破つたりしながら後から續かうとして、だんだん深くはいり込んだので、進退共に不可能に陷つた。ライネケはそれを見ると向側の曲路を通つて元の所に現はれ、彼女に一

場の惡戯をしかけた。しかし狼は決してだまつては居なかつた、「何といふ惡戯をするのだ、泥棒め、」と罵ると、狐はそれに答へた。「たとひ前代未聞のことであつても、此處ではそれがなし得られる。」

今ライネケが行つたやうに、自分の妻の代りに他人のそれを利用するのは、決して名譽なことではない。しかし惡者に取つてはすべてのことが平氣である。牝狼が割目から拔けだした頃には、ライネケは其處を出て自分の道を急いで行つた。かくして女は自分の權利を主張し、名譽を保持せんとしながら、二重の損失に陷るのである。

しかし牡猫のヒンツェはどうしたであらうか。あはれな者は自分の捕はれたのに氣がついたので、牡猫の仕方に依つていたましく泣いた。するとマルティンがそれを聞いてべつとから飛起きる。「有りがたい、私は好い時にわなをかけた、泥棒が捕まつたのだ。あいつは充分に鷄の代を拂はなければならない。」斯く歡呼の聲を擧げながら、マルティンが急いでらんぷに火を點じ（家族は眠つてゐた）、それから父母や雇人を呼び起して、「狐が捕まつた、一つひどい目に逢はしてやら

う、」と叫ぶと、人人は大人も子供も其處に集り、牧師も起きて上衣を身につけた。其時料理番の女が二本立の燭臺を以て先登に進み、マルティンは急いで一本の棍棒を掴み、矢庭に猫に打つてかかると、其棍棒が猫の頸部に命中して、其一眼が飛出すといふ怖しい光景が現はれる。すべてが彼に打つてかかる、牧師も熊手を以て急ぎ追ひつき、泥棒を打倒さうとする、ヒンツェは生きた思ひがしなかつた。そこで彼は猛然として飛び上り、僧侶の兩脛の中に躍り込んで、怖しく嚙みつき、搔きまわし、怒つて此人を苦めながら、潰された一眼のために猛烈な復讐を試みた。悲鳴をあげて飛び上りながら、牧師は失神して地に倒れた。それを見た料理番は、惡魔が彼女にからかわんがために、斯ういふ惡戯を始めたのだなどと罵る、して若し主人が此不幸から免れるなら、彼女の詰らぬ財產は投げ出してもいい、有りさへすれば黃金でも決して惜いとは考へない、棄てても悔むことはなからうなどと幾度も、幾度も誓言する。彼女は主人の恥辱と其重傷とを斯樣に悲んだ。人人は泣く泣く彼を寢床に伴ひ、猫をば繩附のまま後に殘し、終にはそれを忘れてしまつた。

牡猫のヒンツェはいたいたしくも打ちすゑられ、殆ど死に頻するばかりの重傷を受けながらも、

危急の中にただ一人殘されたのを見ると、生に對する愛着から、彼は繩を掴んで迅速に齧つた。私は若しかすると此大なる災厄から免れることが出來るだらうかと彼は考へた。して仕合せにも繩はきれた。彼は自己の幸運を喜びながら、種種の惱みを受けた其場所から急ぎ遁れ出やうとした。彼はすばやく穴を飛び出し、國道を急いで、翌朝國王の御所に着いた。彼は腹立たしげに自分を非難した。「これは惡魔があの惡黨のライネケの手をかりて、自分を壓迫したものであらう、しかし今眼は潰され、痛痛しい澤山の傷を負ひ、屈辱を以て歸つて來ては、どの顏さげて人人に逢はふか。」

しかし國王の怒は强く燃えた、彼は此謀反人に對して絕對の死刑を威嚇した。そこで國王は顧問官を召集すると、貴族や賢人があまた王の御前に集つた。彼は是迄樣樣の罪惡を重ねた罪人に對して如何なる罪科を適用すべきかと下問された。今や種種の困難がライネケの上に重なるのを見て、狸のグリムバルトはこのやうに述べた、「今此法廷の中にはライネケの不幸を希ふ方方も澤山に御出でになりませう、しかし何人も自由な個人の權利を蹂躙しようとはなさりますまい。今彼に對しては第三回の召喚狀が發せられなければなりません。若し此召喚にも應じなかつた其時

には、彼の罪狀は明かであります。」そこで國王は答へた、「しかし私は懸念するが、此處に列席の人人の中には、あの狡猾な者に對して、第三回の召喚狀を送達する者はあるまい。誰が眼を一つ餘計にもつ人があらうか、此惡漢の爲めに生命をかけようとする程大膽なものがあるであらうか。彼の健康を冒險しながら、それでもライネケを捕へることが出來ないとすれば、誰もそのやうなことはしまいと私は考へる。」

そこで狸は聲高に答へた、「陛下よ、若し此使命を私に仰付け下さるなら、たとひどのやうなことがございませうとも、私はきつと此御役目を果しませう。あなたは私を公の御使者になされませうか、それとも私が自分の意志からのやうに取計ひませうか、私は御命令を待つて居ります。」すると國王は彼に命じた、「そんなら汝が出かけて行け。すべての訴訟を汝は殘らず耳にしてゐる。しかし必らず用心して事に當れ、あれは危險な奴であるから。」グリムバルトは答へた、「兎も角も一つやつて見ることに致しませう、しかし私は大方彼を同伴することが出來ると考へて居ります。」

かくして狸は狐の居城マレバルトウスに向つた。ライネケは妻子と一緒に城内に居た。そこで狸は言つた、「ライネケ伯父さん、御機嫌よろしう。あなたは博學賢明な御方であるのに、なぜあのやうに王樣の御召を輕蔑、否愚弄なされます、私達には誰にも其理由がわからないのです。しかしもう御出でになるべき好い潮時ではございませぬか、訴訟や惡い噂が有らゆる方面から次第に多く現はれて居ります。私と一緒に御所に參りませう、此上の躊躇は決してあなたの御爲めにはなりますまい。澤山の苦狀が王樣の御前に提出せられ、それに今回は第三回の召喚狀が發せられて居ります。若し今回も出頭せられることがなかつたなら、あなたは判決を受けねばならず、さすれば王樣は臣下を引具して、此マレバルトウスを圍むでございませう。してあなたは妻子や眷族と一緒に滅亡の破目に陷り、所領は沒收に逢はなければなりません。畢竟王命に抗するといふことは不可能のことと信じますから、私と一緒に御所に行かれるのが最上の分別と考へます。臨機應變の策略には事缺かぬ伯父上、必らず御身を全うすることが御出來になりませう。是迄あなたは、勿論法廷に於いても、今回にまさる幾多の危險に遭遇しながら、いつも運好く其處を遁れ、敵に屈辱を與へてゐられます。」

グリムバルトの言葉が終ると、それに對してライネケが言つた、「伯父よ、あなたは私の權利を擁護するために、御所への出頭を勸告してくれるが、王様が私に恩惠を與へるのを、私は今から豫期して居る。私がどんなに有用な臣下であるか、それをば王様は知つて居られる。同じ理由で、どんなに私が他の人人から憎まれてゐるか、それも王様は御存じの筈だ。私が居ないと會議は決して進行をしない。たとひ私が此上十倍の罪を犯したと假定しても、若し王様に謁見して、物言ふことが許されるなら、その怒をば解いて見せる。それは王様の左右に多くの人人が居つて、其御下問に應ずるとしても、決して王様の御氣には召さない。彼等が一所に集つても、思案や分別は浮ばないので、いつに限らず會議の際には、たとひ私がどこに居ても決議は私の智慧に待つのだ。それで困難な事件に賢い方法を工夫するため、王様や大官が集つても、私が居ないと何事も出來ない。それで人人は私を憎む。して殘念ながら私は其人人を怖れなければならない、彼等は私を殺さうと計り、其中の最も惡い者が御所の中に集つて居るので、其事も私に心配でならない、しかも其人數は十人に餘る有力な人人である、私の獨力でどうして多數に抵抗が出來やう、それで私は今迄躊躇して居たのだ。なには兎もあれあなたと一緒に御所に行つて自分の事件を辯護するのは、勿論得策と信じて居る、かくすれば徒らに躊躇することに依つて妻子に心配や危險な思

ひをさせるよりは、私に取つて遙かに名譽なことであらう、さもないと吾吾すべてが滅亡する。王様に敵對することは私には出來ない、たとひ何事でも、王命とあれば服從する、吾吾は多分敵と和解することが出來るだらう。」

それからライネケは妻に言つた、「エルメリンよ、子供達のことは賴みますぞ、とりわけ末の兒のラインハルトをな。此兒の齒は小さな口の周圍に全く上品に生えて居る、あれは今に父親そつくりになるだらう。此處にいたづら者のロッセルも居るが、これも勿論かわいい兒だ。私の留守の間は、どうぞ子供達をかわいがつておくれ。私がもし無事に歸ることが出來たら、汝の心盡しは決して忘れはしない、汝は私のいふことを聞いてくれるね。」

斯くして狐は同行者のグリムバルトと一緒に家を立ちいで、妻のエルメリンと子供等を後に殘して道を急いだ。彼が何の相談もなしに家を出たので、妻は心を痛めてゐた。

二人が小一里ばかり進んだ時、ライネケはグリムバルトに向つて言つた、「我が最愛の伯父、最

も尊敬すべき友人よ、私はあなたに打明けるが、私は心配のために身ぶるひがする、私は全く死の道を行くといふ氣づかわしい、怖しい考へをすてるわけには行かない。是迄犯した様様の罪が今まざまざと目の前にちらつく。ああ、私の感じてゐる不安はあなたの信ずることが出來ない程度のものだ。どうぞ私に懺悔をさして、私のいふことを聞いて下さい。此近所にはあなたを除いて外に坊様はゐないのだから。若し今すべてのことを打明けたなら、王様の前に立つた時、いくらか胸が輕くなるかも知れない。」するとグリムバルトは答へた、「先づ窃盗、追剝、有らゆる惡虐な背信及び其他普通の惡いたくみをもう二度と行はないといふ誓ひを立てなさい、さもなければ懺悔は何にもなりますまい。」「それは私にもわかつてゐます。さあ始めますから愼重な態度で聞いて下さい、」とライネケは言つた。

コンフィテオル、テイビ、パテル、エト、マテル。[九] 私は水獺、牡猫其他多くの仲間に對して、様様の惡い巧みを致しました。私は其事實を自白し、甘んじて其つぐのひを受けます。」「獨逸語でやつて下さい、此私にもわかるやうに、」と狸は言つた。ライネケは言葉を續けた、「私は決して隱しだてをば致しませぬ。私は今生きて居る有りと有らゆる動物に對して罪を犯したのです。私

の伯父である熊をば材木にはさみ、そのため彼は頭部に負傷し、多くの打擊を身に受けました。私はまた牡猫のヒンツェを鼠の群に伴ひ、そのため猫はわなに懸つて、多くの苦惱を受けたばかりか、一眼をさへ潰しました。鷄のヘンニングの訴へも決して嘘ではなく、私は彼から手當次第大小の子供等を奪取り、舌打ち鳴らしてそれを食ひつくしました。王様すらも憚ることなく、私は彼及び女王に對して、永く忘れることの出來ぬやうな、様様のわるさをいたしました。それから其先きを懺悔いたしませう。狼のイーゼグリムに對し、私は全力を盡して屈辱を與へました。すべてを此處で述べつくすことは到底時が許しませぬ。私は彼に對していつも冗談のやうに伯父伯父と呼んで居りますが、其實吾吾は決して親戚ではありませぬ。もう六年も前のことなのですが、私がエルクマールの僧院に居た時、彼は私を尋ねて來て、自分も僧侶になりたいから、何分の助力を願ひたいと申しました。彼は此事を一種の手仕事のやうに考へてゐたらしく、鐘を鳴らしながら、ひどく其音を喜んで居りました。私は彼の前脚を繩に結びつけてやりますと、彼はそれにも滿足して其儘繩を引き喜んで鐘つきの稿古をするやうに見えました。しかし此技術はかへつて彼のために飛んだ不名譽を招くやうになりました、といふのは彼が狂人のやうにひどく鐘を亂打したからで、近所の人人は、なにか大きな災難でも湧いたのぢやないかと、すべての町町か

ら急ぎ駈けつけると、彼等は狼を見つけたのです。自分も僧侶に志してゐるといふ彼の辯明も聞かずに、そこに押寄せた群集は殆んど死ぬる程に、彼を打ちのめして歸りました。それでも馬鹿者は其計畫を棄てず、今度は頭を剃つて僧形になりたいといふので、私は皮が縮まる程頭の毛を燒いてやりました。かういふわけで私は時時ひどい打擲や突擊を彼に加へ、また魚類の捕方を敎へて、ひどい目に遭はせたこともあります。また或時彼は私と一緒にユーリッヒの地方に行つたことがありましたが、其時吾吾は其近所に居る最も裕福な坊樣の屋敷に忍び込みました、其處の物置には立派なハムや、最も軟かな獸脂の長い板があり、其上鹽漬にしたばかりの肉が桶に入れてありました。イーゼグリムは種種骨を折つた揚句、樂に身を忍ばすことの出來る位な穴をば石造の壁にこぢあけました。して彼は私の勸めと自分の慾望とに依つてすぐ其中にはいりましたが、豐富な食物に我を忘れて、一杯御腹に詰め込んでやると、さあ其膨れた腹のために、壁の穴からはひ出ることが出來なくなりました。彼はどんなにか此不實な穴を怨んだでせう、其穴は空腹な狼を入れて置きながら、今や滿腹した彼の歸路を塞いだのです。すると私は村の中に大きな騷ぎを惹起して、人人を刺戟しながら狼の在所を知らせました。つまり私は坊樣の屋敷に忍び、うまく炙けた脂肪の多い鷄が、今しも食卓に運ばれた食事の最中に飛び込み、其鷄をくはへて其儘屋

敷を逃げ出したのです。坊樣は私の後を追ひかけやうとして騷ぎ出す途端に、食物や飲物の載つて居る食卓を引つくりかへす、それに一層腹を立てて、「打て、倒せ、摑へろ、刺殺せ、」と叫びながら、其處に倒れて、そのため怒を冷却することが出來ました（彼は水溜のあるのに氣がつかなかつたのです）。其中人人が集つて來て、なぐれなぐれと叫んだので、私は其場を駈出すと、私をひどい目に逢はしてやらうと、後から人人が追ひかけて來ます。中にも坊樣が一番ひどく騷いで居ました。「何といふ大膽な泥棒だ、彼は私の食卓から鷄を奪ひ去つた、」と彼は叫ぶのでした。私は駈出して納屋の所まで來た時、不本意ながら鷄を地上に落しました、殘念なことだが、もう其上持ちこたえることが出來なかつたのです。しかし私は其儘姿をかくしました。人人は鷄を見つけ出し、坊樣がそれを取上げた刹那に、彼は物置の狼に氣がつきました。群集がそれを見つけた時、坊樣はかく叫びました、「さあ此處に來た、あれを摑へろ、狼といふ他の泥棒が吾吾の手にはいつたのだ。若し此狼も逃げ出したら、それこそ吾吾の耻辱になる、此界隈の物笑ひだ。」どうしようかと狼が考へてゐる途端に、あちらからもこちらからも、身體や痛い傷の上に、打擊が雨と降注いで來る、人人は有らん限りの大聲で叫び、他の百姓も其處に集り、狼を打倒して半死半生の狀態にしました。彼は長い一生の間に是程ひどい苦しみを經驗したことはなく、誰かが此光景

を晝布に書いて殘したなら、狼が脂肪やハムのためにどんな代償を坊様に拂つたかは、全く珍しい見物であつたと思はれます。人人は狼を路の上に投げ出して、石や棒切の上を急いで引きずる、狼にはもう息の根が絶えてゐました。其時彼は汚いものを排泄したので、人人は顏をそむけて村の出鼻に彼を棄てました。彼は泥の深い濠の中に横たはつて居ました、人人は彼を死んだものと考へたのです。時間は私にもはつきりしませんが、彼が自分の慘狀に氣のついた時には、斯ういふ痛ましい氣絶の中に横たはつて居ました。どうして其場を逃げて來たか、それも是迄聞いて居ません。それでも彼は（一年ばかり後と思ひますが）私から離れまいといふ誓ひを立てたりしました。尤もそのことは永續しませんでした。して彼が斯ういふ誓ひを立てるに至つた筋道はたやすく理解の出來ることでした、つまり彼は鷄を腹一杯に喰べて見たいと思つたのです。そこで私は彼奴をひとつひどい目に遭はしてやらうと考へながら、牡鷄が毎晩七匹の牝鷄と一緒に止つて居る梁のことなど、眞しやかに說明して、夜になるとこつそり彼を連れて行きました。其時はもう十二時が過ぎて居ましたが、細い突張棒をかつた窓の扉は、私の想像に違はず開いて居ました。私は一寸はいらうとする素振を見せたが、しかし足を留めて、伯父に先登を讓りました。「構はず中におはいりなさい。若し何物かを手に入れやうと思ふなら活潑にしないといけない。もういい

頃合です、肥つた牝鷄が見つかりますよ、」と私は言ひました。彼は充分に用心をしながら中にはいつて、あちこちと靜かに手さぐりをした後、怒を含んで斯ういふのでした、「あなたは詰らない所に私を連れて來ましたね、此處には牝鷄所か羽一枚も落ちて居ない。」すると私は、「いつも前方に止つてゐるのは私が自分で捕つてしまつたのだ。他のは多分後の方に居るから、腹を立てずに、用心をしながら、前の方に行つて見たまへ、」といひました。吾吾の歩いた梁といふのは全く幅の狹いものでした。私は尙も狼を先登に立て、自分は後すざりをしながら、再び窓を滑り出て、靜かに突張棒を引くと、窓はしまつてぴしやんと音を立てました。その音を聞いた狼は全身に衝動を感ずる程びつくりし、身ぶるひしながら狹い梁の上から、ずとんと床に墜落しました。爐のあたりに眠つて居た家の人人は驚いて目を覺まし、窓から落ちたものは何だと叫びながら、がばと跳ね起きてらんぷに火をつけると、隅の所に狼が居たので、打つやら叩くやら、それは散散な目に逢はせたのです。狼がどうして其場を逃げて來たか、それは不思議に思はれます。

「尙私はギーレムント夫人をこつそりと、時には大びらに尋ねたことをも懺悔します。しかしこのことは勿論祕密にすべき事柄で、私は二度とかうしたことをやらうとは思ひません、しかし夫

人は一生涯決して此恥辱を忘れることが出來ないでせう。

「是で私は自分の記憶してゐることで、私の魂を苦しめる一切のことを懺悔し終りました。どうぞ私に赦免を與へて下さい。私はそれを御願ひ致します。私はどんな懲罰でも、あなたが私に負はせる最も困難なことでも、謙遜な心を以て完成致します。」

グリムバルトは斯ういふ場合の手續をちやんと心得てゐた。彼は路傍の小枝を折取つて斯くいつた、「伯父さん、此小枝を以て三度あなたの背を打ち、それから私の差圖に從つて、それをば地面の上に横たへ、其上を三度飛び越えて、すなほな心で其枝にきすし、服從の誠を現はすのです。私はかういふ贖ひをあなたに負はせ、すべての罪と懲罰からあなたを赦免し、あなたが行つた一切のことをば主の御名に依つて赦して上げます。」

ライネケが喜んで其贖ひを完成すると、グリムバルトは言つた、「わが伯父よ、よき業に依つて御身の改心を示し、讃美歌を唱へ、怠ることなく寺院に詣で、正しき掟に從つて斷食を行ひ、尋

ぬるものには道を教へ、喜んで貧しき者に施し、またよからぬ生活を廢し、一切の掠奪、窃盗、背信、誘惑をなさざる誓を立て給へ、さすれば主の御惠に達すること決して疑ひがございませぬ。」ライネケは「それでは誓つて御言葉の通りにいたしませう、」といつた。

かくして懺悔が終を告げたので、二人は王様の御所に向つた。それから敬虔なグリムバルトとライネケは黑ずんだ肥沃な原野を通ると、道の右手に修道院があつて、其處では尼様達が、朝夕主に對する勤めをなし、庭には雌雄の鷄を澤山に飼養し、中には去勢して肥やした美しい鷄も幾つか交つて居たが、彼等は餌をあさるために、時時塀の外まで出て來るのであつた。ライネケは折折此修道院を訪問した。彼はグリムバルトに向つて、塀の側を通ると道が最も近いと語つたが、心の中には、其處に遊んで居る鷄のことを考へて居た。彼は自分の懺悔僧を向うに導き、二人は鷄の群に近づくと、其時いたづら者の狐は貪慾の目を光らした。彼には鷄群の後を歩いて居た若い肥つた一匹が、他のどれにもまさつて氣に入つてゐて、側目もふらずその方ばかりを眺めて居たが、彼は突然其鷄を目かけて突進する、あたりに鷄の羽毛がぱつと飛散した。

しかしグリムバルトは怒つて、其恥づべき再發を非難した、「伯父さん、どうしてさういふことをなさるんです。あなたはもう懺悔をすまして居るのに、たつた鷄一匹のために、再び罪に落ちやうとするのですか、それは全く立派な悔改めといふものですね。」するとライネケは言つた、「最愛の伯父よ、私はただそのことを考へただけです。どうぞ神様が御慈悲を以て、私の罪を赦して下さるやうに祈つて下さい。私は二度とさういふことを致しませぬ、必らず喜んでそれをやめます。」それから二人は寺院に沿うて國道に向ふと、そこに一つの狹い小橋があつた。其時ライネケはまた鷄の方を振りかへつて見た、彼にはどうしてもそれが思ひきれなかつた。若し誰かが彼の首を切斷したなら、それは鷄の方に飛んで行つたかも知れない、それ程彼の慾望が猛烈であつた。

グリムバルトはそれを見て、「あなたの目は一體どこを見てゐるのです。あなたは全く醜惡な大食家ですね。」ライネケは、「伯父さん、それはいけません。詰らない早合點のために、私の祈禱を妨げないで下さい。私は御祈の文句を唱へるのです。私は是迄あの貴い尼様達から計略を用ひて、澤山の鷄や鵝鳥を奪ひ取りましたから、其人達の冥福を祈らなければなりません。」グリムバルトは何事をも答へなかつた、ライネケは鷄の見える間それから眼を離すことが出來なかつたが、そ

れでも到頭本道にかへつて、王様の御所も近くなつた。ライネケは今王城の方を眺めやると、罪深い自分の身の上を思ひやつて、流石に内心の不安を抑へることが出來なかつた。

第四歌

御所の人人はライネケがまさしくやつて來たといふ報知を受取ると、貴賤上下皆悉く、彼を見るために先を爭つて出かけた。しかし彼に對して好意を寄せる人とては少く、殆んどすべては何等かの訴へを持つてゐるのであつた。ライネケに取つてはさういふことは何の値打も持たなかつた、少くとも彼は無頓着を裝ひながら、狸のグリムバルトと一緒に、大膽に且つ勿體振つて國道をこちらに進んで來た。彼は恰度國王の實の息子ででもあるやうに、また有らゆる犯罪に無關係なやうに、勇敢に且つ落付拂つて近く寄つた。彼は國王ノーベルの前に進み、宮殿に並居る高貴な人人の中に立つた。彼は沈着を裝ふ術を解して居た。

「高貴なる國王、仁慈なる陛下」と彼は口を切つた、「あなたは高貴偉大で、名譽と威嚴の第一人者でゐらせられます。それで私は今私の訴へに對して御耳を貸し給はんことを願ひ奉ります。申

すも如何なことではございまするが、私は陛下の御家中に於いて、最も忠義な臣下と存じて居ります。まさしく此事のために、御所の中には私を憎む人人も多數にございまする。若し私の敵の僞言が、彼等の希望するやうに、陛下の御信用を得るやうになりましたならば、私は陛下の御好意を失つてゐるでございませう。しかし仕合せなことには、陛下にはたとひ如何なる訴へでも左右なく御信用になるといふことはなく、必らず原被兩造のいひまひを御聞きになります。たとひ私の敵が私の背後に於いて如何やうの僞りを申しませうとも、私は決して騷ぐことなく、陛下は私の忠誠を充分に御諒解あり、私に對する敵の迫害は單に私の忠誠に依ることと信じて居ります。」

「默れ」と國王は答へた、「饒舌や、媚び諂ひが此場に臨んで何にならうぞ。汝の犯罪は明白である、刑罰が汝を待つて居るのだ。汝は私が動物に嚴命した、平和の約束を守つて居るか。其處に鷄が來てゐる。汝は彼から其子供等を一人また一人と奪ひ取つた、汝忌忌しき、僞りの泥棒奴が。汝は私の威嚴を傷け、私の臣下を害ひながら、尙且つ私に對する汝の愛情を示さうとするのか。ヒンツェは氣の毒にも彼の健康を失ひ、ブラウンは傷を負うて、其苦痛から快癒するにはまだまだ澤山の日數がゐる。私は此上何事も言ふまい、此處には多數の訴人が居り、事實の明白な犯罪

も澤山にある、此場を遁れることは汝に取つて困難であらう。」

ライネケは答へた、「仁慈なる陛下よ、それが果して私に對する懲罰の理由になりませうか。ブラウンが血だらけの頭を以て歸りましても、それが私の罪でせうか。彼は大膽にもリュステフィールの蜜を喰ひ盡さうと致しました。たとひ愚鈍な百姓の群が彼を襲擊いたしましても、彼には强大な手足がございまする。また彼が水に陷る前に、彼等は彼を打ち且つ罵り辱めたのでございまするが、彼は頑强な人間として當然其恥辱を豫知すべき筈であると存じます。牡猫のヒンツェに就きましては、私は彼を丁重に迎へ、力の限り厚遇いたしましたにも拘らず、彼は盜心を抑へることが出來ず、私の眞心をこめた警戒にも耳を貸さず、夜中僧侶の屋敷に忍び入り、そのため禍を招きました、然るに私は彼の愚かなる振舞のために、刑罰を受ける理由がございませうか。かやうのことは恐れながら陛下の御威光にも拘はる一大事かと存ぜられます。しかし陛下がこの私を如何やうに御處分なさらうとも、また此事件が極めて明白のことではございまするが、たとひ其結果が利害いづれに決着致しませうとも、私に異存はございませぬ、私が煮られ、炙かれ、眼をくり拔かれ、首をしめられ、或は斬首に逢ひませうとも、それは決して厭ひませぬ。すべて

は陛下の權内にあります、陛下は私共すべてを殘らず掌の中に握つておいでになります。其强大な陛下に對して、弱小な私はどうして反抗が出來ませうか。陛下がたとひ私の命をお取りになりましても、殆んど御爲めになりますまい。しかし私はどのやうな破目に陷りませうとも、率直に法に服從いたしまする。」

其時牡羊のベリンが、「時刻ですから、訴訟を始めさして下さい、」といふと、先づイーゼグリムが其親戚と一緒に現はれ、牡猫のヒンツェ、熊のブラウン、其他の動物が群をなして姿を現はし、中には驢馬のボルデギン、兎のランベ、小犬のヴッケルロース、ブルドッグのソン、山羊のメトケ、牡小羊のヘルメン、それから栗鼠、いたち、黄鼬などもゐた、尙牡牛や馬も後に殘つては居らず、其他牡鹿、牝鹿などの野獸や、海狸のボッケルト、貂、家兎、野猪など、すべてが御互にこみ合つて出て來る、また鴻鳥のバルトルト、かけすのマルカルト、鶴のリュートケなども後に續き、鴨のティブケ、雁のアルハイト、其他多くの禽類が各訴訟を以て出頭する、悲しげな鷄のヘンニングは僅かの子供等と一緒に烈しい悲嘆に沈んで居る。尙其處に集つた無數の禽類、多數の獸類は殆んど其名を列擧するに堪へない程であつた。すべて是等の面面はいづれも狐を攻擊し、

其罪惡を數へながら、彼の仕置に逢ふのを心待ちにして居た。そこで彼等は國王の御前に進みいで、せき込んだ言葉で、訴への上に訴へを重ね、古い新しい種種の物語をば陳述する。ただ一日の開廷日に是程澤山の訴訟が國王の前に提起せられたことはなかつた。ライネケは立ち上り、極めて巧妙に應待した。彼が一度口を開くと、辯護の美しい言葉が僞りのない眞實のやうに流れて來る、彼はすべてを否認し、すべてを曲解したので、彼の言葉を聞いてゐる人人は殆んど不思議の思ひをなし、彼が無罪であるのを信ずるやうになつた。其上彼は自己の權利を主張し、多くのことを反對に訴へたりした。しかし其時信用のある正直な人人がライネケに反對し、彼の言葉に對する反證を擧げたので、有らゆる罪狀は明白になつた。今や事件は落着を告げた、といふのは國王の顧問府は滿場一致でライネケの死刑を決議したからである。斯くして人人は狐が繩にかかり、首を絞められ、自分の犯した重い罪をば、恥づべき最期を以て贖ふのを見ることになつた。

今やライネケ自身ももう運命が決したと思つた、彼の巧妙な言葉も殆んど施す術がなかつた。國王は自身で判決の言葉を宣べた。そこで諸人が狐を捕へて繩をかけると、自分のいたましい最期がいたづらな犯罪者の目の前にちらついた。

今や判決と法とに依つてライネケが縛られると、彼の敵は急いで彼を刑場に連れて行かうと騒ぎたち、彼の友人は餘りのことに驚きと烈しい苦悶とに襲はれ、猿のマルティン、狸のグリムバルト、其他ライネケと緣つながりの多數の人人は其判決を聞いて不快の念に充たされ、諸人の考へる以上に悲しみ泣いた。といふのはライネケは第一流に位する貴族の一人であるのに、今や名譽も位階も共に剝ぎ取られて恥づべき死刑の宣告を受けたからであつた。此光景はどんなにかひどく彼の親戚を怒らしたであらう、彼等は相率ゐて國王に暇を願ひいで、一同御所を退出した。

斯くの如く多數の騎士が一時に御所を退出したといふことは、國王に取つて腹立たしいことであつた。今やライネケの死刑に大なる不滿を抱き御前を立去つた親戚の多數も明かになつた。國王は腹心の一人に向つて、「ライネケは勿論奸惡ではあるが、しかし其事に就いては尙考慮の餘地がないでもない。彼の親戚の多數が此宮廷に於いて必要缺くべからざる人人である、」などといはれた。

しかしイーゼグリム、ブラウン、牡猫のヒンツェなどは縄附の罪人を彼是と心配しながら、彼の敵に對して、王樣の命ぜられた屈辱的の刑罰を執行しやうと思つた。そこで彼等は荒荒しく狐を引立て、遠い彼方の絞首臺を見やつた。其時牡猫のヒンツェは憤然として狼に言つた、「イーゼグリム君、あの當時のライネケの振舞と、彼の憎みがあなたの兄さんを絞首臺に上ぼせたことを考へて御覽なさい。あの時ライネケはどんなに愉快さうにあなたの兄さんを引立てたでせう。早く狐に對して復讐をなさい。それからブラウン君、あなたも忘れはしないでせう、彼は厚かましくもあなたを裏切り、リュステフィールの庭で、不實にも怒りやすい野卑な男女の手にあなたを渡し、打擲や痛手に遭はしたばかりか、其上誰知らぬ者もない屈辱にあなたを洒したのです。氣をつけてよく縄をおしめなさい、もし彼が一度此場を遁れたなら、其持前の奸智を用ひて、再び自由の身になるでせう。さすれば愉快な復讐の時期は永遠にわれ等の手から逃去ります。さあ急ぎませう、して彼が有らゆる人人に對して行つた罪惡の復讐をしませう。」

イーゼグリムは言つた、「言葉が何の役に立たうか。さあ早く丈夫な縄をもつて來い、出來るだけ早く彼の苦しみを除いてやりたいものだ。」狐に對して斯くいひながら、彼等は市の中を進んだ。

ライネケは默つて彼等のいふことを聞いて居たが、それでも最後にかくはじめた、「汝達はそんなに怖しく私を憎み、死の復讐を望んではゐるが、目的を達する術を知らない。私にそれが不思議なのだ。丈夫な繩のことなら、ヒンツェはそれを知つてゐやう、彼は鼠を捕らうとして、僧侶の家に忍び、耻辱に逢つて逃げ出した時、繩の實驗を行つてゐる。しかしイーゼグリムとブラウン、汝達は自分の伯父を殺すために、そんなにひどく急いでゐる、汝達はそのことがうまく運ぶと思ふのだな。」

國王は刑の執行に立會ふため、有らゆる廷臣と共に御所を立ちいで、女王も侍女に伴はれて國王の後に從つた。それから多數の人人が、富めるも貧しきも河水のやうに押寄せて行く。すべてはライネケの死を欲し、彼を見やうと願つてゐた。イーゼグリムは親族や友人に向つて、御互に固く密集するやうに、縛られた狐に監視の目を向けるやうにと注意した。彼等はライネケの逃亡を怖れたのである。とりわけ彼は其妻に對してかく言つた、「汝の命にかけて注意を怠るな、惡漢を逃がさないやうに手傳つておくれ。若し彼が逃げるやうのことがあつたら、それはすべての人人の耻辱になる。」それからブラウンに向つて、「彼が汝をどの位なぶりものにしたか、それを忘れて

はいけない、君は今澤山の利息をつけて其借金をかへすことが出來るのだ。ヒンツェは臺によぢ昇つて上部に繩を結んでくれる。彼を捆へて私に手傳つておくれ、私は梯子を動かすから。すると二三分で此惡者の最期が來る。」ブラウンは答へた、「さあ梯子をかけなさい、私は彼を捆へてゐる。」

そこでライネケは言つた、「考へて見ろ、汝達は自分の伯父を殺すためにせわしいのか。むしろ汝達は私を保護し、私が難儀に逢つてゐれば、それを憐んでくれるのが本當ぢやないか。私は陛下の恩赦を願はうと思ふが、それもつまりは無益だらう。イーゼグリムはひどく私を嫌つてゐる、いや彼は其妻に向つて、私を捆へるやうに、私の逃亡を防ぐやうと命じてゐる。若し彼女が以前のことを考へて見たら、私を害ふ氣にはなれまい。しかしどうで運命に逢ふものなら、早く來るのがましのやうだ。尤も父の最期の時には是程大勢の人がついては來なかつた。しかし汝達が此上私を容赦したら、かならずひどい破目になるよ。」熊はいつた、「惡漢の高慢な物言ひを聞きましたか。さあさあ行くことにしよう、彼の最期も近づいてゐる。」

此時ライネケは心配しながら心に思つた、此大難を前に控へて、すばやく何かうまいことを考へたいものだ、さうすれば王様が私の死刑を御許しになつて、此三人の怖しい敵にひと泡吹かすことも出來よう。ひとつ有らゆることを考慮して見よう、して何かの手段を見つけ出さなければならない。何しろ命にかかる大事なので、危難は大抵のことではないのだ、扨てどうしたら拔けられうか。有らゆる罪惡は殘らず私の上に集つてゐる。王様は怒る、友人は皆行つてしまふ、敵の奴等は勢力を振ふ。私はこれまで善いことをやつた例は少く、王様の權力や其顧問達の智慧などは殆んど眼中に置いてゐない。私は多くの罪を犯した、しかし私の不幸を轉廻させる目當がないでもない。どうかもの言ふ機會が來るといいな、さすればきつと絞罪を免れて見せる、私は希望を棄てはしない。」

そこで彼は梯子の上から群集に叫んだ、「私は今自分の目前に死を見てゐる、私は到底生きることが出來まい。しかし私は今此世を去るに臨んで、私のいふことを聞いて下さる大勢の方方に御願ひがしたい。私はあなた方の面前に於いて隱すことなく、最後の懺悔を明らさまに述べ、有らゆる罪惡を正直に告白したい。これは私が內證で行つた種種の事に依つて、他の人人が自分の知らな

い罪のために迷惑されるのを避けたいがためで、私はかくすることに依つて、今はの際に幾多の禍を防ぐことが出來る。さすれば神様は大慈の眼差を向けて私の心がけを思遣つて下さるでせう。」

それを聞くと多くの人人は憐れを催した。彼等は願の筋は大したことでもなく、時間といつても僅かですむことだと互に語り合ひながら、そのことを王様に御願ひすると、直様それが許容せられた。そこでライネケは胸に聊かの安心を感じながら、仕合な結果を豫想して居た。狐は人人が彼に與へた場所に座を占めて、扨て次ぎのやうに語り出した。

「スピリトウスドミニ、[一〇]私を助けさせ給へ。此處に集つた大勢の人人の中で、私が何等かの害を與へてゐない人というては一人もゐません。先づ第一は私がまだ小僧で、やつと乳房に吸付くことを忘れた頃、慾望の動くままに、畜群と一緒に野外に散在してゐた若い小羊や山羊の中に飛込んだことがあります。私は羊の鳴聲を聞くのが大變に好きでした、それを聞くと私はおいしい御馳走に引きつけられるのです、して私はす早くそれを聞きわけることが出來るやうになりました。私は小羊を嚙み殺して其血をねぶると、それが素的な味でありました。それから極小さな小羊を

四匹までも喰ひつくしてからは、其後も尙かうした惡行をつづけ、鳥といはず、鷄といはず、家鴨や鵝鳥に至るまでも、手當次第掴へて來ます。時には殺しは殺しても、それを喰ひつくすことの出來ないことなどもありましたが、さういふ時には、若干の獲物を其儘砂の中に埋めたことさへもありました。

「それから斯うしたことも起りました。冬の或日のこと私はライン河の樹蔭で待伏をして居るイーゼグリムと知合になりました。其時彼は私が彼の一族であると斷言して、其親族の關係をば指を以て數へることすらも出來たのです。私は彼のいふままになつて、二人は玆に同盟を結び、忠實な仲間として徘徊しようといふ誓約を交はしました。しかし殘念なことには私はそのことのために種種の禍を經驗したのです。つまり吾吾は國內隈なくあさり歩いて、イーゼグリムが大物を手に入れると、私は小さなものを捕へる、吾吾の分捕つたものは共同の所有に歸するといふのが、當初の約束であつたにも拘らず、それは決して正當な共同ではなかつたのです、といふ理由は、彼が自分勝手に分配を行つたからで、私は決して獲物の半分を貰つたことがありませんでした。それ所でなく、私は更に一段とわるいことを經驗するやうになつたのです、卽ち彼が小羊を手に

入れるか、牡羊を奪取つて來るか、彼は有り餘る程の獲物を持つて居て、今殺されたばかりの小羊を喰ひつくすか、牡山羊が彼の爪の下でもがいてゐるやうな時には、彼は齒をむき出して私を見遣り、怖ろしい風をしてうなりながら私をば追ひやつてしまふのでした。つまり私の分前は皆彼のために取られて、たとひ其炙肉がどんなに大きくあるにしても、私はいつも斯ういふ詰らない目に遭ふのでした。全くの話なのですが、吾吾が共同で牡牛を掴へるか、牝牛を手に入れるやうのことがあると、彼の妻と七人の子供達が直樣其場所に姿を現はし、獲物の上に飛びかかりながら、私を食卓から追ひやつてしまひ、たとひその骨が奇麗さつぱりとしやぶられたものでも、一本の肋骨すらも貰へなかつたのです、斯うしたすべてのことを私は忍ばなければなりませんでした。それでも私は有りがたいことには飢餓を感ずることがありませんでした、といふのは私は金や銀や私が密かに安全な場所に埋めて置いた立派な財寶で生活を續けたからです。斯うした財を私は充分に持つてゐます、してどんな馬車でも決してそれを運び去ることが出來ません、たとひその馬車が七回の往復をやるにしても。」

財寶と聞くや、王は身體を前に出して、「それがいつから汝のものになつたのだ、言うておくれ。

私の尋ねてゐるのは勿論財寶のことなのだ。」するとライネケは、「私は陛下に對して此祕密を包みかくさうとは致しません。それが私に何の役に立ちませう、今殺される身體の私は此等貴重な品物のただの一つも持つて行くわけには參りません。いづれは明白になることでございますし、陛下の御言葉に從ひ、一切のことを殘らず御話し致しませう。愛と惱みにかけて私はもはや此大なる祕密を隱さうとはいたしませぬ、其財寶と申しますのは私の盜み取つたものでございますから。あなたの御身を害はんがために、陛下よ、多數の人人が徒黨を結びました、若し其時あの財寶が巧みに盜み取られなかつたならば、事件はきつと勃發したでございませう。陛下よ、此點に御氣をとめさせられよ、あなたの御命と安全とは懸つて此財寶にあつたのです。其財寶の紛失が私の父を大なる困難に陷れ、まだ若い身空で悲しい旅に赴かしめることになりました。父は恐らく永遠の苦艱を嘗めて居りませう。しかし陛下よ、それはあなたの幸福となつたのでございます。」

女王は國王に對する謀殺、反逆、財寶、其他狐の物語つた不愉快な話をば驚きの目をみはつて聞いた。そこで彼女はいつた、「ライネケよ、考へて御覽、長い彼世への路が今汝の目前に現はれてゐる。悔悟に依つて魂の重荷を下ろしなさい、包むことなく明白に、謀殺のことを話して下さい。」國王もそれに言葉を添へた、「諸人はすべて沈默せよ。ライネケよ、梯子を下りてわが側に來れ。事件は私に關係があるから、私はそれが聞きたいのだ。」

それを聞いたライネケは安心しながら梯子を下りたが、彼に敵意を持つて居た人人には非常に殘念な思ひがした。彼は此事件の顚末を熱心に尋ねる國王と女王の御前に進んだ。

そこで彼は再び非常な嘘の準備をした。私が國王夫妻の恩寵を取返すことが出來、同時に私の計略が成功して、私を死地に陷れた敵の面面を自滅させることが出來れば、私は有らゆる危險の中から免れるのだ。思ひ設けぬ利益が私に下ることは確かだが、それには嘘が必要である、しかもそれが非常に必要なのであると彼は心に思つた。

女王はいらいらしながら尙もライネケに尋ねた、「此事件がどうなつてゐるか、それをば明瞭に物語つておくれ。汝は眞實を語り、良心のことを思ひ、魂の重荷を下ろすがよからう。」そこでライネケは言つた、「然らば御話しいたすでございませう。今私は死なければなりません、してそ

れを免れる方法というては持たないのでございます。私が今最後の刹那に臨み、魂に重荷を與へ、永遠の罰を招くやうなことがあれば、それこそ愚かな行でございませう。此際自白に勝る更に上策はあるまいと存じます。たとひその爲め親族や友人を訴へるやうなことになりましても、私はそれをどうしませう、地獄の責苦が私を威嚇して居ります。」

國王の心はただ此話だけでも重くなつた。「汝は本當のことを言つてゐるのか、」と王様はいつた。そこでライネケは殊勝な態度を裝ひながら斯く答へた、「勿論私は罪人でございます、しかし私は僞を申し上げることはございませぬ。今僞が私に取つて何の役に立ちませう、それはただ永遠に私を呪ふだけです。あなたも御存じのやうに、私の死刑は既に決定して居ります。私は死をまともに見ながら、僞を申し上げるやうのことは致しませぬ。今の私に取つては善惡いづれも何のたしにもならないのです。」ライネケは身ぶるひしながら斯く語つて、絶望するもののやうに見えた。

女王は言つた、「彼の苦悶が氣の毒です、どうぞ慈悲の御目を以て見てやつて下さい。彼の自白

に依つて私共の災難が除かれるのです。さあ一時も早く事件の眞相を聞くことに致しませう。すべての者に沈默を命じて、彼をして腹藏なく話さして下さい。」

その言葉を聞いて群集は皆沈默した。ライネケは始めた、「若し御思召がございますれば、私のいふことを御聞き下さい。私の物語がたとひ書類を備へてゐないにしても、それは眞實であり、精密であります。さあこれから謀反の御話をいたします、私は決して何人をも假借はいたしませぬ。」

第五歌

さて狐の奸計や、自己の罪惡を包み他人を害ふために、彼がどのやうに振舞つたかをお聞きなさい。彼は底も知らぬ虚言を案出し、墓の向うの父を辱め、いつも彼のために働いてくれた最も忠實の友なる狸をば大なる讒誣を以て訴へて居る。彼は自分の物語に信用を與へ、彼の訴人に復讐するためには有らゆることを敢えてしたのだ。

狐は言葉をつづけた、「私の父は幸福な人で、或日忍び歩きの途上で、あの有名なエムリッヒ大王の財寶[一一]を見つけました。しかし其發見は彼のためにはそれ程役に立たなかつたのです、といふのは父は大なる財産のために心驕り、其後彼の同族を顧みず、其同輩を蔑視し、己れ以上の友人を求めるやうになつたからです。彼は牡猫のヒンツェをアルデンネンの深山に派遣し、熊のブラウンに忠誠の意を表せしめ、フランデルに來て王位に卽くやうにとすすめました。

「既に前から斯うした考へを持つて居たブラウンは件の書面を讀んで心から喜び、大膽にも遠路フランデルに急行しました。父は喜んで熊を迎へ、直樣イーゼグリムと賢者のグリムバルトに使を立て、四人は心を合せて事件の相談を致しました。それから牡猫のヒンツェも謀に參加し、徒黨はすべてで五人になりました。その地方にイフテと呼ばれる小さな村があります、彼等が密議の場所に選んだのは、此イフテとゲントの中間で、長いさびしい夜中を選んで會合を續けて居りました。それは決して神樣の御許しになる善いことではなく、惡魔や私の父が厭ふべき金の力に依つて彼等を丸めてしまつたのです。彼等は國王に對する弑逆を決議し、變らぬ堅き同盟を結び、五人は一同心を協せ、イーゼグリムの首にかけて誓ひを立て、熊のブラウンを彼等の國王に推戴

し、アーヘンの玉座で黃金の冠を戴かせ、此帝國をば立派に熊のものにしようと計つたのでした。陛下の友人や一族のもので、彼等に反對を唱へるものがあれば、辯舌の力と金の力で、それ等を味方に引入れるのが父の役目で、それでも其人が聽かない時には、放逐するといふ計畫になつて居りました。此隱謀がどうして私の耳にはいつたかと申しますと、グリムバルトが或朝いい氣嫌に酒に醉うて、大事な沈默を忘れ、愚かにも妻に向つて一切の祕密をしやべり散らし、他言を堅く戒め、もうそれでいいものと思つて居りました。しかし其後彼の妻が私の妻に出逢つた時、三王の名[一二]にかけた莊嚴な誓ひと、名譽と信實にかけて、絕體他言無用の約束をさせてから、一部始終を打明けてしまひました。私の妻は矢つ張り約束を守りませんでした。彼女は私の顏を見るとすぐさま、其耳にした一切のことを物語り、其上私が容易に信ずることの出來るやうな證據をすらも私に與へたのです。しかし私はそのため一層わるい立場に置かれました。私はそれを聞いて鳴聲を天上の神樣の御耳に入れた蛙[一三]のことを思出しました。畢竟彼等は王樣が欲しくなり、有らゆる地方に於いて自由を享樂した後、かへつて束縛の中に生活したいと考へたのです。そこで神樣は彼等の願を許し、始終彼等を迫害し、憎惡し、決して平和にはさせて置かない鴻鳥を送つて彼等の王樣といたしました。鴻鳥は無慈悲に彼等を待遇したので、馬鹿な蛙は今始めて目を覺ま

したのですが、もうその時は取りかへしのつかないことになつて居りました、といふのはもう王様が彼等を壓迫したからです。」

ライネケは聲高に全會衆に向つて話しかけ、すべての動物は彼の言葉に耳をかたむけてゐた。彼は言葉をつづけた、「私はすべての人人のためにそれを怖れてゐました。事件は計畫通り運ぶかも知れない。陛下よ、私はあなたの御身の上を案じて居りました、してそのためにはもつと好い御褒美を豫期してゐたのです。私はブラウンの奸計、彼の狡猾な性質、彼の樣樣の非行をば、前から知つて居りましたので、事件の成行に就いて大なる恐怖を感じて居りました。彼が若し王位に卽くやうなことがあれば、吾吾すべては滅亡しなければなりません。吾等の國王陛下は高貴の御生れで、且つ强大、仁慈の御氣性を御持ちになる、若しあの馬鹿者が王位に卽くやうのことがあれば、それは悲しむべき交換だと心密かに思ひました。二三週の間私はそのことを考慮し、それを妨害してやらうと試みました。

「其時第一に私の念頭に浮んだのは、私の父があの財寶を手に握つて居れば、彼は多くの徒黨を

集め、それで計畫は成功する、吾吾は國王を失ふやうになるといふことで、私は先づ其財寶を內證で奪ひ取るために、其在所を發見することに苦心しました。狡猾な私の父が野良や森林に出かけることがあれば、晝といはず、夜といはず、寒さも暑さも顧みずに、雨でも風でも、跡をつけてその行先をかぎ出さうとしました。

「或時私は地面の中に身を隱して、種種と噂に聞いて居る財寶の發見について樣樣に心を碎いて居りました。其時私は割目の中から忍び出て來る父の姿を認めたのです。彼は石の間から首を出して、地面の中から上つて來ました。私は靜かに身を隱しながら、そこに隱れてゐますと、父は近所に私の居るのに氣がつかずに、隈なくあたりを見まわしながら、どこにも人影を認めなかつたので、そこで仕事を始めました。これからそのことを御話し致しませう。父は砂を以て穴を塞ぎ、他の地面と一樣にならしたので、現場を見なかつた人にはとても其場所を見わけることが出來ませんでした。それから其處を立去る前に、自分の坐つて居た場所を幾度も幾度も尾を以て巧みに撫でつけ、口で痕を消してしまひましたが、これは術策其他種種の仕事に熟練な狡猾な父から其日始めて見覺えたことでした。それから彼は急いで自分の仕事の方に參りました。私は立派

な財寶が此近所にあるのだと考へ、急ぎ其場に近づき、直樣仕事に取りかかりました。私は誓くの後前脚を以て入口の割目を搜し出し、慾望に充されて其中にはいり込みました。其處には眞白い銀や、赤い黃金や、立派な品物が澤山にありました。全くの話ですが、此處におゐでになる最も御年寄の方でもあんなに澤山の品物を見られたことがあるまいと考へます。私は妻と一緒に其處に近づき、晝となく夜となく、二人でそれを運びました。私共は車といふものを持つて居りませんから、其運搬には非常な骨折と困難がありました。それでも妻のエルメリンは忠實にそれを忍んでくれたので、私共はすべての財寶をどうにか適當な場所に移すことが出來ました。父の方はかの人人と心を合せて謀反の謀を廻らして居ります、彼等の相談した驚くべきことに就いては、是から御話を致しませう。

「ブラウンとイーゼグリムとは庸兵募集のため、無封の書面を諸方に送りましたが、中には大勢急ぎ馳せ參ずべきこと、ブラウンの麾下で勤務の指圖を受くべきこと、俸給は充分に前拂をなすべきことなどが記されて居りました。そこで父は各地を遍歷して、其書面を見せて歩きました。彼はまだ隱まはれてゐると信ずる財寶に就いての確信を持つて居りました、しかし其財寶はもう

既に跡方もなくなつてゐたので、彼及び其仲間は、どんなに隈なくそれを搜し求めても、鐚一文でも見つけることが出來ないでありませう。

「如何なる勞苦も厭ふことなく、エルベ、ライン兩河の中間に廣がる國國をば急ぎ駈けまはりながら、彼は多くの庸兵を見出してそれを手なづけました。彼の黃金は强大な力を其言葉に與へるのでした。

「それから父が再び仲間の許に歸つて來た時にはもう夏の季節でありました。彼は勞苦や、艱難や、心配に就いて種種と物語りました、殊にザクセンの高い御城の前では、每日獵師や其馬と犬のために追ひまはされて、すんでの所に其生命まで失ひかけたのですが、幸にしてやつと逃げ出すことが出來ました。

「しかし彼は喜びを以て金や約束に依つて引き入れた味方の連判狀を四人の謀反人に見せると、ブラウンは使者の成功を喜び、五人一緒に其連判帳を讀んだりしました。それでイーゼグリムの

一族千二百が口を開き牙を研いで來り會するといふことや、其他牡猫や熊は全部ブラウンの味方につき、ザクセン及びテュウリンゲン地方の穴熊及び狸も殘らず徒黨に加はるといふことが明かになりました。しかしそれには一月分の俸給を前拂ひするといふ條件が附隨して居て、若し其條件が實行せられたなら、彼等は一令の下に勇しく集合するといふことになつて居りました。私は此計畫を妨碍したことに就いて、いつまでも神樣に感謝しなければなりません。

「萬端の手筈がきまつてから、父は急いで野原に出て、再び財寶を見やうと致しましたが、それこそ父の苦悶の始めでした。彼は掘りました、して搜しました、しかしいくら掘つても掘つても、何ひとつ見つかるものはありません、彼の骨折は無益に終りました。財寶は既に運び去られて、何處にも見つけることが出來なかつたので、其絕望も無益でした。そこで憤怒と羞耻との餘りに——私はこのことを思ふと、日夜怖ろしい思ひに襲はれるのですが——父は縊れて死にました。

「私は此惡行を妨げるために有らゆる努力を敢えてしながら、今や非運の底に沈んで居ります。しかし私はそれを悔ゆるものではありません、あの貪慾なイーゼグリムとブラウンとは君の御側

に近く坐つて、最高の顧問となり、ひとり不幸なライネケは陛下の御爲めに親身の父さへ渡しながら、斯うした運命に陷つて居ります。偏に陛下の御壽命を延ばすために己れを棄てて顧みないものが、果してどこに居りませうか。」

王と女王は財寶を手に入れたいといふ猛烈な慾望を感じながら、內談するためにライネケを側に呼んで、言葉せわしく尋ねられた、「其財寶はどこにあるのだ、私等はそれが知りたいのだ。」それに對してライネケが答へた、「私を判く陛下に對して立派な財寶を提供しても何の利益になるでせうか。陛下はかの虛言を以て私を訴へ、人殺に等しき私の敵をばよりよく信じて居られるのです。」

すると女王は答へた、「いやいや、さうではない。さういふことは決してさせない。我君は汝の一命を御助けになり、過去のことをば問題にされない。我君は己を抑へてもう御立腹はないであらう。ただ是からは思慮分別を以て陛下に忠節を盡し、御役に立つやうにしてほしいのだ。」

ライネケは言うた、「夫人よ、若し陛下が此私に恩赦を與へ、有らゆるこれまでの罪惡や、畏れ多くも陛下に對して抱いて居りました不快の念をば、此際全く忘れて下さることをあなたの目前に於いて御誓ひになれば、私は財の在所を申上げます。陛下が私の忠誠に依つて得られるやうな財寶をば、今の世の如何なる帝王も決してお持ちにはなりますまい。財寶は實際莫大なものでございます、もし其場所を御覽になつたら、陛下は定めし驚かれるでございませう。」

王は答へた、「彼のいふことを信じてはならんぞ。若し彼が窃盗、虚言、掠奪のことを話したなら、それは信じても構はぬであらう。彼にも増さる虚言者というては、これまで決してなかつたのだ。」

すると女王は言つた、「彼の是迄の生活は勿論信用が置けないでございませう、しかし考へて御覽なさいませ、今度といふ今度彼は伯父の狸や、自分の父までも訴へ、其罪惡を數へて居ります。彼は是等の人人を避けて、若し自分に其意志があれば、他人に就いて同一のことを話すことが出來たでせう、彼はそんなに愚かな虚言を構へることはありますまい。」

王は答へた、「汝がさういふ考へであり、且つもつと大きな禍がそれから起つて來ないと信ずるなら、私はライネケの犯罪や、傷を負うて居る事件をば、自分に引受けることにしよう。しかし今度の一度が畢竟最後だ、彼はその事を忘れてはならない。私は王冠にかけて彼に申し渡すのだが、若し將來罪を犯し、虚言を敢えてすることがあれば、彼は永劫までも悔をもつであらう、して彼の一族は十等親に至るまで悉く罪を免れず、誰彼の別なく不幸と耻辱と重き裁判に陷らなければならない。」

ライネケは王の心が速かに變つたのを見て安堵しながらいつた、「仁慈なる陛下よ、私は數日の中に其眞僞の證明も出來ないことを申上げるやうなうつけ者ではございません。」

王は此言葉を信じ、父の謀反を始めとして、ライネケ自身の犯罪に至るまで、一切のことを赦免せられた。狐の喜びは竝竝でなかつた、彼は幸運な時期に敵の力と彼の運命から脱れたのである。

「高貴なる陛下、仁慈なる君主、」彼は言つた、「あなたが賤しい私に向つてなされた一切のことを
ば、神があなた及び女王に向つて報いて下さることを祈ります。私は決してそれを忘却は致しま
せぬ、して永遠に高い感謝の念を以て振舞ふでございませう。凡そ天が下の如何なる地方、如何
なる國國に於いても、あなた方御兩人を除いては、此立派な財寶を獻上すべき御方はございませ
ぬ。あなた方は私に對して洪大な御恩寵をお授けになりました。その代りには國王エムリッヒの
財寶をば其儘喜んで御渡しいたしまする。財寶の在所はただ今直ぐに申上げます、決して嘘僞は
申しませぬ。御聞き下さいませ、フランデルの東方に當つて一個の荒野がございまする、して其
中のヒュステルローと呼ばれる一個の藪、どうぞ此名をようく御心に留められまするよう。それ
からクレーケルボルンと稱する泉がございますが、藪と泉とは兩者互に相接近して居ります。
其處には年中人影を認めず、梟やみみづくの住家となつて居りまするが、私は此地を選んで、か
の財寶を埋めました。場所はクレーケルボルンと申しますれば、それを御記憶の上に、また目標
の利用を御願ひいたします。しかし其場所へは御兩人御自身で御越を願ひまする、たとひ何人を
使者に立てられても、決して安全とは申されません。萬一の場合の損害が大きうございますれば、

御兩人にて御越のことを是非に御勸め申上げます。クレーケルボルンの側を御通りになりまする
と、其向うに二本の若い白樺がございます、して其中の一本は泉の近所に立つて居ります。陛下
よ、其際樺の樹に向つて眞直に御進みになりますると、財寶は直ぐ其下に埋つて居ります。ただ
其場所を掘つて見られよ。先づ根元には苔がありまして其下に何ともいへぬ精巧美麗な黃金
の裝身具があり、中にはエメリッヒ王の王冠もございます。若し熊の計畫が成功した曉には、彼
は此王冠を戴くことになつて居たのでございます。其冠は澤山の裝飾を以て飾られ、寶玉を鏤め
た黃金の美術品でございます。このやうに立派なものは此後二度と製作せられる機會は決してご
ざいますまい、と申しますのは斯の如き高價な品をば誰も買はうとはせぬからでございまする。
仁慈なる陛下、若しあなたが目のあたり此品物を御覽になりました時には、きつと私の功績が御
心に浮び、正直な狐のライネケよ、汝賢くも苔の下に此等の財寶を埋めたるものよ、たとひ汝が
どこに居つても、汝の上に幸福があれよ、と斯く御考へになりませう、」と僞者のライネケは言つ
た。

それに向つて王は答へた、「汝は私の供をしなければならない、其場處を私ひとりで見つけ出す

のは困難であらう。私は實際アーヘンやリューベックやケルンやパリのことは聞いたが、ヒュステルローといふ名前は聞いたことがない、クレーケルボルンも同様である。汝はまたも我我を欺き、此等の地名を拵へたのではないか。」

ライネケは國王の思慮深い言葉を聞いていやに思つた、して斯くいつた、「私は陛下にヨルダンの河畔といふやうな遠い所を御捜しなさいとは申しません。私の言葉がどうして御疑を受けるのでございませう。私は確かに信じますが、いづれもフランデルの地方で見つけることが出來るのでございます。一つ二三の者に御尋ね下さいませ、誰かがそれを保證するでございませう。クレーケルボルンとヒュステルローと申しました、してそれが地名でございます。」それから彼はランペを呼んだ。ランペが身慄ひをしながら尻込みするのを見て、ライネケは叫んだ、「汝は心配するに及ばないのだ、陛下の御命令である、此間行つた宣誓と義務とにかけて、事實其儘を言はなければならない。汝の知つただけを述べよ、してヒュステルローとクレーケルボルンの位置を語れ。さあそのことを聞かしてくれ。」

ランペはいつた、「はい申し上げます。クレーケルボルンもヒュステルローも互に近く荒野の中に横たはつて居ります。ヒュステルローと申しますのは、せむしのジモネートが其大膽な輩下と一緒に其處に隱れて、贋造貨幣を鑄造して居ります所で、私も犬のリネンの追跡をやつと遁れて其處に逃込んだ時、寒氣と飢餓とのために、様様の困苦を嘗めたことがございます。」

そこでライネケは言つた、「もう自分の席に歸つてもよろしい、汝の報告はそれで充分である。」

すると國王はライネケに言つた、「私が輕率にも汝の言葉を疑つたことを許してくれ、して其場所に私を案内して貰ひたい。」

ライネケは、「私が今日陛下の御供の中に加はり、フランデルに旅行が出來ますなら、どんなに幸福に存じませう、しかしそれは陛下に御迷惑を及ぼすことに相成ります。それはまことに申上げにくいことで、今後と雖も祕密にしたいことではございますが、どうしても申上げぬわけにはまゐりません。さてイーゼグリムは暫く前に僧の得度を受けましたが、それは主よりは、寧ろ自

分の胃腑に仕へることのためで、一個の御寺を殆ど全部喰倒してしまひました。齋に受取る食物だけでは、胃腑を充すに足りませぬので、私に餓と苦しみとを訴へて參りました。私は其痩せこけた痛痛しい容貌を見るに忍びず、眞心を盡して其困難を救うてやることにいたしました、彼は私の近親に當るのでございます。その結果私は法皇の破門を受けて居りますので、今陛下の御許を受け、一時も早く私の魂を淨めたいと存じます。それで赦免を願ふために明日日出と共に順禮の姿となつて羅馬に旅立ち、それから海に浮んで靈地の方に參りたいと思つて居ります。斯くして有らゆる罪惡を淨め、再び歸國の叶ひます曉には、立派に陛下の御供が出來るでございませう。且つ今日私が陛下の御供を敢えてしましたなら、世間の人人は陛下が死刑の宣告を下すと直ぐ、且つ法皇の破門をさへも受けてゐる私をば御供の列に御加へになつたことを不思議に思ひませう。陛下の御賢察に依り此事はひと先づ見合せにしたいと存じます。」

國王はライネケの言葉を聞いて、「それは汝のいふ通りだ、私はそのことに氣がつかなんだ、汝が破門を受けてゐるなら、汝を同道しては世間の嘲もあるであらう。泉の方へはランペか或は其他の者を連れて行かう。ライネケ、汝が赦免を受けやうといふのは勿論私も至當だと認める。汝

に暇を遣すから、明日適當な時刻に出發いたせ、私は順禮の邪魔をしやうとは思はない。汝は惡を棄てて善にかへらうとするやうに見える。神が汝の計畫に惠を與へて、旅行の完成を御助け下さるやうに。」

第六歌

斯くしてライネケは再び國王の恩寵を恢復した。其處で國王は高處に現はれ、石の上からすべての動物に向つて沈默を命じ、各員其身分及び門地に從つて草の上に坐せよと告げた。ライネケは女王の側に居た。王は愼重な調子で述べ始めた。

「諸諸の鳥獸、貧しきも富めるも、皆沈默して我がいふ所を聞け、汝等大なる者、小なる者、貴族と我が宮廷及び家庭の人人、我がいふ所を聞け。ライネケは此處に我が權力の中に在る、彼は既に絞罪に處せられんとしたものであるが、多くの祕密を我我に打明けてくれた、そこで余は彼の言を信じ、熟慮の結果再び彼に恩寵を與へようと考へて居る。これにはわが妻である女王の口添もあるので、余は彼に好意を與へ、彼と完全に和解し、彼の生命財産を保證する、依つて今後

わが平和の布告は彼を保護するものであるから、茲に諸諸の會衆に向ひ、生命にかけて次ぎの條條を命令する。汝等は如何なる場處、如何なる時に於いても、ライネケと其妻子とを尊敬すべし、尙今後ライネケに關する訴訟は一切取上げることをしない。彼の犯罪は確實である、しかしそれ等はすべて過去に屬する。今後彼は心を改めるであらう、してそれは疑のない事實である。其證據として彼は明日笈を負ひ、杖にすがり、信心な順禮として羅馬に向ひ、其處から海に浮んで靈地の參拜を心がけてゐる、彼は惡行の完全な赦免を得るまで再び歸國をせぬであらう。」

これを聞いたヒンツェは怒を含んで、ブラウンとイーゼグリムに向つた、「今こそ骨折や仕事が無駄になつた。私は此處から遠ざかりたい、若しライネケが再び王樣の氣に入りになれば、彼は我我三人を滅すために如何なる手段も厭はぬであらう。私は既に一眼を失つてゐる、も一つの眼が心配でならない、」と彼は叫んだ。

「困つたことになつた、私には何もいい方法が思ひつかない、」とブラウンは答へた。イーゼグリムはそれに對して、「奇怪千萬のことだ、私はひとつぢかに王樣の御前に行かう、」といひながら、

ブラウンを伴ひ、腹立たしげに國王と女王との御前に進みいで、言葉も荒荒しくライネケに對する樣樣のことを述べた。すると國王は言葉を荒らげ、「汝等は耳を持たないのか、余は彼に再び恩寵を與へたのだ、」と叫びながら、卽座に兩人を捕縛して獄に投じた。王はライネケから聞いた彼等一味の謀反を思ひ出したのである。

斯くしてライネケの事件は瞬くひまに主客相顚倒した、被告の彼は罪を免れ、彼を告訴した人人はかへつて屈辱を受けた。其上狐は言葉巧みに願ひながら、旅行の笈を造るために、長さ一尺巾一尺の毛皮をば熊の身體から切取つて貰つた。此笈は順禮に取つて缺くことの出來ない必要の品と思はれた。それから彼は女王に向つて靴を求め扨て斯くいうた。「女王樣私はあなたの順禮となつて旅立ちます、どうぞ私の旅行が成功いたしますやうに、あなたの御力を貸し與へ給へ。イーゼグリムは二足の立派な靴を持つて居りますから、彼は私の旅行に其一足を與へてもよろしからうと存じます。女王樣どうぞ國王陛下の御言葉に依つて、其靴を私に賜はるやう御取りなしを御願ひいたします、ギーレムントも彼女の靴を一足だけ都合が出來ると考へます、主婦は大概家の中に居るものでございますから。」

女王は此要求を至極最ものことだと考へて、「兩人は各一足の靴をやつてもよからう、」と親切にいはれた。ライネケはそれに對して御禮を述べ、嬉しげに御辭儀をしながら、「二足の立派な靴も手に入りました上からは、最早躊躇すべき時ではございませぬ。私が順禮として完成すべき有らゆる善根にはあなた及び陛下も關係をもつておゐでになります。凡そ順禮は其廻國の途上に於いて、自分に何かの補助を與へた人人のために祈らなければなりません。そんなら、神はあなたの御慈悲に報いて下さりますやうに。」

イーゼグリム君は今や前脚の靴をくろぶしの處まで剝取られ、ギーレムント夫人も亦同樣の憂目を見た、彼女は後脚の靴を渡さなければならなかつた。

斯くしてイーゼグリム夫妻は兩脚の皮と爪とを失ひ、痛痛しくもブラウンと一緒に横たはり、生きた心もなかつたのであるが、僞善者の狐は靴と笈とを手に入れて、熊と狼の前に進み、取分け狼の妻ギーレムントを嘲つた、「愛すべき善良な夫人よ、あなたの靴がどんなによく私の足に似

合ふかを見て下さい。此靴はもちもよからうと私には考へられます。あなたは私を害ふために種種骨を折つて下さつたから、私も其御返禮をやつたのですが、どうやらうまく行つたやうです。あなたは是迄幸福であつたが、今度は到頭順番が私に廻つて來ました、是が世間の定法といふもので、人は辛抱が肝要です、私が旅に出かけたなら、毎日愛すべき親戚のことを思ひ出すでありませう、あなたは其靴を喜んで私に下さつたのですから。しかしあなたはそのことを後悔なさる必要はありません、私が赦免を手に入れた時にはそれをあなたにも分けて上げます、私はその赦免をば羅馬と海の向うの聖地で貰つて來ます。」

ギーレムント夫人は烈しい苦痛のために、殆どものも言へなかつたが、それでも氣を取直して、「我我の罪を罰するために、神はあなたにすべての成功を與へるのです、」と嘆息をもらしながら彼女はいつた。しかしイーゼグリムやブラウンは横になつたきり、一言もものをいはなかつた。縛られ、傷けられ、其上敵から嘲笑を受ける、兩人の境遇は散散であつた。しかし牡猫のヒンツェは其處に居なかつた、ライネケは彼をもひどい目に逢はしてやらうと熱望した。

扨て僞善者は翌朝彼の親戚から奪取つた靴を磨き、直樣國王の御前に急いで御目見えをしながら扨ていふには、「私の貴い旅に出かける準備も整ひましてございます。此上の御願ひには、私が安心し此處を旅立ち、出るにもはいるにも、すべてに神樣の御惠がありますやうに、御慈悲をもつて陛下の牧師から祝福をして戴きたいと存じます。」國王はそのことを聞かれて、宮廷附の法敎師である牡羊にそれを命じた。彼は有らゆる宗敎上の事件を司る人で、其上國王の祕書をも勤めて居た、人人は彼をベリンと呼んだ。國王は此牡羊を御前に召されて、「今ライネケが旅に出かける所であるから、彼のために貴い詞を讀誦してやれ、彼は羅馬に巡禮し、尙海に浮んで聖地に參らうとして居る、一つ彼の背に笈をかけ、その手に杖を持たすやうに」と國王がいはれた。するとベリンはそれに答へて、「陛下よ、陛下も旣に御承知のこととは存じまするが、ライネケは未だ破門の御許を受けては居られません。若し私が御言葉の通りにいたしましたなら、私は僧正の譴責に逢ふでございませう。僧正はたやすく此事を耳にせられるでございませうし、私を罰する權力をも持つて居られます。しかし私は勿論ライネケに對して彼是申すのではございません、若しどなたなりとも此事を御取りなし下さる方がありまして、僧正のオーネグルント樣から御叱りを蒙ることなく、監督ローゼフント樣、副監督ラピアムス樣の御機嫌を害ふやうのことがありませ

ぬならば、私は御言葉に從ひ、喜んでライネケの祝福を致しませう、」と述べた。

國王は答へた、「文句や平仄がどうしたといふのだ。汝は長長としやべりながら、實のあることは何一ついはない。汝はライネケのためにどんなことでも讀まないといふなら、私は惡魔を賴んで來る。寺の僧正が何だといふのだ。ライネケが今羅馬に行かうといふのに、汝はそれを止める積りか。」おづおづしながら、ベリンは耳の後を搔き、國王の怒を怖れてゐた。そこで彼は直樣本を開いて順禮のために讀誦した、しかしライネケは殆どそれに耳を傾けなかつた。それは誰でも考へ得ることではあるが、さういふことは狐に向つて何等の働きをも持たなかつた。

扨て祝福もすみ、笈と杖とが與へられると、それで順禮は出來上つた。そこで彼は聖地の旅と伴り、涙がいたづら者の頰を流れ、鬚までも濡らして、彼は心から悔悟を感ずるもののやうに見えた。彼が自分の敵を殘らず不幸に陷れることが出來ず、單に其中の三人だけを苦しめたにすぎないことに流石に心殘りがあつても、兎も角も立上り、出來るだけ眞心をこめて彼のために祈つて貰ひたいと人人に願つた。彼はいよいよ出立せんとすると、流石に自分の罪を思ひ、心に不安

を感ずるのであつた。其時國王が、「ライネケ、汝はひどく急ぐやうだが、なぜそのやうに先を急ぐのか、」といはれると、「善はいそげと申すこともございます、然らば御別れといたしまする。仁慈なる陛下よ、時刻は參りました。それなら出かけることにいたしませう、」とライネケが答へた。「行つておいで、」と國王はいつて、御所の有らゆる人人に命じ伴りの順禮をば暫くの間見送らした。此時ブラウンとイーゼグリムは苦痛の中に捕はれてゐたのだ。

斯くしてライネケは完全に國王の寵愛を獲得した。して堂堂と御所を後にし、笈を肩にし杖にすがつて、聖地の順禮に赴くもののやうに見せた。しかし聖地が彼に取つて何の値打もないことは五月樹(マイバウム)のアーヘンに於ける[一四]と同樣であつて、彼の目的とする所は全然違ふ方向にあつた。彼は國王の麻のやうな鬚や、蠟のやうな鼻を引廻すことが出來た。彼を告訴した人人は彼に從ひ、彼の門出を見送らなければならなかつた。それでも彼は詭計をやめるわけには行かなかつた、出立に臨んで彼は言つた、「仁慈なる陛下よ、二人の謀反人をば注意して牢獄に監禁し、逃がさぬ御要心が肝要でございます。彼等若し再び自由の身となりましたなら、かの破廉恥なる計畫をば重ねて行ふでございませう。さすれば陛下よ、あなたの御身が危險でございます。それを御考へ下さ

いませ。」

彼は如何にも本心から出たもののやうに、靜かに敬虔な態度と素朴な樣子をしながら、とぼとぼと歩いた。國王はすべての獸類を後に從へて宮殿に歸つた。國王の命令によつてライネケは暫くの間諸人の見送を受けたが、いたづら者はおづおづと如何にも悲しげな樣子に見えたので、多くの溫和な人人は覺えず彼に對する同情の念に襲はれるのであつた。兎のランペは殊に悲しさうな風をするので、それを見て取つたいたづら者は、「親愛なランペよ、御別れの時がもう來たのかね。汝と牡羊のベリンだけは、若しそのことがいやでないなら、今日はひとつもつと先きまで見送つて貰ひたい。汝達が一緒に來ておくれだと、私はどんなに有りがたいであらう。汝達は愉快な同伴者で、正直な人人だ。誰一人汝達のことを惡くいふものはゐない、つまり汝達と一緒だと私は扁幅がひろくなるのだ。汝達は御寺の關係者で、恰度私が修道僧として生活したやうに、貴い生活を送つてゐる。汝達は常に野菜だけで滿足し、木の葉や、草で餓を凌ぎ、パンや肉や其他特別の食物を求めやうとはしない。」

斯くいひながら、彼はその弱點の讃美に依つて彼等兩人をたぶらかすことが出來た、二人は狐と一緒に彼の住居に向ひ、既にマレパルトウスの城も近くなつた時、ライネケは牡羊にいつた、「ベリンよ、汝は外に居て、思ふがままに草を食べるがいい、此山には味もよく、滋養にもなる植物が澤山にあるのだ。ランペは私が連れて行かう、ひとつ悲嘆に沈んで居る私の妻を慰めるやうに賴んで下さい。若し私が順禮となつて羅馬に旅立つと聞いたら妻は絶望に陷るだらう。」狐は二人をだますために甘言を用ひた。彼はランペを中に入れると、其處には悲しげな妻が大なる心配の壓迫を受けて子供達の側に横たはつて居た。彼女はライネケが再び御所から歸るものとは考へてゐなかつた。その夫が今や笈と杖とを以て彼女の前に立つた。彼女は不思議に思ひながら、「わが愛するラインハルトよ、あなたは一體どうしたのです、どういふことに逢つたのです、」と尋ねた。彼はそれに答へた、「私は既に宣告を受け、繩目の耻辱を受けたのであるが、王様の御慈悲に依つて再び免れることが出來た。して私は斯様な順禮姿となつて御所を出て來る、ブラウンとイーゼグリムは人質となつて後に殘つてゐる。して王様は賠償として此處に居るランペを私に下賜せられた、我我は此兎をばどうとも好きなやうに扱ふことが出來る、つまり王様は私を裏切つたのはランペであることを詳かに話して下された。斯ういふわけで兎は全く重罪に當るものであ

るから、私に對して一切の償ひをしなければならない。」ランペはこれを聞いてびつくり仰天しながら、急いで外に逃げやうとしたが、ライネケはす早く出口を遮斷して、憐れな兎の首筋を捕へた。兎は聲高に、救助を求めて、「助けてくれベリンよ、大變だ、順禮が私を殺すのだ、」とけたたましく叫んだ。しかしその叫びさへそんなに長くは續かなかつた、ライネケは直様彼の喉笛を喰ひ破つた。彼は自家の賓客に對して斯ういふ待遇をしたのである。彼は言つた、「さあお出で、早く喰べることにしよう。兎は太つて味ひも好い、此馬鹿者が何かの役に立つのは今度が始めてだ、私は長い間此奴を殺さうと思つてゐたのだ。しかしもうおしまひだ、告訴するなら誰でもしろ。」ライネケは妻子と一緒に兎に近寄り、すばやく毛皮を剝取り、一同愉快な氣持でそれを喰つた。此御馳走は狐の妻に取つて殊においしく思はれた、彼女は、「王様と女王が有りがたい、我我はその恩惠に依つて立派な食事に有りつくことが出來た。神様、どうぞその報いをばして賜はれ、」と幾度も叫んだ。ライネケは言つた、「さあおあがり今日の食事には是で充分だ、我我一同は滿足が出來る。其中他の誰彼も捕つて來よう。此ライネケに何かの危害を加へやうとしたものは、いづれ其勘定をしなければならない。」

すると妻のエルメリンは夫に向つて、「一つ話して下さい、あなたはどうして自由の身になれたのです、」と尋ねた。狐は、「私がうまく王様の機嫌を取直し、彼と女王を欺きおふせた一部始終は話すに澤山の時間がいる。しかし私と王様との友情は單に稀薄なもので、とても永續は出來さうにない、是は汝に對しても否認するわけには行かない。若し王様が事件の眞相を悟るやうになつたら、それこそ彼は怖しい憤怒に陷るであらう。だから此次ぎも一度王様の手に落ちたら、金でも銀でも私を救ふわけに行かない。王様はきつと私の後を追ひ、私を捕へやうとするであらう、私は最早王様から恩寵を期待することは出來ない、それは私にもよく解つてゐる、彼は私を絞め殺さずには置かないであらう、我我は安全な方法を考へなければならない。

「一つシュワーベンに逃げることにしよう。其處には我我を知つてゐる人は一人も居ないから、我我は其土地の風に從つて生活をしよう。神様、そこには鷄、鷲鳥、野兎、飼兎、砂糖、棗、無花果、乾葡萄、有らゆる種類の鳥類など、おいしい食物があり、すべてのものが潤澤に見つかる。彼處ではパンを燒くのにバタと卵を入れる。それに水は清らかに澄んで居るし、空氣は晴やかで氣持がいい。そこは魚類が豐富で、ガリネやブルス、ガルス、アナス[一五]など一一數へあげるのも煩

はしい、してそれは皆私の好きなものばかりで、それを捕るのに深く水中に潜ることを要しない、私は修道僧の時代にいつも魚類だけで生活したものだ。妻よ、若し我我が平和を享樂しやうと思ふならば、彼處に移住する必要がある、して汝も私と一緒に來るのだ。

「これは汝に話して置かなければならないことであるが、今度王様が私を宥してくれたのは、私が珍しいもので彼を欺いたからだ。私は彼にエメリッヒ王の立派な財寶を獻上するといふ約束をして、その品物がクレーケルボルンの附近にあるといふ說明がしてある。たとひ人人が其處を搜しても、氣の毒ながら何一つ見つかるといふことはなく、彼等はただ無駄に地面を掘起すにすぎないであらう。して若し王様がたばかられたと悟つたなら、それこそひどい憤怒に陷るに違ひない。私は放免される前にどんな虛言を構へたかは汝に想像のつくことである。全くそれは首にも拘はる大事で、私はあんな困難に遭遇したこともなく、またあんなにひどく心配したこともなかつた。いやいや、私はあのやうな危險にはもう此上二度と逢ひたくはない。要するにだ、たとひ此後どういふことが起らうとも、何人が私に勸めたにしても、再び御所に出て、王様の手に私の身を委ねやうとは思はない。實際王様の口から私の母指をやつと拔出すことのためには最大の

技倆を要したのだ。」

×すると妻のエルメリンは悲しげに言つた、「それは一體どうなるのでせう。一旦他國の人となれば、私達は浮浪者であり、孤獨でもあります、しかし此處では萬事が私達の望み通りになり、あなたは百姓の親分で居られる身なのです。一體あなたはそんな危險を冒さなければならないのでせうか、確さを棄てて不確なことを選ぶのは決して得策といふわけでなく、また賞むべきことでもありますまい。私達のためには此處がどんなに安全でせう。御城はこの通り堅固であり、たとひ王様が軍勢を率ゐて攻め寄せても、たとひ兵力を以て嚴重に國道を封鎖しても、此處には澤山の入口や抜路があります、私達は好都合にぬけ出すことが出來るでせう。しかしそれはあなたのよく知つて居られることで、今更私の言葉を待つまでもありますまい。若し私達を力づくで手に入れやうとすれば、多くの困難がそれに伴ふのですから、私はそのことに就いて少しの心配もして居りません。しかしあなたが海を渡るといふ御話を聞くと私は悲しくなります、私達は此先どうなるといふのでせう。」

するとライネケは答へた、「愛する妻よ、心配をするな。まあ、私のいふことをよく聞いておくれ。宣誓は破滅に比べると勝つてゐる。意志に反する宣誓には效力がないといつか坊様が私にいはれた。だから私の行つた宣誓は決して私に拘束力をもつものではない。誤解してくれるな、私のいふのは宣誓のことだよ。萬事汝のいふ通りでいい、私は家にゐることにしよう。羅馬に何の用事もない、たとひ十回宣誓を行つても、私はゼルサレムなどに行かうとは思はない、私は汝と一緒に居る、して其方が勿論愉快なのだ、自分の家に勝る所はどこにもない。王様が私を苦めやうと思ふなら私はそれを引受けることにしよう。勿論王様は私に取つて苦手ではあるが、しかし再び彼を欺き、鈴のついた美しい帽子を彼の耳にかぶせることも出來るであらう。私がそれまで存へて居たら、王様はそれを案外に思ふだらう。私はきつとそれをやるよ。」×

ベリンはいらいらしながら、門の處で怒鳴り始めた。「ランペ、もう歸らうぢやないか、さあ出て來い、一緒に歸ることにしよう。」ライネケはそれを聞くと飛び出して來て言つた、「ランペは汝さんに許してくれるやうにいうてゐるよ、彼は家の中で私の家内と愉快に遊んでゐるのだ、それで構はずほつて置いてくれと彼もいうてゐるし、一つそろそろ先きに行つてて貰ひたい、家内は

直ぐには彼を離しさうに見えないのだが、汝さんは其喜びの邪魔はしないだらうと思ふ。」

するとベリンは答へた、「私は何だか人の叫ぶ聲を聞いたのですが、あれは何です。それがランペの聲で、ベリン、助けて、助けて、と私に叫んだのですが、あなた方は何か悪いことをしたのぢやありませんか。」すると悧巧なライネケは、「私が貴い順禮の話をすると、私の家内はそれを聞いて全く絶望に陷りさうになつた、死ぬ程の恐怖に襲はれて、家内は氣絶をして倒れてしまつたので、ランペはそれを見るなりびつくりして、夢中で、助けて、助けて、ベリン、早く來てくれ、伯母さんはもう助かるまいと叫んだのだ。」

「彼が苦しさうに叫んだことだけは確かなのですが、」とベリンがいふと、僞者は誓ひを立てて、「彼には髪の毛一筋も害はれはしない、それどころかランペよりも私自身に何か悪いことが起るかも知れないのだ、」などと語つてから、「聞いておくれ、昨日王様は私が家に歸つたなら、或る重大な事件に關する私の意見を書面で申上げるやうにと命ぜられた。其書面はもう出來てゐるのだから、御苦勞だがひとつ王様に差上げて貰ひたい。私は此中に種種立派なことを述べて、最も賢

明な建言がしてある。ランペは私の家内と樂しく昔の物語をしてゐて、二人の話はいつまで立つても盡きるといふことがなかつた。二人は喰べたり飲んだり、御互に樂しく遊んでゐた、その際を見て私は此書面を認めたのだ。」

ベリンはいつた、「愛するラインハルトよ、一つ其書面を善く包んで頂きたい、私はそれを入れようにも袋といふものがないのです。もしその封が切れることでもあつたら、それこそ私はひどい目に逢はなければなりません。」ライネケは、「それは承知だ。私がブラウンの毛皮でこさへたあの笈が恰度よいかも知れない。あれは厚くて丈夫だから、私は其中に書面を入れることにしよう。王様はきつと汝の勞力に對して特別にねぎらひ、名譽をもつて汝さんを迎へ、どんなに喜んで此書面を受取つて下さるだらう。」牡羊のベリンは一切のことを信用した。すると狐は中にはいつて笈を取出し、殺されたランペの首をすばやく其中に押込みながら、あはれなベリンに此袋を開けさせない方法を考へた。

再び外に出て彼はいつた、「さあ此笈を首にかけてお出で、して此書面を見たいといふ氣を起し

てはならないよ、それは怖しい好奇心だから。私は書面をよく包んである、決してそれに手をつけてはいけない。此笈だけでも開いてはならない、私は其結目を上手に結んで置いたが、是れは王様と私との中で重大なものの受渡にはいつもする方法なのだ、若し王様がそれを御覽になつて、紐がいつもの通りに結ばれてゐれば、汝さんは信用の出來る使者と認められて、王様の恩惠と賜物を受取るだらう。さうだ若し汝さんが王様から此上の重用を望んでゐるなら、御目通りが出來ると直ぐ、此書面を苦心して保管したことや、そればかりでなく、書面の出し人である私に手傳つてくれたことなんどをほのめかした方がよろしい、それは汝さんのために利益にもなり、名譽にもなる。」

ベリンはそれを聞いて非常に喜び、嬉しげに飛び上り、あちらこちらと踊り出しながらいつた、「ライネケよ、あなたは私を愛してゐる、私の名譽を願つてゐる、今こそそれが解りました。私がそのやうに立派な意見や、美しい、綺麗な言語を書き綴るといふことが解ると、私は御所の有らゆる人人に勝つて名譽を荷ふでありませう。勿論私はあなたのやうには書けないのですが、人人はそれを私の書いたものだと思ふでせう、私はあなたに御禮を申述べます。私があなたと一緒

に此處まで來たのは思ひがけない幸福でした。扨てあなたはどういふ考へをもつてゐられるでせう、私はランベと一緒に今直ぐ歸るわけには行きませんか。」

「いや、私のいふことを考へてくれ、」いたづら者がいつた、「それは未だいけない。そろそろ行つておいで、私は大事なことを彼に打明けたり、いひつけたりしなければならない、それがすむと直ぐに後から追ひつかせよう。」「では御機嫌よう、私は御暇をいたします、」といひながらベリンは道を急いで、晝頃王様の御所に着いた。

國王はベリンの姿と笈を認めて、「ベリン、汝は一體どこから來たのだ。ライネケは何處に居る。汝は笈をかついでゐるが、それはどうしたわけなのだ、」といはれると、ベリンは、「陛下よ、私は二通の書面を陛下に差上げるやうにライネケから頼まれてまゐりました。此書面は私共二人で一緒に考案したのでございます。陛下は此中に最も重大な事件が精細に取扱はれてゐることを御覽になりませう、其内容は私の助言で出來たものでございます。して書面は此笈の中にはいつて居りますが、紐は彼自らが結んだのでございます。」

國王は其笈を直様海狸に渡さしめた、彼は國王の文書係で、人人は彼をボケルトと呼んで居り、重大な書面を國王の御前で讀むのが彼の役目であつた、彼は様様の國語に通じてゐた。國王は其上ヒンツェに使をやつて、此場に立合ふやうにと命令した。ボケルトは彼の相役であるヒンツェと一緒に包を開くと、驚くべし中から殺された兎の首が現はれて來た。海狸は叫んだ、「これが一體書面なのか。不可思議千萬のことだ。誰が此書面を書き、誰がこれを解釋するのだ。これはランペの首で、それは誰にも否認の出來ぬことだ。」

國王と女王はびつくりした。して國王は首をうな垂れて斯くいつた、「おお、ライネケ、私は汝をつかまへてやりたい。」國王と女王は共に非常な悲しみに落ちた。國王は叫んだ、「ライネケが私を欺いたのだ。ああ、私は憎むべき彼の虚言に耳を傾けるのではなかつた。」斯く叫びながら國王の心はかき亂れた、有らゆる動物も彼と一緒に途方に暮れるのであつた。

すると國王の近親者なるルバルドゥスが口を切つた、「全くです、私には何故あなたが其様に悲しまれるのかわかりません、女王様でも御同様です。こんな考へは止めになされて、どうぞ氣を

取直して頂きたい、さもないと此事が何よりも先きにあなたの不名譽になるかも知れません。あなたは君主ではありませんか。今此處に居る人人は皆あなたの命を奉ずるのです。」

「まさしくそのことのためだ、」國王は答へた、「私が心に悲しみを持つのを怪んでくれるな。殘念ながら私がわるかつた。あの僞者奴が憎むべき奸計に依つて私の心を動かし、私の友人を處罰した。其處にブラウンとイーゼグリムが恥辱を受けて横たはつて居る、私は心からそれを後悔するのだ。私がわが宮廷の中の最もすぐれた貴族をあのやうに虐待し、僞者にあれ程の信用を與へ、輕率に取扱つたといふことは、決して私の名譽にはならない。私は妻の言葉を信じすぎた、彼女は甘言にたばかられて、彼のために嘆願した。ああ、私はもつと强固な意志を持つとよかつた。しかしもう後悔は先に立たない、すべての忠告も今は無益だ。」

するとルバルドゥスはいつた、「陛下、もう悲しみはやめになされて、私の願をお聞き下さい。過去の禍も取りかへすべき方法はあります。先づ熊と狼と狼の妻に賠償として牡羊をお遣りなさい。と申しますのは、ベリンは大びらに大膽にランペを殺さしめたことを自白して居ります、だから

彼は今其罪の償ひをしなければなりません。それから私共は一緒にライネケの城に攻入り、うまくいつたら彼を生捕り、急いで彼を絞殺いたしませう。彼が一度口を開くと、辯舌を振つてつい絞殺をも免れることになります。私は確かに存じて居りますが、あの人人は氣嫌を直すでございませう。」

國王は喜んでルパルドゥスにいつた、「汝の言葉は私の氣に入つた。そんなら急いで二人の貴族を此處に呼べ、彼等は今までのやうに名譽ある顧問として私の側に坐らなければならない。先程此處に居つたすべての動物を全部一緒に集めて來い、ライネケの憎むべき欺瞞と、其逃亡と彼がベリンと一緒にランペを殺した一部始終を人人に告げなければならない、諸人は畏敬の念を以て狼と熊を待遇しなければならない、して私は汝の忠告に從ひ僞者のベリン及び其一族をば賠償として永世此人人に與ふるものである。」

するとルパルドゥスは急いで二人の囚人ブラウン及びイーゼグリムの許に行つた。二人の繩は解かれた。彼はいつた、「私は陛下の固い平和と安全の保證を持つて來ました。私のいふことを聞

いて下さい、陛下は諸君になされた不幸を遺憾に思召され、諸君の和解を望んでおゐでになります。して其賠償としてはベリンと其一族親戚を永世に亙りて下賜せられます。諸君は森林の中でも野原の上でも其儘彼等を捕へてよろしい、彼等すべては諸君に與へられて居ります。以上のことに加へてなほ我等の仁慈なる陛下は諸君を裏切つたライネケに對してはすべての方法に依つて害を與へることを御許しになります、彼、彼の妻及び兒等、其他一切の親戚は見當り次第追ひ詰めてよろしい、何人も諸君に對して其行爲を妨げることが出來ない。斯の如き貴重な自由をば今私は陛下の御名に於いて宣言します。陛下及び陛下の下に在る有司は必らず此約束に違背しない。ただ諸君は過去の不快を忘れ、陛下に對する忠誠と奉仕とを誓つて頂きたい、諸君は名譽を以てそれをなすことが出來る。陛下は將來再び諸君を傷けることはなさらない、私は此提言を受けられるやう諸君に御勸めいたします。」

かくして賠償は決定せられ、牡羊は其首を以て其賠償を支拂はなければならなかつた。して彼の親戚は皆悉くイーゼグリムの强大な一族に迫害せられ、永遠の憎みは此處に始まつた。今や狼は畏れ憚る所なしに小羊や羊の中に亂入することを續けた、彼は權利が自己に屬するもののやう

に信じた。何者も彼等の怒を免れることは出來なかつた、彼等は永遠に和睦することがなかつた。國王はブラウンとイーゼグリムのために會議を十二日間延長した、彼は此兩人を和解することが、どんなに眞面目のことであるかを公に示さうと思つたのであつた。

第七歌

今や宮廷は素晴らしく立派に準備せられた、多くの騎士が其處に集つた、有らゆる獸類の後に無數の鳥類が續き、すべては高くブラウンとイーゼグリムとを尊敬したので、二人は自分達の苦惱をも忘れてしまつた。其處で是まで集つたことのないやうな最良の仲間が莊嚴な樂みを味ひ、喇叭や太鼓がひびき、御所の舞踏が典雅な仕方で踊られた。各人の希望は有り餘る程に準備せられ、使者は賓客を招待するために、前後して地方に赴き、獸類も鳥類も旅に出ては、相手を求めて歸つて來る、彼等は晝も夜も出發して、急いで再び歸つて來る。

しかしライネケ・フックスだけは家に留つて樣子をうかがひ、伴りの順禮である彼は御所に行かうと考へてはゐなかつた、彼は御所に行つても感謝を豫期することが出來なかつた。いたづら者

の最も好きなことは、今までの習慣に從つて其奸計を行ふことにあつた。御所では最も美しい歌聲がひびき、競技が催され、各人は其家族と一緒に或は踊り或は歌ひ、其間には笛や木笛の音も聞えた。國王は彼の室からやさしく一同を見やり、喜びを以てそれを眺める、此大なる雜踏が彼自身にも氣に入つてゐたのだ。

そのうち一週間がすぎると（此時國王は彼の最高の貴族と一緒に食卓に就き、女王は其側に坐つてゐたのだが）、家兎が血にまみれて國王の御前に進み、悲しい心でかく話した。

「陛下、國王陛下、及び御列席の方方、この私を憐ませ給へ。皆樣はライネケが私に仕向けた如き、意地のわるい背信と殘忍な行爲とを殆ど耳にせられたことがございますまい。昨日の朝、それは六時と覺えましたが、私がマレパルトウスの前を通りますと、其處にライネケが居りました。私は何の氣もなく其處を通りすぎやうとしますと、彼は朝の祈禱を讀誦するもののやうに、順禮の姿で門前に居たのでございます。私は御所に參りますため、急いで路をたどりますと、彼は私の姿を認めるとすぐ、起き上りさま私の方に進んで參りました、私は彼が挨拶をするのだらうと思